るのでは無く、戰爭もあるのでは無く、唯だその時代の人物たちが、實際の事を行つて居るやうな顏を爲て演じて居る人形芝居のやうなものがあるばかりだとさへ、固く思ひ込んで居た。公爵アンドレエーは、近代人に對する父親の冷評を面白がつて受け取つた、そして、さも愉快さうに、父親の談話を誘致だして、聞き入つた。

『昔時のことは何物でも善く見えるんですかね』と、云つて、『もし、スヴォーロフその人がモロオが掛けた係蹄に掛つたし、又それから脫け出られ無かつたぢやァありませんか』

『誰がさうお前に話たな？　誰がさう云つたんかい』と、公爵は叫んだ。『スヴォーロフ』。で、彼は自分の皿を擲つたが、ティフォンが巧く受けた。『スヴォーロフ……考へて見い、公爵アンドレエー。豪い人物が二人有つた――フリイドリッヒとスヴォーロフだ……。なに、モロオ。モロオはスヴォーロフの手が自由であつたら、彼の捕虜に爲るのであつた、けれども、スヴォーロフの手が宮中――戰爭――腸詰――火酒――會議で縛られて居つたのだ、惡魔自身でさへ進退谷まらうといふ場合だ。あゝ、お前も今やがて、さういふ宮中――戰爭――腸詰――火酒――會議が何んなものだか知るだらう。スヴォーロフはそれを壓し付け得無かつた、で、ミハーイル・クツウゾフはそれを何うするのであらうな。いゝや、駄目だ、なア、お前』と、言辭を繼いで、『では、お前も、お前の將軍たちもボナパルトをやつ付けることは能き無いのかい、お前たちは、佛蘭西人を呼んで來にやァならんね――盜人を捕へる爲めに盜人を雇ふのかな。獨逸人のバアレンが、佛蘭西人のモロオを雇ふ爲めに亞米利加の紐育へ遣られた』、斯う、その年露西亞の軍隊に入るやうにとモロオを招いたことに言ひ及んだ。『ヘンなことだ。……おい、ボティヨームプキンだの、スヴォーロフだの、オルロフなどといふ人間は、悉皆獨逸人なのかい。いゝや、お前たちが全然本性を失つて了まつたか、それとも私が毫祿し

たか、これは孰方かだな。まア巧くやらつしやい、私は見て居らう。ボナパルトが今の世の大名將に爲つたのだな。ふうん』

『彼樣いふ軍略が悉皆良いと云つたんぢやァ決して有りません』と、公爵アンドレエーは云つた、『唯だ何うして乃父がボナパルトを左樣見くびつておいでなのかそれが解らんのです。笑ふならばお笑ひなすつても宜いが、ボナパルトは右に左名將ですぜ』

『ミハーイル・イヴァーノヴィーチ』と、老公爵は、炙肉に氣を取られて、衆皆が自分のことは忘れて了まつて呉れゝば宜いがと希つて居た建築技師に叫んだ。『ボナパルトは大軍略家だと私は貴下に云は無かつたかね。おい、彼男も左樣云つて居るよ』

『確に左樣で、閣下』と、建築技師が答へた。公爵は再冷たい笑ひやうを爲た。

『ボナパルトは銀の食匕を啣へて生まれて來たのだ（幸運に生れ付いたといふ事）。彼は非常な良い兵を持つて居る。而も彼は最初獨逸人を攻めた。所で、何んな痴者でも獨逸人は破ぶれるのだ。世界始まつて以來、誰も彼も獨逸人を破ぶつて居る。が、獨逸人は誰にも勝つて居らん。唯だ國內同士で勝ち合つて居つたゞけだ。ボナパルトはさういふ獨逸人と戰つて名を成したのだ』

で、公爵は、自分の說では、ボナパルトが軍事及び政治の上で爲した失策だと思はれる事柄を一々解剖し だした。子息は反駁し無かつた、が、何んな議論を幾ら向けても、彼も老公爵同樣自分の說を撤回しさうには無かつた。公爵アンドレエーは聞いて居るのみで、返答を控へた。彼は、最早長いこと何年も田舍へ引込んだ切りで世間と交際ずに暮して居るこの老人が、何うして、この二三年來の歐羅巴の軍事上、政治上の有らゆる事件を能く斯うまで詳しく且斯うまで正確に知つて、それに就いて自分の判斷を下し得たものだらう

かと驚かず無い譯には行かず無かつた。

『お前たちは、私が老人で、現在の事態が解らんと思うて居るかね』と、言辭を結び掛けた。『が、私はそれにばかり氣を取られて居るのだわな。夜も寢はせんのだ。おい、お前たちのこの所謂る名將が何處で名將たる所以を自ら證明したかね』

『その話は餘程長く掛ります』と、子息は答へた。

『うん、では、お前はボナパルトの方へ行け。マドモアゼル・ブウリアンヌ、此所にも貴女の大盜賊の皇帝に感服して居る者がありますわい』と、老公爵は見事な佛蘭西語で叫んだ。

『私はボナパルト黨では無いぢやございませんか、公爵』

『何時歸へることやら……』と、公爵は假聲で謠ひ、尙一層高い假聲で笑つて、そして、食卓から起つた。

小さい公爵夫人は、議論の間全然と、食事の其他の時間ぢう、默つて坐つて、心配さうに、最初は公爵嬢マリイヤ、次には舅と、一寸々々雙方の顏ばかり見て居た。衆皆が食卓を離れると、義妹の手を取つて、他の部室へ伴れ込んだ。

『何んて賢い方なんでせうね、貴女の父上樣は』と、公爵夫人は云つた。『だから、私恐く思ふのかも知れ無い』

『あら、それは、〳〵親切な人よ』と、公爵嬢マリイヤは云つた。

（三十六）

その次の晩、公爵アンドレエーは、立たうと爲て居た。老公爵は、何時もの規定を破らずに、食事後自分の部室へ行つて了まつた。小さい公爵夫人は義妹の所に居た。公爵アンドレエーは、着換へて、肩章の無い旅行服を着て、自分のに充てられた部室で侍僕と二人で荷造りを爲て居た。自分で馬車とその上の荷の捆げ方を見分してから、馬を着けるやうに言ひ付けた。部室は最早公爵アンドレエーが何時も携つて歩く物の外何物も殘つて居無かつた、旅行函、大きい銀の酒入れ、二つの土耳古短銃、オチャアロフの配下での戰役から持つて歸つた、父親から讓られた軍刀などであつた。公爵アンドレエーの旅荷物は悉皆善く整のつて居た、何れも此れも新しく、清潔で、布の蓋が掛かり、丁寧に平打紐で縛ばつてあつた。

家を出て、違つた生活を始めやうとする時には、自分の行動を考へて見る習慣の人は大抵極く眞面目な心持に爲るものなのだ。さういふ刹那には、人は自分の過去を顧み、そして、將來の策を建てるものなのだ。公爵アンドレエーの顏は甚く夢みるやうで、そして、優しかつた。背部で手を握り合せて、彼は、前の方を眞直に見、夢みるやうに頭を振りながら、部室を隅から隅へと彼方此方速歩に歩いて居た。戰爭に出るのを恐く思つたのか、或は、妻を捨てるのを悲しんで居たのか、——或は又、兩方とも幾らかづゝあつたのか知れぬが——彼は、明白にさういふ心持で居るのを人に覺られ度く無かつたのだ、と云ふのは、外の部室で重い足音を聞くといふと、急いで手を解いて、函の被蓋を結び付けに掛かつて居るかのやうに、卓子の所に立つて、何時もの、落着た覗ひ難い表情に爲つたからだ。それは、公爵嬢マリイヤの重い足音であつた。

『貴下が馬を着けろとお言ひ付けなすつたつて云つてますんで』と、マリイヤは、喘ぎながら、云つた、（明白に駈けて來たのだ）、『で、私貴下と二人つ切りでもう少し話し度いもんですからね。また何れだけ長くお眼に掛れ無いか分から無いんですもの。貴下私が來たのを怒りやア爲無くつて？　貴下甚く變つたのね

え、アンヅルウーシャ』、問題を說明するとでも云ひさうに、斯う云ひ足した。

公爵孃は『アンヅルウーシャ』と云ひながら微笑んだ。この氣嚴づかしさうな顏の、奇麗な男が、自分の小兒の自分の遊び友達であつた痩せた惡戲好きの男の兒アンヅルウーシャと同なじ人だとは、考へて見れば公爵孃には不思議な氣が爲るのらしかつた。

『で、リザは何處だね』、妹の問には唯だ微笑だけで答へて、公爵は、斯う尋いた。

『甚く疲れて、私の部室の長椅子で寢込んで了まつた位よ。ねえ、アンドレエー、貴下は眞個に良い奧樣を貰つたことねえ』と、長椅子に坐つて、兄に向いた。『眞個に小兒のやうに無邪氣よ、眞個に可愛い賬やかな小兒よ。私彼の人が眞個に好きなの』。公爵アンドレエーは何とも云は無かつた、が、公爵孃は、兄の顏に出て來た皮肉な侮蔑むやうな表情に氣が付いた。

『だけども、誰だつて少許した弱點は許さ無ければ不可いことよ。さういふ所の無い人が何處にあつて、アンドレエー?。貴下は、彼の方が交際社會で生長し、其所で敎育された女なのを忘れては不可くつてよ。それに、彼の方の位地は餘まり心持の好いんぢやア無かつたの。人は誰でも位地へ自分を置て見無きやアなら無いものよ。何物でもを理解するつてことは何物でもを宥すことなんだわ。これまで彼樣云つた暮し方で來て、急に夫に別れ、而かも、今のやうな身體で、田舍へ獨り取り殘されるのは、彼の方に取つて何んなだか、少しやア考へてあげてくださいよ。そりやア隨分辛いわ』

公爵アンドレエーは微笑んだ、われ〳〵がその腹を見透したと思つて居る人々の談話を聞いて居る時のやうな顏で妹を見た。

『お前は田舍で暮して居ながら、田舍の生活を其樣に甚く厭に思ふのかい』

『私——それは全く別な話よ。何だつて私のことなんぞ持ち出すのよ?。私はこれより外の生活を願はいし、又實際今のと異つたことを願ふことも能き無いんですよ、だつて、私これより外の生活は何んなのも知ら無いぢや有りませんか。だけども、アンドレエー、華美な交際社會に慣れた若い女の人に取つて、唯つた一人田舍で若盛りを埋められて了まふんだつたら、何んな氣が爲るか、まア一寸考へて見てあげてくださいよ。唯つた一人なのよ、父上樣は一日中用に掛つて居るでせう、それから、私……貴下の知つてる通りよ……私は、上流の交際社會に慣れた女の人の面白い相手ぢやア無いぢやア有りませんか。マドモアゼル・ブウリアンヌが唯つた一人……』

『いや、私は何うも好か無いんだ、あのブウリアンヌは』

『あら、いゝえ、彼の女は極く氣質の優しい良い娘なのよ、それに、それは〳〵氣の毒な身の上よ。近親といふものが誰も無いの、眞個に誰も無いのよ。實を云ひますとね、私最早彼の女は要ら無いの、唯だ邪魔になるばかしなのよ。私は、貴下も知つてる通り、昔つから、獨で居るのが好きな人間なんでせう、それに、この頃はだん〳〵甚く左樣なつて來たんですよ。私獨が好きなの。父上樣は彼の女が大變好きなの。父上樣が、親しく機嫌好く爲るのは、彼の女とミハーイル・イヴァーノヴィーチにだけなのよ、父上樣は、彼の二人には恩人なんですもの、それは、ステルヌの謂つた通りよ、「我等は我等に對して善を爲したる人々よりも、我等がそれに對して善を爲したる人々を、多く愛するものなり」。父上樣は彼の女が孤兒だつたのを街路で拾ひ上たのよ、彼の女は眞個に人の好い娘ですわ。父上樣は、彼の女の書籍の讀み方が氣に入つてるの。彼の女は、毎晩父上樣に高い聲で書籍を讀んであげるのよ。眞個に讀み方が巧いんですよ』

『おい、打ち明けて話しなさい、マリイ、父上樣の氣象の爲めに、時々は、隨分苦勞するんだね?』、公爵

アンドレエーは、不意に尋いた。公爵嬢マリイヤは、最初は吃驚したが、直ぐその問に對して蒼く爲つた。

『私？……私？……私が苦勞つて』

『父上樣は昔つから嚴しい人だ、けれども、この頃はだん〳〵煩瑣なつて來たらしいね』と、公爵アンドレエーは、妹を困らせやうと爲るのか、試めさうと爲るのか、確に孰方かの積りらしく、父親のことを如何にも侮蔑したやうな風で、云つた。

『貴下は何から云つても善い人よ、けども、智力の誇と云つたやうなものがありまゝのね』、公爵嬢マリイヤは、確に、談話の絲筋よりは自分の方の考想の道をたどつて居るらしく、斯う云つて、『で、それは大きい罪なんですよ。父上樣を批評して善いものと貴下は思つて？。若し善いにしたつて、父上樣のやうな方に對しては尊敬より外の感情は起りやうが無いぢやア有りませんか？。私は父上樣と一緒なら滿足して、幸福に暮して居られるわ。私は貴下たち衆皆が私と同なじやうに幸福であることばかし望ましいんだわ』

兄は未だ合點せぬ態で頭を振つた。

『私心配になる唯つた一つの事はね、――打ち明けて云ひますよ、アンドレエー、――宗教上の事柄に就ての父上樣の考想なのよ。彼樣な優れた智力の方が、何うして、この晝のやうに明白なことを見ることが能き無いで、彼樣な過失に陷つておいでなのか、私何うしても解りませんの。これだけが私の心配なのよ。だけども、これさへ、何時かぢうから善い方へ少許變つて來たらしいのよ。この頃は、冷嘲も往時ほど酷くは無く爲つて來て、それに、父上樣が逢つて、長いこと話してることがある修道士が一人出來たんですよ』

『おい、お前、お前もその修道士も烟硝や彈丸を無駄に損してゐんぢやア無いかね』と、公爵アンドレエーは、皮肉に然し優しく云つた。

『あら、隨分、私は私の願を聽いてくださるやうに、神樣に祈つて、お凭りまをすだけなんだわ。アンドレエー、ねえ』と、マリイヤは少時默まつて居てから、オヅ〳〵云つて、『貴下に後生一生のお願があるんですがねえ』

『何ういふことだね、お前』

『いゝえ、何うしても厭だと云は無いと前に約束してください。貴下の寸毫も困まることぢやア無いの、貴下に取つて可笑しいことぢやア決して無いのよ。唯だそれは、私に取つて慰藉になることなのよ。約束してください、アンヅルウーシャ』と、手提袋に手を入れて、中で何物か持つたまゝで、未だ見せは爲ずに、その持つて居る物は、願ひの目的物なのだが、その願を聽くといふ約束を得無いうちは、手提袋からその何物かを出せ無いのだと云つて居るかのやうに爲て居た。

『太く困まることだつても……』と、その願は何なのか大凡察したらしく、公爵アンドレエーが答へた。

『貴下はこれを何う思つても構は無いのよ。貴下は父上樣と同じなんだもの。何う思つても宜いのよ、だけども、私が爲るんだからと思つて、これを爲てください。何卒、爲てくださいよ。父上樣の父上樣、祖父樣が何時も何の戰爭の時もお掛けなすつた物なの……』、未だ手提袋の中で握つて居るものを出さ無かつた。

『貴下約束してくださるのね、では』

『勿論さ、何物だね？』

『アンドレエー、私聖像で貴下を祝福するのよ、何んなことがあつても脫ら無いと約束してくださいよ。……貴下約束する？』

『一噸も重量があつて、私の頸が折れるので無いといふのなら……。お前の氣の濟むやうに』と、公爵ア

ンドレエーは云つた。と、直ぐ同時に、その冗談と共に妹の顔に出て來たさも悲しさうな表情に氣が付いて、氣の毒に爲つた。『有り難う、何うも有り難う』と、云ひ足した。

『貴下の知ら無い間に、神樣は貴下を助け、貴下にお慈悲をお掛けなすつて、御自分の方へ貴下をお引き寄せになるのですよ、神樣にばかり眞理と平和は有るのですからね』、公爵孃は、感情の迫つた震へ聲で、恭やしい手付で、華奢な細工の小さい銀鎖の着いた、銀で緣取つた黑い顏の救世主の古風な小さい橢圓の聖像を、兩手で、兄の前に指し上げた。で、十字を切り、聖像に接吻し、そして、アンドレエーにそれを指し出した。

『何卒、アンドレエー、私の爲めに』

親切なオド〳〵した光が、娘の大きい眼から射した。さういふ眼付が、痩せた脆弱さうな顏を勢付けて、美しく見せた。兄は直ぐ聖像を取る所であつた、で、妹は止めた。アンドレエーは氣が付いた、十字を切つて、そして、聖像を取つた。顏付は優しかつた（彼は感動したのだ）、と同時に皮肉であつた。

『有り難う、眞個に』と、妹は兄の額に接吻して、再長椅子に坐つた。兩方とも默つて居た。

『では、先刻云つたやうに、アンドレエー、往時からさうだつたやうに、親切に、情深くしてくださいよ。リザを左樣酷く判斷し無いでね』と、妹は始めた、『眞個に優しい、眞個に人の好い女よ、それで、今の所彼の女の位置は眞個に辛いんですよ』

『私はお前に何にも云は無かつたと思ふんだが、マアシヤ、我妻の爲ることを惡く云ふやうなことも、又、彼女に對して不滿があるのだとも。何うして、お前はさう云ふのかい』

公爵孃マリイヤは、顏ぢう方々が赤く爲つた、そして、惡かつたと思つたかのやうに、默まつて居た。

『私はお前に何にも云は無かつたんだ、けれども、お前は云はれたらう。私はそれを悲しく思ふんだ』

赤いボツ〳〵が、公爵孃マリイヤの額、頸、頰部で濃く爲つた。何か云ひ度かつた、が、言辭が出無かつた。兄の推量は的中つた、妻は、食事の後で、泣いた、難產だと蟲が知らすやうな氣が爲ると云ひ、それが恐くつて爲方が無いと云ひ、それから、自分の苦しい運命、舅のこと、夫のことを訴へたのだ。散々泣いてから、眠て了まつた。公爵アンドレエーは妹に對して氣の毒に思つた。

『唯だ一つお前に云つて置くがね、マアシヤ、寸毫も彼女は何一つ責めるべきことを爲たことは無いんだ、私は現に今まで一度も責めたことは無いんだ、又將來も矢張り左樣だらうと思ふんだ、が、それと同時に、此れまで彼女に對して私自身惡るい事を爲たといふ覺えは無いし、又、何樣な境遇に私が爲るにしても、それは何時までも、左樣だらうと思ふんだ。けれども、實際は何うだと云はれゝば……私は幸福なのかと云はれゝば。いゝやと云ふより外は無い。彼女は幸福なのか。いゝや、左樣では無い。何故われ〳〵二人がさうなのか。それは、私には解ら無い』

斯う云つて、彼は、妹の傍へ行つて、身體を屈めて、妹の額に接吻した。彼の美しい眼が、才智と親切の何時もに無い光で輝いた。が、彼は、妹を見て居たのでは無く、妹の頭を越えて、開いた戶の黑闇の方を見て居た。

『彼女の所へ行かう、私は暇乞を爲無ければならぬ無い。いや、お前一人で行つて、起して呉れ、私は後から行くから。ペツルウーシカ』、と、侍僕を呼んで、『此所へ來て呉れ、此所等の物を持つて行くんだ。これは、座の下だ、これは右側だ』

公爵孃マリイヤは、起つて、戶の方へと動いた。が、止まつた。『アンドレエー、貴下が信仰があつたら、

貴下は、自分では感ずることの能き無い愛を與へてくださるやうに、神樣に訴へたでせう、そして、神樣は貴下の祈禱をお聽になつたでせうに』

『左樣、或は左樣かも知れんね』と、公爵アンドレエーは云つた。『おいで、マアシャ、私は直ぐ行くから』

妹の部室へ行く途中、一つの家を今一つの家に結び付けて居る廊下で、公爵アンドレエーは、愛嬌を湛へて微笑んで居るマドモアゼル・ブウリアンヌに遭遇つた。その日それで三度、その女は無邪氣な熱心な笑顔で、人氣の無い所で公爵の通り路へ出て來たのであつた。

『あら、お部室に居らつしやるとばかし思つてましたよ』と、何故か顔を赤くし、眼を伏せて、云つた。

公爵アンドレエーは、女を睨み付けた。不意にグッと癪に觸つた樣子が顏へ出て來た、彼は女に何とも云はずに、女の眼は見無いで、額や髮を非常な侮蔑した態で見詰て居たので、佛蘭西女は眞赤に爲つて、一言も云はずに行つて了まつた。妹の部室まで行くと、小さい公爵夫人は起きて居て、言語を追つ掛け追つ掛け大急ぎで繰り出す陽氣な小さい聲が、開いて居る戸から聞えた。宛然、長く引き止められて居たので、後れたのを取り返さ無ければなら無いとでも云ひさうに、話して居た、そして、例の通り、佛蘭西語を使つた。

『いゝえ、けども、それは、年を後へ取らうとでも思つてるらしい、附け髮の、口ぢう入齒の年老つた伯爵夫人ズウボフなんぢやアありませんか。は、は、はア、マリイ』

伯爵夫人ズウボフに就てのそれと寸分違は無い文句を、それと寸分違は無い笑を、公爵アンドレエーは、他人の前で、妻から最早五度聞て居た、彼は部室へそおつと入つて行つた。圓々とした血色の好い小さい公爵夫人は、手に仕事を持つて低い椅子に坐つて、彼得堡の追憶や流行言詞をトットと注ぎ出して居た。公爵アンドレエーは、傍へ行つて、その頭を撫でた、そして、行旅の疲勞が拔け切つたか尋いた。公爵夫人はそ

れに答へて、そして、依然饒舌り續けた。

六頭立の馬車が昇降段の所に立つて居た。秋の暗の夜であつた。馭者は馬車の棒を見ることが能き無かつた。提燈を持つた家僕が、昇降段の上を彼方此方と駈け廻はつて居た。大きい家は、燈火の點いた大きい窓窓の爲めにギラ〳〵光つて居た。家付奴隷は、自分たちの若主人に暇乞を是非爲度いと思つて、外側の廣室に群れて居た。裡の大廣室には、家族一同が立つて居た、ミハーイル・イヴァーノヴィーチ、マドモアゼル・ブウリアンヌ、公爵孃マリイヤ、それに、小さい公爵夫人。公爵アンドレエーは、二人限で別を告げやうと云つた父親の書齋へ呼ばれて居た。衆皆は、彼が出て來るのを待つて居た。公爵アンドレエーが書齋へ行くと、老公爵は、老眼鏡を掛け、白い室内着——その服裝では子息の外誰にも逢は無かつた——を着て、卓子に向かつて、書き物を爲て居た。彼は、見返つた。

『行くかい』。で、再書き物を續けた。

『お暇乞に來ました』

『此所に接吻しなさい』と、自分の頰部に觸つて、『有り難う、有り難う』

『何で私に禮をおつしやるんです』

『規定の時日以上にぐづついて居らんので、女の裾にかぢり付いて居らんので。勤務は何よりも第一だ。有り難う、有り難う』。で、走る鐵筆から墨汁が潑ね散るまで、非常に力を入れて書きだした。

『何か云ふことがあれば、云へよ。私は一遍に兩方の用を辨じられるのだから』と、云ひ足した。

『荆妻のことで……私は乃父のお手へ彼女をお賴み申して行くのは、眞に恥ぢ入つて居ります……』

『痴愚なことを。思ふことを云へよ』

『産期が來りましたら、莫斯科へ産科醫を呼びに遣つて……此所に居させてください』

老人は手を止めて、解ら無いかのやうに、子息を恐い顏で見詰めた。

『天然が助けて呉れ無ければ、誰が居たつて役に立たんとは知つて居ますが』と、公爵アンドレエーは、明白にドギマギしたらしい樣子で、云つた。『百萬のうち唯つた一つ爲り損なひがあるといふことも認めて居ります、けれども、これは彼女の心持、又私の心持だけで唯ださう爲度いんですからね。種々なことを他人が云つて聞かすんです、又夢を見たとか云つて、恐がつて居るんです』

『ふん……ふん……』と、老公爵は呟やいて、書き物を續けた。『左樣爲やう』彼は署名を擲り付けた、で、不意に子息に振り向いて笑つた。

『駄目だな、えゝ？』

『何が駄目なんですか』

『女房』と、老公爵は、簡單に、意味强く云つた。

『解りませんですが』と、公爵アンドレエーは云つた。

『だが、何うも爲方が無い、なア』と、老公爵は、云つた、『奴等は殘らず左樣なのだで、再び一人に爲りやうは無いので。心配するな、私は誰にも一言も云ひは爲んから、が、お前自身それを知つて居るだらう』

痩せた小さい骨立つた指で、子息の手を攫んで、それを振つた、そして、何んな人の腹でも底まで見透して了まひさうな鋭い眼で、顏を凝乎と見て、再冷たい笑ひやうを爲た。

子息は溜息したが、その溜息で父親が自分を解したことを承認した、老人は矢張り何時もの迅速で幾本か

の手紙を忙がしさうに疊み、封じて居て、封蠟、緘印、紙を攫んだり、再投げ落したり爲た。

『爲方が無い。彼女は好い器量だ。私は萬事行る。安心しなさい』と、手紙を封じながら、ポッ切れに云つた。

アンドレエーは何とも云は無かつた、父親が自分のことをさうまで解して呉れたのが、心持が好くもあり、又苦しくもあつたのだ。老人は起つて、子息に手紙を渡した。

『さア』と、彼は云つた。『女房のことは心配するな、能きるだけのことは、殘らず行るからな。さア、其所で、この手紙をミハーイル・イラリョオノヴィーチに渡せよ。お前を善い仕事に使つて呉れ、副官のやうな厭な勤務は長く爲せて置いて呉れるなと書いてある。私は彼の男を覺えて居り、好いて居ることを、彼の男に話して呉れ。で、彼の男が何うお前を扱かうか知らせて呉れよ。彼の男の所で都合の惡い事が無くば、その下で勤めて居るが宜い。ニコラアイ・アンドレエーチ・ボルコオンスキイの子息は私緣で誰にも使はれるには及ばん。サア、此方へ來て呉れ』

老人は、何の言語も半分まで言ひ切らぬ位に、甚く速語に云つた、が、子息は父親の言語を解し慣れて居た。彼は、子息を、書類簞笥の所へ伴れて行つて、開けて、引出を出した、そして、その裡から、彼の勢の好い、大きい、壓付けたやうな筆蹟の滿ちた寫本を出した。

『私は確にお前より先へ死ぬる。それ、この書類は、私の死後に陛下に上げる分だ。それから、此所に、それ、銀行の手形と手紙がある、これは、誰でも、スヴォーロフの戰爭の歷史を書いた者に遣る褒美なのだ。學士院へ遣つて呉れ。これが私の感想錄だ、私が死んだ後では、お前だけで讀んで呉れ、利益になることもあらうからな』

アンドレエーは、父親はまだ前途に多くの年を持つて居るに違ひ無いことを父親に云はず無かつた。さう云ふには決して及ばず無いことを知つて居たのだ。

『悉皆承知しました、父上樣』

『うん、では、左樣なら』、子息に手を與へて接吻させ、子息を抱擁した。『覺えて居れよ、公爵アンドレエー、若しお前が殺ろされゝば、この年齡の私には非常な悲痛だぞ……』、急に言辭を切つた、が、不意に、甲走つた聲で續けた、『だが、お前がニコラアイ・ボルコオンスキイの子息らしく無い行爲をしたら、私は……面目を失ふぞ』、斯う叫んだ。

『そのお言辭には及びませんでせう、父上樣』と、子息は微笑んだ。

老人は何とも云はず無かつた。

『今一つ願つて置き度いことがあります』と、公爵アンドレエーは言辭を繼いだ、『若し、私が殺されましたら、そして、若し小兒が生れましたら、昨日申しました通り、乃父の手から放さんで居てください、乃父の所で育てゝください……何卒』

『お前の女房に渡さずに？』と、老人は云つて、笑つた。

二人互に顏を見合はせて立つた。老人の鋭い眼は子息の眼を見据ゑた。戰慄が老公爵の顏の下部を通つた。

『もう暇乞は濟んだ……さア、行け』と、不意に云つた。『さア、行け』と、書齋の戸を開けて、高い腹立ち聲で叫んだ。

『何でしたの？。何う爲たんです？』、公爵アンドレエーを見、眼鏡を掛けて、鬘を着ずに、怒つた聲で叫

で居る白い室內着の老人の姿を瞥然と見たので、二人の貴婦人は斯う尋いた。

公爵アンドレエーは溜息して、何とも返答し無かつた。

『さア、それでは』と、彼は妻に振り向いて、云つた、その『さア、それでは』が、『さア、お前の一すとした狂言をお演り』とでも云ふかのやうに、冷たい嘲笑のやうに響いた。

『アンドレエー？。最早なの』、小さい公爵夫人は、蒼く爲つて、ギョッとした態で夫を見た。彼は妻を抱擁した。妻は叫んで、彼の肩の上へ氣を失なつた。

彼は、徐に、妻が凭れて居た肩を外し、顏を覗いて、徐に低い椅子に臥かせた。

『左樣なら、マアシヤ』と、妹に優しく云つて、互に手を接吻し合ひ、それから、急歩で、彼は、部室を出た。

小さい公爵夫人は、肱掛椅子に臥て居た、マドモアゼル・ブウリアンヌがその額を擦つて居た。公爵孃マリイヤは、兄嫁を支へて居ながら、涙を湛へた美くしい眼で、公爵アンドレエーが出て行つた戸を依然見詰めて居た、そして、それに向けて、十字を切つた。書齋からは、老人の鼻をかむ繰り返へした怒つた音が、短銃の音のやうに、公爵孃に聞こえて來た。アンドレエーが今出發したばかりといふ所で、書齋の戸が投げ開けられ、白い室內着の老人の嚴づかしげな姿が、覗き出た。

『行つたか？。うん、善い事だ、これも』と、云つて、恐ろしい權幕で、氣を失つて居る公爵夫人を見た。困つたものだといふ態に頭を振つて、戸を叩き着けて閉めた。

第二章

（一）

千八百〇五年の十月、露西亞軍は、墺地利大公國の市々、村々を占領して居て、聯隊が露西亞から到着し續け、宿割の當つた住民を迷惑がらせながら、ブラウナウの城壘附近に宿營し續けた。ブラウナウは總司令官クツウゾフの本營であつた。

千八百〇五年の十月十一日に、ブラウナウに到着したばかりの歩兵聯隊の一つが、市から半哩の所に止まつて、總司令官の檢閲を待つて居た。その田舍の非露西亞的な特質と周圍（果樹園、石垣、瓦葺の星根、遠くの山、露西亞兵を珍しさうに見て居る外國の農夫）に拘はらず、聯隊は、何の露西亞の聯隊でもが、露西亞の中央の何處でもで檢閲を受けやうと爲て居る時の、何時でもの狀態と寸分違は無いものであつた。暮れ方、行進の最後の行程で、總司令官が行軍中の聯隊を檢閲するといふ命令が受け取られた。命令の語句が、聯隊を率ゐて居た將官には十分に瞭然とは解ら無いで、行軍狀態と解すべきや否やに就て疑義は起つたけれども、少佐間の交渉で、下世話にいふ通り、點頭が足り無いよりは、點頭を低く爲過ぎた方が宜いからといふので、その地點で觀兵狀態で聯隊を展開することに決した。で、兵卒は、二十五哩行進の後で、一目も閉らずに、繕つたり磨いたりして、夜を明かし、副官や將校たちは計算し、測定して居た。朝になると聯隊は、前の夕方、最後の行進の時の、落伍の多い不秩序な群集とは打つて代つて、隊中の各人が自分の役割と、勤務を知り、扣鈕一つ、革紐一つ、狂つた所も無く、殘らず清潔に輝つて居る二千人の組織された集團を表

はして居た。善く整頓して居たのは外側だけでは無かつた、若し、總司令官にして軍服の下を見る氣に爲つたのであつたら、彼は、誰も彼も殘らず清潔な襯衣を着て居るのを見、何の背嚢の裡でも、物品の規定の數、兵卒間に所謂『シイルツエ・イ・ミイルツエ』――突錐と石鹼――を見出したに違ひ無いのだ。誰もが心持好く感ずることの能き無かつた狀態が唯つた一つあつた。それは、彼等の足部の裝具であつた。兵卒の半數以上は靴に穴が出來て居た。が、この缺陷は司令官の方の過失では寸毫も無かつた、これは、幾度もの要求に拘はらず、靴は未だ墺地利の官憲から渡らずに居て、兵卒はと云ふと、殆ど千哩行軍して來たのであつたからだ。

聯隊長は、中年を超した、斑白の頰髯と眉の、横幅のある、ガツシリした、肩から肩の間よりも、胸から背部の間の方が厚い、短氣さうな顏貌の將官であつた。彼は、疊んだ所には未だその儘折り目の付いて居る卸し立ての制服を着、肉置の好い肩の上に、横たはらずに突つ立つて居た立派な金の肩章を着けて居た。將官は自分の生活の最も大切な勤務を立派に成し終へた人の態であつた。隊列の前面を歩き廻つたが、歩くといふと、一歩毎に、背部が微弱にギクシヤクして、ぐら〳〵するのであつた。將官は確に自分の聯隊を賞めて居て、それを嬉しがつて居た、そして、頭腦全體が聯隊の事で一杯になつて居たことは明白であつた。が、それはそれにして置て、將官のぐら〳〵した歩き方は、彼が、軍事の興味以外に、交際社會の生活と、女性との誘惑に對し、心に可なり多量な溫な情熱を持つて居たことを示めして居るのであつた。

『おい、ミハーイル・ミツリーチ』と、彼は、大隊長に聲を掛けた（大隊長は微笑みながら進み出た、彼等は悉皆明白に非常な好い機嫌であつた）。

『われ〳〵は昨夜忙がしかつた……。が、これで可からう、と思ふんぢやがね、聯隊はそれほど惡るくは

無い、或る……、えゝ？』

大隊長は、この機嫌の好い皮肉を解して、笑つた。

『ツアリツィンの觀兵式場でも、奴等ア追ひ出さるゝ氣遣ひは無いです』

『えゝ？』と、聯隊長は云つた。

その刹那に、騎馬の二人の姿が、信號を爲る爲めに歩哨を置いてあつた市への道から、見えて來た。それは副官と、後から隨いて來る哥薩克兵であつた。

副官は、前の命令のなかで明瞭で無かつたこと、卽ち、總司令官は、聯隊が到着した狀態——外套を着、背嚢を負ひ、何の準備も爲無い——その儘の所を檢閲しやうと思ふのだといふことを、聯隊長に確める爲めに、總司令官から差遣されたのであつた。

維也納から來た、軍事會議の一員が、前の晩、クツウゾフと會見して、大公フェルディナンド及びマツクの軍と聯絡する爲めに、能きるだけ早く前進して吳れと提言し且要求した、所が、クツウゾフはその聯絡を得策と思はず無かつたので、自分の主張を徹す爲めに持ち出した種々の理由のなかで、露西亞から着したばかりの軍隊は甚い情け無い狀態であることを、相手の墺地利の將官に示めさうと爲たのであつた。クツウゾフが、聯隊に出逢はうと爲たのは、實はさういふ目的を持つてのことであつた、だから、聯隊の狀態が惡ければ惡いだけ、總司令官の意には協ふといふ譯であつた。副官は、さういふ詳しいことは知ら無かつたけれども、總司令官は飽くまで、兵士が外套を着て行軍狀態にあるやうにと命ぜられることゝ、若し、聯隊がその通りで無かつたとすると、總司令官が機嫌が惡るからうといふことを、聯隊を率ゐて居る將官に傳へた。

これを聞くと、將官は投げ首をした、肩を搖すつて、兩手を腹立ちまぎれの態で突きあげた。

『失敗つた』と、彼は云つた。『おい、ミハーイル・ミツリーチ、行軍中といふのは外套を着て居ることぢやと、我輩は君に云はんかつたかい』と、大隊長に叱り付けるやうに云つた。『うゝん、實に』と、云ひ足して、そして、勢ひ込んで歩み出た。『中隊長たち』と、號令し慣れた聲で叫んだ。『曹長たち。……閣下は直きにお見えになるかね』と、今口にした人にのみ對してのことゝ瞭乎に知れた恭々しい尊敬の顏容で、副官に振り向いた。

『一時間以内に、と思ひます』

『服裝を變へる間があるぢやらうか』

『分りません、將官……』

將官は自身隊列の裡へ行つて、外套の儘に直れといふ命令を與へた。中隊長たちは中隊の裡を駈け廻り、曹長たちは彼方此方と奔走した（外套はチャンとして無かつたのだ）、で、見る〳〵、今の先刻まで整然として靜に立つて居た各隊は、彼方此方と浪立ち、列が崩れ、ワア〳〵云ひだした。兵卒は、八方で前後に駈け、肩を退反して身體を屈め、頭を越さして背嚢を下し、外套を取り出して、袖を通す爲めに腕を突き上げた。

半時間經つと、萬事再元の通り秩序の整つた狀態になつた、唯だ各隊は黑の代りに今は鼠色になつて居た。將官は再震へる闊歩で聯隊の前面を歩るき、少し隔たつた所から、全隊を見渡した。

『彼りやア何うしたんぢや？。彼りやア何ぢや』と、ピタリと止まつて叫んだ。『三中隊長』。

『三中隊長、將官へ。中隊長、三中隊の將官へ、隊長へ』……聲々が隊伍を涉つて聞えた、そして、副官が、なか〳〵來無い將校を探しにと駈けた。命令を種々に變へる攪亂の聲——最早今は、『將官、三中隊へ』

とさへ叫んで居た――が、その目的地に達すると、呼ばれた將校は、自分の隊の影から出て來た、そして、もう善い年齢の男で、駈けるのには慣れて居無かつたけれども、靴の爪先で拙態に躓づきながら、將官の方へ駈け足で動いた。大尉の顏は、覺えられ無い日課を暗誦しに呼び出された小學生のやうな心配さを表はして居た。ボツ／＼が赤い鼻（確に酒を控へ無い爲めの）の上に出て來た、そして、口が何うしてもチャンと結べ無かつた。將官は、喘いで駈けながら近づくに從がつて速度を緩めて來る大尉を頭から爪先まで見下した。

『君はやがて兵に女服を着せて了まふぢやらうな。彼りや何したんぢやい』と、將官は、下顎を突き出して、三分隊の隊列に居る、外の者とは違つた色の外套の兵卒を指して、叫んだ。『君自身は何處に居たんか。總司令官が見えるのぢや、それに、君は君の場所に居らんのかい？。えゝ？……檢閲に兵に寢衣を着せて出すなんど我輩唯は置かんぞ……えゝ？』

中隊長は、二本指で軍帽の庇をだん／＼強く壓し付けた、宛然、自分の安全の唯一の望は唯だその壓し付けることにあつたとでも云ひさうに。

『おい、何とか云はんかい？。洪牙利人のやうな服裝で居る彼りやァ何者ぢや？』と、將官は、酷しく皮肉に云つた。

『閣下……』

『なに、何が閣下なんぢや。閣下。閣下。一體何のことぢや、唯閣下で、誰に解るかい』

『閣下、彼男は、將校から貶されたドロオホフなので』と、中隊長は低い聲で云つた。

『なに、元帥に貶されたと云ふんかい、それとも兵にかい。兵なりや、軍則通り、他の者と同樣の服裝で

無けにやァ不可』

『閣下、行軍中閣下御自身で許可をお與へになりました』

『許可を與へた？　さァ、君等は何時でも左樣ぢや、君等若い者は』、と將官は少し折れて、云つた。『許可を與へた？　何か一言云へば、君等は直ぐ……。えゝ？』と、ます／＼もどかしさうに云つた。『何卒兵に服裝をチャンと爲せて呉れ給へ……』

で、將官は、副官の方へグルリと振り返つて、ぐら／＼した歩き方で、聯隊の方へ歩いた。彼は、憤怒を外へ左樣出すので心持が好かつた。で、聯隊の前を通りながら、怒號り出す機會を探がして居たことは瞭乎であつた。手入れの惡るい隊旗に就て一人の將校を、列の不齊なことに就て今一人を叱り付けた、彼は、三中隊に近寄つた。

『何といふ立ち方ぢやい？、脚は何處にある？。貴樣の脚は何處にあるんぢや？』と、將官は、青い外套を着て居たドロオホフから手前へ五人目の所で止まつて、聲に心痛の調子を持たせて、叫んだ。ドロオホフは徐に曲がつて居た脚を眞直にし、凉しい倨傲な眼で、將官の顏を凝乎と見詰めた。

『何故貴樣は青い外套を着て居るんぢやい？。脱げ。……曹長。此奴の外套を更ろ……畜……』。言辭を終はる間も有らせず――

『將軍、私は命令に從ふ義務はありますが、然し……』と、ドロオホフが急いで云つた。

『整列中に物を云つてはならん。……物を云つてはならん、物を云つてはならん』

『惡口を堪へる義務はありません』と、ドロオホフは、聲高く瞭乎と、言辭を繼いだ。將官と兵卒の眼がピタリと見合つた。將官は止まつて、自分の硬い衿を腹立まぎれに、強く引き下げた。

『外套を更へて呉れ給へ、何卒』と、歩み去りながら、云つた。

（二）

『見えた』と、途端に、哨兵が叫んだ。將官は、眞赤になり、馬の所へ駈け付け、震へる手で鐙を捉まへ、身體を跳ね上げ、鞍に落着き、軍刀を抜き、そして、得意な勢込んだ顏で、叫ぶ構へで、口の一方の側を開けた。聯隊は、羽繕ひする鳥のやうに、全體はためいた、そして、バタリと靜まつた。

『氣を付けえ』と、將官は、膽を冷やさすやうな聲で叫んだ、これで、自分自身の方の嬉しさと、聯隊に對する嚴格と、それから、近付いて來る總司令官に對する歡迎と、斯う三つを一遍に言ひ表はしたのだ。

三四頭立の高い青い維也納馬車が、兩側に樹の植つた、敷石無しの、廣い往還を、彈機の上で轉がりながら、輕快な速度で、駈けて居た。將官たちの隨員とクロオト人の護衛兵が馬車に隨て駈けて居た。クツウゾフの側に墺地利の將官が坐つて居たが、その人の白い制服が、黑い露西亞の制服のなかではヘンに見えた。馬車は聯隊の所へ來て、止まつた。クツウゾフと墺地利の將官とは低聲で何か話て居た、クツウゾフは、重い足音で、馬車の踏段に足を下した時に、宛然、自分と墺地利の將官を息を凝して見詰て居るそれ等の二千人の人間は全然存在して居無かつたかのやうに、微弱に微笑んだ。

號令の言辭が響き渡つた、再聯隊は、武器を捧げた時に、カチヤ〳〵いふ音で震へた。死んだやうな沈靜の裡で、總司令官の弱い聲が聞えた。聯隊は叫んだ。『萬歲、閣……下……下……下』。で、再、全く閑然とした。最初は、クツウゾフは、聯隊が動いて居た間一つ場所に立つて居た、それから、墺地利の將官と一緒に、幕僚を後に從へて、徒歩で隊伍の間を歩き初めた。

聯隊長の將官が、凝乎と眼を注いで、總司令官に敬禮した、窮屈さうな恭やしい追從染みた態度で見ると、彼が、前へ頸を延ばして、ぐら〳〵する歩き方を抑へやうと骨折りながら、將官たちの後に隨いて隊伍の間を通つて、總司令官の一言、一擧動に傍へ飛んで行く態度から見ると——この將官は、命令を下す長官としての任務を盡す時より尙一層强い熱心を以て下僚としての任務を盡すのだといふことが瞭然であつた。司令官の嚴重なこと、精勤のお蔭で、聯隊は、同時にブラウナウに到着して居た他の諸聯隊に比べて、非常に良好な狀態に在つた。後へ殘された病人や落伍者は合せて唯つた二百十七人で、兵卒の靴を除ければ、萬事善く整頓して居た。

クツウゾフは、隊伍の間を歩きながら、時々止まつて、土耳古戰爭の時分に知つた將校たちに——時には兵卒にも——一言二言親し氣な言辭を掛けた。兵卒の靴を見ると、幾度も元氣が無ささうに頭を振つて、それを誰の咎だとも云ひはし無いのだが、隨分劣い狀態であることを認め無い譯には行かぬと云つたやうな表情で、墺地利の將官にそれを指して見せた。聯隊長の將官は、さういふことのある度毎に、總司令官が聯隊のことに就いて云ふ一言をも聞き洩しては大變だと云つたやうな風で、傍へ駈け付けた。クツウゾフの後から、何んな低い聲で云つた言辭でも聞けるやうな距離で、まづ二十人位から成つて居た幕僚が隨いて行つた。さういふ紳士たちは、互に話を爲、時には笑つた。誰よりもクツウゾフに一番近く一人の奇麗な副官が歩いて居た。公爵ボルコオンスキイであつた。彼の側に、同僚で、甚く肥つた、人の好い、莞爾な奇麗な顏の、そして、濕つた眼の、背の高い參謀官ネスヴィイツキイが居た。ネスヴィイツキイは、傍を歩いて居た顏の赤黑い瞟騎兵の將校の爲めに起こされた笑を堪らへ兼て居た。この將校は、莞爾ともせず、見据ゑた眼の表情を寸毫も變へずに、聯隊長の背部を眞面目くさつた顏で見詰めて居て、その人の擧動を一つ一つ眞似を爲た。

聯隊長がぐら〳〵として、前へ跳び出せば、その度毎に、驃騎兵の將校が、寸分違は無い身振りで、ぐらぐらとして、前へ跳び出した。ネスヴィイツキイは、笑つて、その眞似を見させやうと傍の者を突つ突いた。

クツウゾフは、自分を見守らうとする骨折で今にも眼窩から跳び拔けて了まひさうに動く數千の眼の傍を徐々と無頓着に歩いた。三中隊に達すると、不意に止まつた。幕僚は、その佇立を豫期して居無かつたので、傍へぞろ〳〵と押し掛け無い譯には行か無かつた。

『やア、ティモオフィン』、總司令官は、先刻靑外套のことで弱つた鼻赤の大尉が自分の知つた顏なのに氣が付いて、斯う云つた。

聯隊長の將官がティモオフィンに注意を與へた時のティモオフィンよりももつとツンと眞直に立つことは何うしても能きることで無いと、誰も思つたであらう、が、總司令官が彼に言語を掛けた刹那に、大尉がツンと眞直に立つた姿勢は實に非常なもので、若し、總司令官がもう少時彼を見て居やうものなら、大尉にはその苦しさは到底堪へ切れ無いであらうといふ程のものであつた、で、その理由で、クツウゾフは、大尉の位地を明白に見て取り、大尉を苦めるやうでは反つて氣の毒だと思つて、急いで、他所へ振り向いて了まつた。殆ど眼に入らぬやうな微笑が、クツウゾフの瘡痕で醜くされた圓々とした顏の面を過ぎた。

『イスマイルの古い戰友が又一人居つた』と、彼は云つた。『勇敢な將校だ。君は彼の男に不滿は無いかね』と、クツウゾフは司令の將官に尋いた。

と、將官は、自分の後の驃騎兵の將校に鏡の裡でのやうに寫つされて居るとは、夢にも知らず、ぐら〳〵として、前へ急いで出て、答へた、『十分に滿足致して居ります、至高なる閣下』

『われ〳〵は誰しも弱點のあるものだ』、クツウゾフは、微笑んで、歩み去りながら、斯う云つた。『彼の

男は酒神が甚く信心でなア』

司令の將官は、大尉のさういふ行爲を自分の咎にされては事だと思つて、何とも返答し無かつた。驃騎兵の將校は、その刹那に、鼻赤の大尉の顏と、ギュウと引込んで居る腹を見た、で、直ぐその顏と姿勢を眞似したが、その眞似方が如何にも生の者その儘であつたので、ネスヴィイツキイは堪へ切れずに噴飯した程であつた。クツウゾフは振り返つた。將校は自分の顏を好自由に何樣にも變へることが能きるのらしかつた、クツウゾフが振り返る途端に、敏速く假顏を引込めて、極く眞面目くさつた、何喰はん、悲やしい表情になつて了まつた。

三中隊が最後であつた、クツウゾフは、何事か憶ひ出さうと骨折つて居るとでも云ひさうに、考へ込んで居るやうに見えた。公爵アンドレエーが、歩み出て、佛蘭西語の低い聲で、『この聯隊に編入されて居る貶された將校のドロオホフを知らせろといふお言ひ付けでしたですが』

『ドロオホフは何處に居るかね？』と、クツウゾフが尋いた。

最早その時は兵卒の鼠色の外套を着て居たドロオホフは、呼び出されるのを待た無かつた。凉しい靑い眼の赤髮の兵卒のスラリとした形が、隊列から歩み出た、彼は、總司令官の前へ行つて、武器を捧げた。

『訴告を爲るのか』と、クツウゾフは微弱に顏を顰めて、云つた。

『これがドロオホフです』

『あゝ』と、クツウゾフは云つた。『これが君の藥になるやうであり度いもんだな、任務を飽まで盡しなさい。陛下は御慈心に富ませられる。それに、功績が擧がれば、私も捨てゝは置かん』

碧い眼は、聯隊の將官に向いた時と寸分違は無い倨傲な態で、總司令官を見た、その表情で、總司令官と

兵卒の距離を非常なものに爲て居る習俗の帳帷を、引き破らうとするかのやうに。

『至高なる閣下にお願ひする唯だ一つの御眷顧は』と、確乎した、凛とした、落着た言語で、『私の咎を償なひ、わが皇帝陛下及び露西亞國に對する私の忠心を表證し得る機會を與へ給はらんことでございまする』

クッウゾフはブイと背部を向けた。大尉ティモォオフィンの所を去つたのと同なじやうな微笑が彼の眼の裡でキラ〳〵した。彼は、ドロオホフが云つた總て、又ドロオホフが云ふ事が能きた總ては、自分の方では最早長い、長い前から知つて居たことで、それには最早死ぬほど飽き〳〵して居て、そんなものは最早眞平だとでも云ひさうに、グルリと背部を向けて、顏を顰めたのだ。彼は、歩きだして、馬車の方へと行つた。

聯隊は幾つもの分隊に分れた、そして、ブラウナウから遠からぬ所で彼等に充てられた宿營の方へと行つた、其所へ行つたら、靴も衣服も得られて、强行的進軍の後の休息も得られるやうに爲度いものだと思ひながら。

『我輩を何時までも怨むやうなことは無からうねえ？、ブロフォル・イグナアティイチ』と、司令の將官は、三分隊に追ひ付き、その先頭を歩いて居た大尉ティモォオフィンの所へ乘り付けて、云つた。將官の顏は、檢閲が見事に濟んだ爲めの抑制へ切れ無い嬉しさで輝いて居た。『皇帝陛下に盡す爲めぢや……己むを得ん……時には、檢閲の場合には少し氣張らんとならんからなア。我輩が一番先きに君に詫びる、我輩知つての通りの人間ぢや……。閣下は大いに機嫌が好かつた』。で、大尉に手を指しだした。

『いや、これは、將官、餘まり恐縮で』と、大尉は、鼻をます〳〵赤くして、答へた。彼は、微笑んだ、そして、その微笑が、前齒の二本無いのを見せた、それは、イスマイルで敵の爲めに銃の臺尻で叩き折られ

たのだ。

『それで、ドロオホフに我輩も捨てゝ置きはせんと云うて呉れ給へ、そしたら、安心するぢやらう。それから、ねえ、彼男は何うなんぢやね、行爲は何うかね……兼て問はうと思ふとつたのぢやが……』

『任務の盡し振りは極く正確でございます、閣下……けれども、或る性格で……』と、ティモォフィンが云つた。

『なに、何樣な性格ぢやね？』と、將官は尋いた。

『日に依つて種々違ひます、閣下』と、大尉は云つて、『或る時は、物の解つた、善い教育を受けた、人の好い態であります。と、次には、猛獸のやうに爲ります。波蘭では、猶太人を半殺に爲ました、申すも如何ですが……』

『成る、成る』と、將官は云つて、『ともあれ、逆境にある若い者には同情せんけりやァ爲らんものぢや。彼男は豪い援引のある男ぢや、なア。……君も……』

『えゝ、左樣、閣下』と、さういふ事柄に就てその長官の意のある所を解したことを見せる微笑で、ティモォオフィンは云つた。

『結構ぢや、うん、結構ぢや』

將官は、隊伍の裡でドロオホフを探がし當て、馬を控へた。

『一戰有り次第、肩章が付くから』と、彼に云つた。

ドロオホフは振返つたが、何にも云は無かつた。彼の皮肉に笑む口の筋には何の變化も表はれ無かつた。

『うん、それで宜しい』と、將官は言辭を繼いだ。『我輩から衆皆に露西亞酒を一杯宛』と、兵卒に聞える

やうに、云ひ足した。『衆皆で苦勞ぢやつた。神のお蔭で』。で、その分隊を乘り越して、他のゝ方へと馬を飛ばした。

『おい、實際好人物だな、彼の男の下ぢやア愉快に勤められるぜ』と、ティモオフィンは側を歩いて居た部下の將校に云つた。

『心臟形の王、彼の男に好適の文句だ』と、その將校は笑つた。(將官は心臟形の王といふ綽名であつた)。將校連中の檢閲後の上機嫌は、兵卒にも影響した。各分隊は、賑やかに行進した。八方で饒舌りまくつて居る兵卒の聲々が聞えた。

『おい、クツウゾフは隻眼だてえぢや無いか?』

『うん、左樣だよ。片方は全く見え無いんだ』

『いゝや。……兄弟、お前たちよか夐然眼が見えらア。われ〳〵の靴だの物品まで善く見て行つたぢやア無えか』

『なア、朋輩、俺は脚を見られた時にやア……うん、思つたね、俺……』

『一緒に來たなア奥地利人だつたね、彼の宛然身體ぢう白墨で塗りこくつたやうなのは。粉のやうに眞白だ、奴等ア必定、われ〳〵が銃を磨くやうに、身體を磨くんだぜ』

『おい、フェデシュウ……戰鬪が何時始まるてえ話か何か有つたかい?。お前の方が近かつたぢや無えか。ボナパルトが、ブルノオヴァに來てるつてなア』

『なに、ボナパルトだ。其奴ア何オ痴愚なことを云つてるんだらうな。默まつてりやア何を云ひ出すか知れ無えぜ。今謀反してるなア普魯西人なんだ。奥地利人はな、宜いか、それを鎭定してるんだぜ、で、それ

が靜まつちやへば、それから、ボナパルトと戰爭が始まるんだ。それだのに、ボナパルトがブルノオヴァに居ろなんて。左樣なことを云ふ奴ア何うしても大痴者だい。耳をおつ開いて善く眞實のことを聞くやうに爲ろよ』

『給養係の畜生奴らア。……五分隊は、最早彼の村へ入つちめえやがつた、奴等ア直きに雜炊を拵えやがるぜ。此方ア未だ此樣な所だ』

『ビスケットを吳れ、兄貴』

『でも、昨日お前は俺に烟草を吳れたかい?。宜しい、若い衆。宜し、宜し、其方へ行けよ』

『休憩は無いかなア、で無きやア、何にも口に入れずに未だ五露里行かなきアなら無いんだぜ』

『おい、彼の獨逸人たちが馬車を貸して吳れゝば、宜いになア、ガラ〳〵と行つちまふなア、一寸と宜いぢやア無えか』

『けども、おい、此所邊ぢやア、人民が悉皆宛然乞食に爲れちやつたんだい。これ迄の所にやア悉皆露西亞領の波蘭人が居たんだが、此所ぢやア、兄弟、出て來る奴も、出て來る奴も、悉皆獨逸人ばかしだなア』

『樂隊は先頭へ』と、大尉が呼んだ。と、諸方の隊伍から二十人ばかりが先頭へ進んだ。その指揮者であつた鼓手が振り向き、合唱者に正面を向け、手を振つて、『朝は今ほのぐ〳〵と』に始まつて、『いざや、若者、われ等今父カアメンスキイと榮譽の道を進まん』に終はる軍歌を始めた。この歌は、土耳古で作られたのだが、奥地利でもこれを謠つた、異つた所は『父カアメンスキイ』を『父クツウゾフ』と更へたばかりであつた。

軍人風に終りの文句をギクシヤクと歌ひ、地面へ何物か叩き付けるとでも云ひさうに腕を振つて、四十歳

恰好の瘠ぎすな奇麗な兵卒の鼓手は、兵卒合唱隊を嚴づかしい顏で睨み付けた。其所で、眼が悉皆自分の身體に注がれて居るのを確めて置いて、彼は、何か眼には見え無い貴い物をさも大切に持ちあげるとでも云ひさうに兩手を頭の上へそろ〳〵と擧げて、少時その儘でその物を捧げて居た、が、不意に絶望のやうな手付でそれを投げ飛した。

『あゝ、わが田舍家の闇口、
わが新しき田舍家』

此所で、二十の聲が覆唱を取りあげた、そして、四竹手が、自分の武器と背嚢の重量を物とも爲ず、輕輕と前へ跳び出し、分隊に顏を向けたまゝで、肩を振り、四竹で誰かを脅すやうな手付で、後退に歩いた。兵卒は、歌謠に合して歩いた、腕を振り、知らず〳〵調子に歩を合した。分隊の後から、車輪の音、彈機の響、それと、馬の足音が聞えて來た。クツウゾフ一行が市へ歸へる所なのだ。總司令官は兵士にその儘自由に行進させるやうにと手眞似を爲た、そして彼も幕僚一同も、歌の聲と、踊つて居る兵卒と、陽氣に勢好く行進して居る分隊の光景を、面白がつて居るかのやうに見えた。馬車は右翼の側を通つたので、一行の人々は、二列目に歌謠に合せて特異な浮き立つた風と、如何にも態樣の好い姿で進みながら、側を駈け通る人々の顏を、さういふ時に列伍に入つて行進して居無い者は誰でも可哀さうなものだと云ふやうな表情で見た碧眼の兵卒ドロオホフを見無い譯には行かず無かつた。將官の眞似を爲た、クツウゾフ幕下の將校、驃騎兵の旗士が、馬車から後へ戻つて、ドロオホフの所へ乘り付けた。

驃騎兵の旗士、ジエルコフは前に、ドロオホフが率ゐて居に彼得堡の暴れ者仲間に加はつて居た。ジエルコフは、此所外國で一兵卒に爲つて居るドロオホフに邂逅つた、けれども、聲を掛けるのは面白く無いこと

だと思つたのだ。が、今はクツウゾフがその貶された將校と言辭を交へてからなので、彼は、古くからの朋友の有らゆる親しさで話し掛けた。

『信友、何うだい』と、行進して居る隊兵と馬の足搔を合せながら、歌聲の裡で、彼は云つた。

『俺が何うしてるかと云ふのか？』と、ドロオホフは冷然と答へた。『ご覽の通りさ』。陽氣な歌謠が、ジエルコフの言語の閑氣な賑やかな調子と、ドロオホフの返答の何處までも落着た冷却とにヘンな味ひを與へた。

『ねえ、將校との折合は何樣な案配だい？』

『結構なんだ、衆皆好人物なんだ。君は何うして參謀部へ滑り込んだんだ？』

『僕は總司令官附だ——任務中さ』

雙方默つて居た。

『勢の好い蒼鷹を伴れて行き、
右の袖から出して遣つた』

と、歌謠が云つて、勇氣と快活の感を我れ知らず人々の胸に起こさせた。二人の談話は、歌謠が謠はれて居無い間であつたら、確にこれとは異つたものであつたらう。

『實際かい、墺地利人が敗ぶられたといふのは』と、ドロオホフが尋いた。

『寸毫も分からん、さういふ話だけなんだ』

『愉快だ』と、ドロオホフは、歌謠の調子に合せるやうに求められたとでも云ひさうな簡潔な勁い返答を爲た。

『おい、そのうち晩に來無いか、ファロオを一番行かうや』と、ジエルコフが云つた。

『君等の方には其樣に錢が多量かね』

『是非、來給へ』

『駄目だ、爲らんと誓を立てたんだ。昇級するまで、飲みもせず、賭けも爲無いんだ』

『おい、けれども、第一戰で……』

『その時ア、又』。再雙方止めた。

『何か欲しい物が有つたら、來給へ、參謀部の方ぢやア何時でも何うにか爲るんだ……』

ドロオホフは莞爾とした。『心配ご無用だ。欲しい物があつたつて、貰ひになんぞ行くんぢやア無い、唯だ此方で取つちまふんだ』

『うん、成る程、僕は唯だ……』

『うん、俺も唯ださ』

『左樣なら』

『左樣なら』

『遙に自由に、

わが國へ』

ジエルコフは馬に拍車を加へた、馬は何の脚から出て宜いか分からずに、烈しく三遍脚を擧げた、で、それから、分隊を廻はつて駈け去つて、依然歌謠に合せるやうな步調で、馬車に追ひ付いた。

（三）

閱兵から歸つて、クツウゾフは、墺地利の將官と一緒に、自分の居間へ行つた、そして、副官を呼んで、新しく到着した軍隊の狀況に關する或る書類と、前衛軍を率ゐて居る大公フェルディナンドから來た書狀を持つて來るやうに言ひ付けた。公爵アンドレエー・ボルコオンスキーは、言ひ付けられた書類を持つて總司令官の部室へ入つて來た。クツウゾフと軍事會議の議員とは、卓子の上に廣げてある地圖を研究して居た。

『あゝ』と、ボルコオンスキイを見返つて、クツウゾフは云つた、そして、その言語で副官に待てといふ意味を知らせて置て、爲掛けて居た佛蘭西語での對談を續けた。

『唯だ一つ申して置き度いことがあります。將軍』、クツウゾフは、誰をも徐々と出す一語々々を聞かずには居られ無いやうに爲る心持好く上品な文句と調子で、斯う云つた。明白に、クツウゾフ自身も心持好く我と我が聲に聞き入つて居るのであつた。『私の云へるのは唯だこれだけですわい、若し、これが私一個の望むまゝになるのでしたら、皇帝フランツ陛下の御意のまゝに、餘程前に致して居つたのであります、私は餘程前に大公と聯絡して居つたのであります。それで、確に、私一個の都合から云へば、私などより夐に經驗の多い老巧な將軍諸君——墺地利はさういふ方々に富んで居るのだが——さういふ將軍諸君へ軍の總司令權をお渡しゝて、この重大な責任を悉皆く投げ捨てゝ了まふといふことは、私一個の問題としては、甚だ安心なことであるのです。が、實際の事態はさういふ安逸を私に許るさんのでありましてな、將軍』。で、クツウゾフは微笑んだが、その表情は、『私の言辭を信じまいと思へば、貴下は全く勝手に信じずに居られるのだ

が、そして、實際貴下が私の言辭を信じやうと信じまいと、私には一向掛け構ひの無いことなのだが、然し貴下が私の言辭を信じ無いことを口外するに足る論據は貴下には無い。要點は唯其所なんだ』と、云つて居るやうに見えた。墺地利の將官は不滿な顏を爲た、が、同なじやうな調子でクツウゾフに答へるより外に爲方が無かつた。

『飛んだことで』と、彼は、突つかゝるやうな燥然した聲で云つたが、その調子は、彼が云つた言辭の機嫌を取るやうな意味と可笑しな對照を表はした、『それは飛んだことで、至高なる閣下の共同行動にご參加になる價値は陛下の非常に重んぜらるゝことなのであります。而るに、今のやうにご躊躇に爲つて居りましては、勇敢なる露西亞軍もその總司令官もこれまで戰へば必らずお得になつた月桂冠を此度はお得に爲る機會をお失ひになりはしますまいか』と、前以て用意して來たらしい言辭を結んだ。

クツウゾフは、矢張り前と同なじ笑顏で、點頭を爲た。

『けれども私は斯う確信して居ります、大公フェルディナンド殿下から賜はりました御書面に依りますと、將軍マックのやうな名將の命令の下にある墺地利軍は最早大勝せられて、われ〳〵の助力は既に無用になりましたらうかと思はれますが』と、クツウゾフは云つた。

將官は顏を顰めた。墺地利軍の敗戰に就ては、何の確報も無かつたが、不利な報告を確めるやうな事情は非常に多かつたのだ、で、墺地利の勝利に關するクツウゾフの想像は全く嘲弄のやうに響いた。が、クツウゾフは、何とでも想像するのは此方の勝手だと云はぬばかりの同なじ表情で、無邪氣にホヤ〳〵微笑んで居た。それに、實際、將軍マックの軍から來た手紙はマックの軍の勝利の見込みと、その軍が、戰略上最も有利な位地に在ることゝを彼に知らせて居たのだ。

『彼の手紙を持つて來て呉れ給へ』と、クツウゾフは公爵アンドレエーに聲を掛けた。『さア、一寸ご覽ください』——で、クツウゾフは、口の隅に皮肉な微笑を持たせて、大公フェルディナンドの獨逸語の手紙の中の次の條下を讀んだ——

『予は、敵軍若しレック河を渡らば直ちに攻擊して擊破せんと欲して、約七萬の兵を此所に集中した、我軍がウルムを支配し居る限り、われ〳〵は又ダニュウブの兩岸をも支配して居る、のみならず、敵軍若しレックを渡らずんば、我軍は、何時にても、ダニュウブを渡りて、彼等の聯絡線に達し、尙下流に於て同河を渡り戻り、而して、敵軍若しその全力をわれ〳〵の同盟者に向けんと試むる場合に有つては、全く敵軍の企畫を阻止することが能きる。此の如き狀態に於て、われ〳〵は、露西亞の皇軍の準備整ふの瞬時を、勇敢に待ち居り、而して、之と協働して、敵軍の當然擔ふべき運命を彼に供するの方を容易に講ずるであらう』

クツウゾフは、その條下を重い溜息で讀み終つた、そして、軍事會議の議員を凝乎と優しい眼付で見た。

『けれども、閣下、賢人は最凶事に備へよと戒めて居るではござりませんか』、冗談は最早これ限りにして、用務に掛らうと思ふらしい態で、墺地利の將官が云つた。彼は、副官をチラリと顧みざるを得無かつた。

『一寸失禮、將軍』、クツウゾフも、將官の言辭を止めて置いて、又、公爵アンドレエーに振り向いた。

『おい、君、コズロオフスキイから、斥候の報告を悉皆貰ふのだ。此所に伯爵ノスティッからの手紙が二本、これは、大公フェルディナンド殿下からのお手紙、此所に今一つ』と、數枚の書類を渡した。『で、かういふ

もの悉皆から、墺地利軍の行動に關してわれ〳〵が持つて居る情報が悉く解るやうな覺書を佛蘭西語で明瞭に造くつて呉れ給へ。宜いかね、で、さう爲て、それから、閣下にご覽に入れるやうに』

公爵アンドレエーは、總司令官の最初の言辭から、云はれたことばかりで無く、クツウゾフが自分に向かつて云ひ度かつたことまで、承知したといふ表示に點頭を爲た。で、書類を搔き集め、二人へ宛てた點頭を爲て、敷物の上を靜に歩いて、應接室へ出て行つた。

公爵アンドレエーが露西亞を出てからはホンの僅でありながら、彼はその間に非常に變つた。顏の表情にも、身振りにも、態樣にも、今は前の氣取り、倦怠、懶惰の痕は殆ど影も見え無かつた。他人に自分が與へる印象のことなどを考へて居る隙は無く、心持ちが好つて而かも有益な仕事に身を入れ切つて居る人のやうな態であつた。顏は自分及び周圍の人々に對する前より多くの滿足を表はして居た。微笑と眼使は前より快活で、そして懷かしげであつた。

彼が波蘭で追付いたクツウゾフは、彼を極く心措き無く迎へた、捨てゝは置かぬと約束し、副官の中でも一番彼に眼を掛け、維也納へ伴れて行き、そして、なか〳〵大切な任務を言ひ付けた。維也納から、クツウゾフは往時の戰友の、公爵アンドレエーの父親に、手紙を出した。

『ご子息は』と、クツウゾフは書いた、『勤勉と、不拔と、綿密とにて名を爲すべき將校と必らず爲らるべき望み十分である。我輩は、斯樣な良補助者を身邊に有するのは、仕合の至りと思うて居る』

クツウゾフの幕僚間朋輩將校間及び軍全體で、公爵アンドレエーは、彼得堡でのやうに二つの全然反對した評判を持つて居た。或る者――少數――は、公爵アンドレエーを自分たちや他の人々とは全く違つた人間だと見、彼の前途に大きい望を屬し、彼に聽き、熱心に彼を賞め、彼を眞似した。そして、さういふ人々に

對しては、公爵アンドレエーは、卒直であり、愛嬌があつた。他の連中――多數――は、公爵アンドレエーを好か無かつた、そして、意地の惡い、冷淡な、厭な人間だと思つて居た。が、後の連中に對しては、公爵アンドレエーは、又、それ等の人々から尊敬され、又恐れられさへするやうになるには、何う行動ば宜いかといふことを知つて居た。

クツウゾフの居室から、應接室へと出て來て、公爵アンドレエーは、引受けた書類を持つて、彼の同僚の當番の副官、コズロオフスキイが書籍を携つて窓に居る所へと行つた。

『何です、公爵』と、コズロオフスキイが尋ねた。

『吾々が何故前進せんかといふ理由書を作くることを言ひ付かつたんです』

『で、何故前進せんのです？』

公爵アンドレエーは肩を搖すつた。

『マックからは報告無し？』

『無し』

『若し破ぶられたといふのが眞實なら、情報が來る筈だがねえ』

『まア左樣だ』と、公爵アンドレエーは云つて、出やうと戸の方へと動いた。が、その途端に彼方から、戸を叩き付けて閉めて、背の高い男が應接室へ入つて來た。今來たばかりらしかつたその見知らぬ人は、大外套を着、マリア・テレサ勳章を頸に掛け、黑い頭巾を頭へ卷き付けた墺地利の將官であつた。公爵アンドレエーは、ピタリと止まつた。

『總司令官クツウゾフは？』と、將官は、濁聲の獨逸訛で、速語に尋いた。彼は、兩側を見廻し、足を止

めずに、居室の戸へと歩いた。

『總司令官は用務中で』と、コズロオフスキイは急いで誰だか分からぬ將官の傍へ行つて、戸口に立ち塞がつた。『誰方だとお取り次ぎを爲ませう？』

誰だか分らぬ將官は、俺を知らぬ奴があるのかと云はぬばかりに、傲然と、コズロオフスキイの背の低い姿を見下した。

『總司令官は用務中で』と、コズロオフスキイは、落着き拂つて繰り返した。

將官の顏が顰んだ、唇がピクリ〳〵震へた。手帳を取り出し、鉛筆で何か擲り付けて、その紙を裂き取り、コズロオフスキイに渡した、そして、ヅカ〳〵と窓の所へ行つて、椅子に腰を落し、何の爲めにさう俺を見るのだと尋きさうな顏容で部屋に居る人々を見返つた。それから、頭を高くし何か云はうと思ふかのやうに、頸を前へ延ばしたが、直ぐ、無頓着に鼻歌でも歌ひだすかのやうに、ヘンな聲を出した、けれども、それは直ぐ途中で切れた。居室の戸が開いた、そして、クツウゾフが戸口に現はれた。

頭を繃帶した將官は、危險から遁れるとでも云ひさうに、身體を前へ曲げて、クツウゾフの方へと大跨で行つた。その痩た脚は速く動いて。

『不運なマックが此所に居ます』と、苦しさうな聲で、佛蘭西語で、分明り云つた。

戸口に立つたクツウゾフの顏は、少時の間全然變らずに居た。やがて、顰縮が、波のやうに顏の面を走るやうに見えて、直ぐ、額を元のやうに滑かに戻した、恭やしく頭を下げ、眼を閉り、一言も云はずに、マックを居室へ送り込んで、後の戸を內部から閉めた。

この前から廣がつて居た、墺地利人が破ぶれてウルムの全軍が降服したといふ噂が、事實であつたことが

知れた。半時間經たぬうちに、命令を携つた副官が八方へ派遣された、これまで何も爲ずに居た露亞西軍が間も無く敵軍に遭會ふ筈であつたことは明瞭であつた。

公爵アンドレエーは、眼が戰役の全體の進行に集中する優れた參謀部將校の一人であつた。マックを見、その敗軍の詳報を知つて、この戰役は最早半分輪たのだと覺つた、露西亞軍の位地の非常に不利なことを認め、軍のその後の運命、及び軍がその後に爲すべき行動に於ての自分自身の仕事を、眼で見るやうに想像した。常に自負して居た墺地利の屈辱と、或ひは一週間もすれば、スヴォーロフの日以來始めての露西亞軍と佛蘭西軍との會戰を見得ること、又それに自分が參加することが能きることを思ふと、嬉しさが胸に湧きあがるのを禁じ得無かつたけれども、彼は、ナポレオンの天才は露西亞軍の勇氣の全力を以てしても何うにも爲らぬことになりはしまいかと恐れた、と、同時に、自分の最員なその大人物が露西亞軍に負けて屈辱に陷るのは、考へても厭で堪まら無かつた。

さういふ種々な考想の爲めに、昂奮し、燥れ込んで、公爵アンドレエーは、毎日手紙を出して居た父親の所へ、又手紙を出さうと、自分の部室の方へと行つた。廊下で、自分と同室で暮し居る戰友のネスヴィイツキイと、滑稽家のジエルコフに行き遭つた。二人は、例の通り、何か冗談を云つて笑つて居た。

『何うして左樣な心配さうな顏を爲て居るんだい？』と、公爵アンドレエーの蒼い顏と險はしい眼とを見てネスヴィイツキイは尋いた。

『笑ひどころぢァ無いからだ』と、ボルコンスキイは答へた。

公爵アンドレエーがネスヴィイツキイとジエルコフに逢遭つた丁度その途端に、廊下の彼方の隅から、露西亞軍の兵站部の仕事を爲る爲めにクツウゾフの幕僚に加はつて居た將軍スツラウホと、前の晩に着いた軍

事會議の議員が、三人の方へとやつて來た、將官たちは三人の傍を緩裕通れる位廣い廊下には餘地があつた。が、ジエルコフは、ネスヴィイツキイの腕を捉まへて引き戻して、極く速語に叫んだ——

『やつて來たぞ。……やつて來たぞ。……傍に寄れよ、路をお開けください、何卒、路をお開けください』

將官たちは、小五月蠅い敬禮などは避け度がつて居るやうな態樣で進んで來た。滑稽家のジエルコフの顏は、倏忽、堪らへ兼ねたやうな飄戲た間の抜けた微笑を含んだ。

『閣下』と、彼は、前へ歩み出て、墺地利の將官に言語を掛けて、『眞にお目出度うございます』。點頭を爲て、拙態に、舞踏の稽古を爲る兒童のやうに、兩脚で交互に床を搔き初めた。軍事會議の議員は彼を睨み付けた、が、彼の間の抜けた笑顏の眞面目さを見ては、寸時の注意を拒むことは能き無かつた。將官は眼を圓くして、後を聞かうと爲て居ることを示めした。

『眞にお目出度うございます。將軍マックがお歸りになりました、何のお變りも無く、唯だ此所に少々御負傷なすつたばかりで』と、さも嬉しさうな笑顏で、自分の頭を指して、云ひ足した。

將官は、顏を顰め、ブイと傍を向いて、歩きだした。

『痴愚な、餘まりな飄戲方ぢや』と、五六歩離れてから、腹立しさうに云つた。

ネスヴィイツキイは噴飯しながら、公爵アンドレエーの周圍に腕を掛けた、が、ボルコオンスキイは、一層蒼くなつて、恐ろしい權幕で、相手を突き飛ばし、そして、ジエルコフに振り向いた。マックを見、その敗報を聞き、露西亞軍の今後を考へたことなどで、起された燥然した胸の鬱結が、ジエルコフの場合を辨まへ無い飄戲方に對する憤怒と爲つて爆發した。

『君が』と、下顎に少し戰慄を持つて、酷しく、始めて、『幇間にならうといふのなら、それは、君の隨意

なんだが、若し、二度と僕の前で飄戲でも爲やうもんなら、僕は君に行儀の仕付けを爲て遣るぞ』

ネスヴィイツキイとジエルコフは、この怒號だしに唯だ呆れ返つて、眼を眞圓くしてボルコオンスキイを見詰めた。

『なに、僕は唯だ祝詞を述べたばかりなんだ』

『僕は飄戲けて居るんぢやア無い、默り給へ』と、ボルコオンスキイは叫んで、ネスヴィイツキイの手を摯つて、何とも返答の言語を見出し得無かつたジエルコフを捨てゝ置て、歩きだした。

『おい、何う爲たんだ、君』と、宥める積りで、ネスヴィイツキイが云つた。

『何うしたも斯うしたもあるもんかい』と、未だ激昂が治まらぬ爲めに立ち止まつて、公爵アンドレエーは、云つた。『おい君は、われ〳〵は皇帝陛下と露西亞の國とに盡し、その成功を喜ぶべき筈の將校なのか、それとも、われ〳〵は雇主の事業には何の痛痒も感じ無い唯だの雇人なのか、その差別を善く心得て居るべき筈ぢや無いか、四萬の兵が殺戮され、われ〳〵の同盟國の一軍が全滅したんだ、而るに、君等はそれを笑ひごとに爲て居る』と、終尾の方の佛蘭西語が自分の意見を一層强めるかのやうに云つた。『君が親しく爲て居る彼の男のやうな下ら無い人間はそれで結構だ、が、君は不可、君は不可。街路をゴロ付く不良少年でも無きやア、彼樣いふ冗談を云つて喜ぶものぢやア無い』、公爵アンドレエーは、急に露西亞語になり、不良少年といふ露西亞語を佛蘭西語の音勢で發音して、斯う云ひ足した。彼は、自分の言葉が未だジエルコフには聞えるのだと認めた、で、旗士が答へ無いか何うか見やうと待つた。が、旗士は彼方へ振り向いて、廊下を出て行つた。

（四）

驃騎兵のパアヴログラヅスキイ聯隊は、ブラウナウから二哩の所に駐屯して居た。ニコラアイ・ロストオフが少尉として勤めて居た中隊はサルッェネックといふ獨逸の村を宿舍に充てられた。その中隊の司令將校、その騎兵團全體にヴァアスカ・デニイソフの名で知られて居た大尉デニイソフが村の内の一番好い宿舍に當つた。少尉ロストオフは、波蘭で聯隊に追ひ付いてから以來、何時もデニイソフと同宿した。

十月の八日――總司令部では、マックの敗報の爲めに大騷動に爲つて居た丁度その日に――何時も通りの平凡な生活が、その隊の將校間には行なはれて居た。

ロストオフが、或る朝早く徵發任務から歸つて來た時に、一晩ぢう骨牌に負け續つけたデニイソフは未だ歸つて居無かつた。少尉の制服を着たロストオフは、馬を一シャクリして、昇降段まで乘り付けて、撓やかな若い擧動で片脚を搖り越さして、馬から離れるのがさも厭であるかのやうに、鐙を踏んで少時立つて居たが、到頭跳び下りて、從卒を呼んだ。

『おい、ボンダレエンカ、信友』と、馬へと驀地に駈けて來た驃騎兵に云つた。『彼方此方引いて歩いて呉れ、なァ』と、心嬉しい時に人の好い若い人々が誰に對してでも行爲ふやうな快活な兄弟のやうな親しさで云つた。

『はい、閣下』と、頭を機嫌好ささうに振つて、小露西亞人が答へた。

『宜いか、善く引いて歩くんだぞ』

今一人驃騎兵が又馬へと駈け付けたが、ボンダレエンカが最早手綱を捉へて居た。

少尉が、心付を多量にするので、彼の用を足すのはなか〳〵儲けになるのであつたことは明瞭であつた。

ロストオフは、馬の頭を撫で、次には後部を撫で、昇降段で依違つて居た。

『見事だ。實に良い馬に爲るな』と、獨で云つて、微笑みながら、軍刀を捉へて、拍車を鳴らしながら、昇降段を駈け上つた。宿舍の家主の獨逸人は、牛舍から覗いた、短上衣を着て、頂の尖つた帽子を冠り、今まで糞を掃除して居た熊手を持つて居た。獨逸人の顏はロストオフを見ると、直ぐ晴やかに爲つた。機嫌好ささうに微笑んで、眼眴を爲た。『お早う、お早う』と、若者に挨拶するのが嬉しいらしい態で、繰り返した。

『最早仕事ですか』と、ロストオフは、彼の熱心な顏には何時も出て居た同なじ嬉しさうな隔ての無い微笑で云つた。『墺地利人萬歲。露西亞人萬歲。皇帝アレクサンドル陛下萬歲』。ロストオフは、その獨逸人が屢云ふ文句を繰り返した。獨逸人は笑つて、全然牛舍を出て來て、帽子を脫つて、頭の上で振つて、叫んだ――

『尙、世間ぢう萬歲』

ロストオフも獨逸人のやうに、頭の上で帽子を振つて、笑ひながら叫んだ。『世間ぢう萬歲』牛舍を掃除して居た獨逸人に取つても、秣料の徵發から歸つたロストオフに取つても、別段嬉しいことがあるのでは無かつたが、二人とも、如何にも嬉しい、隔ての無い、懷かしい心持で相互に顏を見まもり合ひ、相互の愛情の表徵に頭を振り合ひ、笑顏で別れた、獨逸人は牛舍へロストオフは、デニイソフと一緒に居る田舍家へと。

『旦那は何處だ？』と、ロストオフは、デニイソフの侍僕で、聯隊中で誰知らぬ者の無い食へ無い漢のヴルウシカに尋いた。

『旦那は昨宵からお歸りになりません。輪けてお居ですな、何うしても』と、ラヴルウシカが答へた。

『最早この頃ぢやァ全然解りましたが、お贏ちならば、手柄話を爲さりに何時も朝早く歸つておいでです、けれども、朝に爲つてお歸りなさらずば、輪けたに違ひ無いです――憤然となつてお歸りですな。珈琲をさし上げませうか』

『左樣、持つて來て吳れ』

十分經つて、ラヴルウシカが珈琲を持つて來た。

『お歸りです』と、云つて、『さァ、事だぞ』

ロストオフは、窓の外をチラと見た、するとデニイソフが歸つて來るのが見えた。デニイソフは赤ら顏のピカ〳〵する黑い眼の、頰髯や髮がクシャ〳〵に紛れた小男であつた。扣釦の掛から無い騎兵服を着、方々皺になつてダラリとして居る太い下袴を穿き、頭の後部の方へ、潰ぶれた驃騎兵帽を載けて居た。沈み切つた態で、投げ頸で、昇降段へと近づいた。

『ラヴウシカ』と、ラ行の音を流して、高聲で、腹立しさうに、叫んで、『おいッ、これを脫れ痴者』

『へい、今脫つて居ります』と、ラヴルウシカの聲が答へた。

『やァ、最早起きてるのか』と、部室へ入りながら、デニイソフが云つた。

『ズツト前から』と、ロストオフは云つた、『僕は、最早乾草を取りに行つて來たんだ、そして、フラウライン・マティルデに逢つた』

『眞個かい？。我輩は、徹宵、笹棒に負け通しちまつた』と、ラ行の音を發音し無いで、デニイソフが叫んだ。『運の向か無かつたことつたら非常だつた。烈い不運よ。……君が歸つてから、全然かた無しだ。おゝい、茶は？』

デニイソフは、微笑んで居るかのやうに、顏に皺を寄せ、短い强い齒を見せ、指の短い手で、森のやうに紛れて居た濃い黑髮を搔き雜ぜだした。

『彼の鼠に向かつたのが運の果よ』（鼠といふのは相手の將校の綽名であつた）と、兩手で額から顏ぢうを擦つて、『何うだい、一枚もよこさ無かつたな、眞個に一枚も』と、渡された火を點けた煙管を取つて、拳でギユッと握り、火花を濺ね散し、床を叩き、尙且叫んだ。

『奴ァ唯賭をよこして置いちやァ、二重賭を贏ち、唯賭をよこして置いちやァ二重賭を贏ちよ』

デニイソフは、火花を濺ね散し、烟管を折つた、そして、それを投げ飛ばした。で、默まつた、が、不意に、ピカ〳〵する黑い眼で、勢好くロストオフを見て、――

『女が居さへすればなァ。だが、此所ぢやァ飲むより外何う爲ることも能きんのだ。早く戰鬪に加はれゝばなァ……。おゝい、誰だい？』と、皮の厚い靴と、チャカ〳〵いふ拍車の音が止まつて、恭やしい咳嗽拂が爲たのを聞き付けて、戶の方へ向いて呼ばはつた。

『曹長で』と、ラヴルウシカが云つた。デニイソフは尙一層顏へ皺を寄せた。

『面倒臭いな』と、金貨の幾個か入つて居た錢入を投げ出して、云つた。『ロストオフ、濟ま無いが、何れだけ殘つてるか勘定して、後で枕の下へ入て置いて吳れ給へ』と、云つて、曹長に逢ひに出て行つた。ロストオフは、錢を取つて、機械的に、古い金貨と新しいのとを擇つて積み分け、勘定しだした。

『やァ、テリヤァニン、お早う。昨夜全然卷きあげられちまつた』と、次の部室で云つて居るデニイソフの聲が聞えた。

『何處だつたい？。ピイコフの所かい？　鼠の所かい？……あゝ、聞いたよ』と、細い聲が云つた、と思ふと、直ぐ、部室へ、同なじ隊の小さい將校の中尉テリヤアニンが入つて來た。

ロストオフは錢入を枕の下へ入れ、差し出された濕潤した手を握つた。テリヤアニンは、何かの理由で、聯隊が出發するホンの間際に、近衛から移されて來たのであつた。聯隊での擧動は極く好かつた、けれども、誰にも好かれ無かつた、ロストオフは、殊に、厭で堪まら無かつた、そして、その將校に對する根據の無い厭惡を隱くし得無かつた。

『おい、若い騎兵さん、僕のグラチイクは君にやア何んな案配ですね？』（グラチイク――若い白嘴鴉――はテリヤアニンがロストオフに賣つた乘用馬であつた）。中尉は話をする時に先方の相手の顏を決して見無い男であつた。彼の眼は一つの物から他の物へと始終飛び移つて居た。『今日君が乘つて居たのを見たですが……』

『あゝ、彼りやア結構です、善い馬ですね』と、ロストオフが答へた、けれども、七百留出したその馬は、實際はその半分の價値も無かつた。『左の前脚で少し跛歩を引きだした……』と、云ひ足した。

『蹄が破れたんだ。そりやア何でも無いです、敎へてあげませう、付け方を敎へませう』

『えゝ、何卒』と、ロストオフが云つた。

『敎へませう、敎へませう、祕傳ぢやア無いから。けれども、彼の馬では僕に禮を云ふやうになります』

『馬を引いて來させませう』と、成るべく早くテリヤアニンを遁げ度く思つて、ロストオフは云つた。で、馬を引いて來させるやうに言ひ付けにと出て行つた。

外の部室では、デニイソフが、何か報告を爲て居る曹長と向かひ合つて、烟管を啣へて、敷居の所に蹋ん

で居た。ロストオフを見ると、デニイソフは、眼を圓くし、肩越しに、テリヤアニンが坐つて居た部室の方へ母指を指し、顏を顰めて、さも厭だといふ態に頭を振つた。

『うむう、彼奴は嫌ひだ』と、曹長の居るのに構はず、云つた。

ロストオフは、『僕もさ、けれども、何するもんで』とでも云ひさうに、肩を搖すつた。それから、馬のことを言ひ付けて置いて、テリヤアニンの所へ戻つた。

テリヤアニンは依然、ロストオフが置いて出た時と同なじ懶惰さうな姿勢で坐つて、小さい白い手を擦り合せて居た。

『厭な顏が世の中にやア有るものだなア』と、ロストオフは部室に入りながら、腹の裡で云つた。

『もし、君は馬を伴れて來ることを言ひ付けたですか』と、テリヤアニンは起ち上がつて、無頓着に四邊を見廻した。

『えゝ』

『では、來給へ、僕は唯だ昨日の命令のことをデニイソフに尋きに來ただけなんだ。あれが有つたかね、デニイソフ』

『未だ分からん。けれども、君は何處へ行くんだ？』と、テリヤアニンが云つた。

『この若い人に馬蹄の打ち方を敎へるんだ』と、テリヤアニンが云つた。

二人は昇降段を下り、厩へと行つた。中尉は、療治法の施し方を敎へ、そして、自分の宿舍へと去つて了まつた。

ロストオフが歸つて行くと、卓子の上に、露西亞酒の壜と、幾らかの腸詰が在つた。デニイソフは、卓子

に坐つて、彼のペンが紙の面をキイ〳〵云つて動いて居た。彼は、ロストオフの顏をさも悲しさうに見た。

『彼女の所へ遣るんだ』と、云つた。手に鐵筆を持つたまゝで、肱を卓子に凭せて、書く積りで居ることを口で云ふことの能きるのを嬉しく思ふらしい態樣で、手紙の內容をロストオフに話した。『なァ、君』と、云つて、『われ〳〵は、戀愛を爲るまでは、眠入つて居るも同然で、塵と灰の兒に過ぎ無いんだ……けれども、戀愛を爲れば、人は神だ、天地創造の第一日に於けるやうに、潔いのだ。……今度は誰だい？　畜生斷わつちまへ。忙がしくつて誰にも逢へんぞ』、ラヴルウシカは、斯う怒號られながら、一向臆せずに、デニイソフの傍へ進んで來た。

『なに、誰が來るものですかい。貴下ご自身で來いと仰しやつたでせう。曹長が金錢を頂きに參りましたんで』

デニイソフは顏を顰め、何か返答を怒號りさうであつた、が、何にも云は無かつた。

『五月蠅いなァ』と、彼は獨で云つた。『錢入に何程殘つてゐたね』と、ロストオフに尋いた。

『新しい金貨が七つ、古いのが三つ』

『あゝ、五月蠅いなァ。おい、何だつて其所に立つてるんだ、木乃伊奴。曹長をよこさんかい』と、デニイソフはラヴルウシカに怒號つた。

『ねえ、デニイソフ、僕のを使つとき給へ、僕は大分持つてるから』と、顏を赤く爲て、ロストオフが云つた。

『我輩は友人から金錢を借りるのを好まん、それが嫌ひなんだ』と、デニイソフはブツ〳〵云つた。

『戰友として僕から金錢を借りて呉れ無いとすれば、僕は心持が惡いね。實際持つて居るんだからさ』と、

ロストオフは繰り返した。

『うゝん、いゝや』。で、デニイソフは、枕の下から錢入を出しにと寢臺へ行つた。

『何處へ入れといたね、ロストオフ』

『底の方の枕の下だ』

『でも、其所にやァ無いぜ』。デニイソフは枕を兩方共床へ擲り出した。錢入は影も見え無かつた。『はて奇異だな』

『少時待ち給へ、君やァ一緒に落したんぢやァ無いか』と、ロストオフは、枕を一つ宛拾ひあげて、振つた、彼は臥褥を取り下して、振つた。錢入は尙且無かつた。

『忘れる譯は無いんだが？　いゝや、僕は君が祕密な寶のやうに頭の下へ入れるんだなと思つた位なんだもの』と、ロストオフは云つた。『僕は此所へ置いたんだ。何處へ行つたらう』と、ラヴルウシカに振り向いた。

『此の部室へは一度も參りません。お置きなすつた所に、無きやァならんですが』

『でも、無いんだ』

『貴下は何時も左樣でおいでなさる、物を何處へでも拋り出しといて、忘れてお了まひなさるんだ。衣囊をご覽なさい』

ラヴルウシカは、寢床を引つくら返して探した、その下を覗き、卓子の下を見、部室ぢうを引つくら返し、そして、部室の中央に佇立つた。デニイソフは、默まり込んで、ラヴルウシカの擧動を見まもつて居た、そして、ラヴルウシカが呆れて手を投げ擧げて、何處にも無いことを見せると、デニイソフは、ロストオフに

振り向いた。

『ロストオフ、兒童らしい調戯は止して吳れ』

ロストオフは、自分に向けられたデニイソフの眼を感じて自分の眼を擧たが、直ぐそれを再落した。咽喉の下の何處かに閉ぢ込められて居るかのやうに思はれた血が、顏と眼へ一遍に突つ掛けた。殆ど呼吸が吐け無かつた。

『で、部室には中尉と貴下がたつ限りで誰も居無かつたんだ。何處かこの部室ぢうに無ければ無いんです』と、ラヴルウシカが云つた。

『では、これ、おのれ、惡魔の廻者、駈け廻つて、探せッ』と、デニイソフは、不意に、眞赤になり、凄まじい權幕で侍僕に跳び掛りながら、怒號つた。『錢入を何うしても探し當てろ、で無きやア、貴樣を笞打るぞ、貴樣たちを皆笞打るぞ』

ロストオフは、眼はデニイソフを避け、制服の扣釦を掛けだして、軍刀を佩き、略帽を冠ぶつた。

『さア、何うあつても、錢入を探がし出せ』と、デニイソフは、侍僕の肩を捉へて拳突きながら、壁へ壓し付けて、哮つた。

『デニイソフ、その男は放し給へ、僕は盜つた者を知つてるから』と、ロストオフは、眼を擧げずに、戸の方へと行つた。

デニイソフは、止めて、少時考へたが、ロストオフの口振で解つた態樣で、ロストオフの腕を强く捉へた。

『痴愚な』と、デニイソフは、頸や額に血管が幾本もの繩のやうに現て來た位、眞赤になつて怒號つた。

『おい、君やア正氣かい、いゝや、それは何うあつても不可、錢入はこの部室に有るんだ、我輩はこの惡黨

を生ながら皮を剝いで吳れる、錢入は何うしても此所にある』

『盜つた者を知つてる』と、ロストオフは、震へる聲で云つて、戸へと行つた。

『でも、おゝい、左樣なことを爲つちやア不可』、デニイソフは、跳びかゝつて、少尉を引き止めやうと爲たが、ロストオフは、腕を引き放して、眼を擧げ、デニイソフが自分の一番怨み重なる敵ででもあつたかのやうな、凄まじい權幕で、デニイソフの顏を眞向に凝乎と睨み詰めた。

『君は自分で云つたことを考へて見給へ』と、震へる聲で云つた、『僕の外にやア誰もこの部室にやア居無かつたんだ。だから、若し、左樣で無いとすれば、左樣すれば……』

彼は、後を口へ出し得無かつた。そして、部室を駈け出た。

『うゝん、何うでも勝手にしろ、貴樣たちア』これが、ロストオフの耳に入つた最後の言語であつた。

ロストオフはテリヤアニンの宿舍へ行つた。

『旦那は居ません、司令部へ行きました』と、テリヤアニンの從卒が云つた。『何事です？』と、少尉の心配さうな顏を訝みながら、云ひ足した。

『いや、何でも無い』

『ホンの今しがたでした』と、從卒は云つた。

司令部は、サルツェネックから三露里であつた。先方が不在なので、ロストオフは馬に乘つて、司令部へと行つた。司令部の置いてあつた村には、將校が屢く行く料理屋があつた。ロストオフは料理屋の所まで行くと、入口でテリヤアニンの馬を見掛けた。

二番目の部室に、中尉が腸詰一皿と酒一壜を扣へて、坐つて居た。

『やア、君も來ましたね』と、彼は、微笑んで、眉を擧げた。

『えゝ』と、ロストオフは、口をきくのが非常に勞だとでも云ひさうに、唯それだけ云つた、そして、一番近くの卓子に腰を落着けた。

雙方默まつて居た、部室には二人の獨逸人と、一人の露西亞の將校が居た、誰も默まつて居た、聞えるのは、皿にカチヤ〳〵當るナイフの音と、中尉の食物を嚙む音ばかりであつた。テリヤアニンは、中食を終うと、衣嚢から、二重錢入を取り出した、尖頭の彎がつた小さい白い指で輪を脫して、金貨を出し、眉を擧げて、給仕に渡した。

『急いで吳れよ』と、云つた。

金貨は新しかつた。ロストオフは起つて、テリヤアニンの傍へ行つた。

『錢入を見せ給へ』と、殆ど聞取れ無いやうな低い聲で云つた。

キヨト〳〵した眼付で、依然眉を擧げたまゝで、テリヤアニンは錢入を渡した。

『うん、良い錢入だらう……左樣』と、云つたが、不意に白く爲つた。『見ても宜いよ、君』と、云ひ足した。

ロストオフは、手に錢入を取つた、そして、それと、なかの錢までも見た、それから、テリヤアニンを見た。中尉は、例の通り、四邊を見廻して居た、が、不意に甚くハシヤいで來た。

『維也納へ行けば、此樣な物は一遍に無くなるんだ、けれども、此樣なケチな狹い所ぢやア錢の使ひ場所なんか有りやアし無い』と、云つた。『おい、返して吳れ、君、歸るから』

ロストオフは、物を云は無かつた。

『君は何うするんだ？　君も中食かね？　なか〳〵食はせる家なんだ』と、テリヤアニンは言辭を續けた。

『吳れ給へ』。彼は、手を出し、錢入を捉へた。ロストオフは放した。テリヤアニンは錢入を取つて、無造作に乘馬袴の衣嚢へそれを落しだした、その間、『うん、うん、俺は自分の衣嚢へ自分の錢入を入て居るんだ、それは全く當り前のことだ、誰も何とも云ふことの能き無いことなんだ』とでも云ひさうに、眉は無頓着に擧り、口は少し開いて居た。

『で、若者』と、彼は溜息して、云つた、そして、擧げた眉の下から、ロストオフをチラと見た。閃光のやうなものが、電光の迅速で、テリヤアニンの眼からロストオフの眼へと過ぎ、それから、逆に戻り、又行つて、又戻つた、それは、總べてホンの一刹那であつた。

『此方へ來給へ』と、テリヤアニンの腕を捉まへて、ロストオフが云つた。彼は、テリヤアニンを窓の所まで宛然引摺るやうに爲て行つた。『彼は、デニイソフの金錢だ、君は盜つたんだ……』と、耳へ囁いた。

『何？……何？……何うして貴樣其樣なことを？……何？』と、テリヤアニンは云つた。が、さういふ言辭は、泣くやうな絕望した叫、又、宥恕を請ふ懇願のやうに響いた。ロストオフは、その聲を聞くや否や、何う爲るか〳〵と思つて居た氣掛りの石のやうな非常な重量が、心から轉がり落ちて了まつた。彼は、ホツと嬉しく感じた、が、その途端に、自分の前に居る不幸な人間を憫然に思つた、けれども、爲り掛けた事はカタを付け無ければなら無かつたのだ。

『此所に居る奴等が何と思うか知れやし無い』と、テリヤアニンは、口の內で云つて、略帽を引攫んで、小さい空部室の方へと行つた。『聞き捨てにやアならん……』

『僕は知つてる、證據もチヤンとあるんだ』

『我輩……』

テリヤアニンの恐怖れた顏は、筋肉全體が痙攣だした、眼は不安さうに動きはしたが、床へ向いて居て、ロストオフの顏と平準の所へは決して擧がらず、そして、悲しさうな歎息が聞えた。

『伯爵、……この若い男の前途を打破さずに置てください、私の爲めにはこの錢は惡魔でした、さァお持なさい』……彼は卓子へそれを擲り出した。『私には年取つた兩親があります』

ロストオフは、テリヤアニンの顏は見無いやうに爲て、錢を取つた、そして、一語も云はずに、部室を出た。が、戸口で止まつて、振り返つた。

『眞個に』と、眼に涙を湛へて、云つた。『何だつて君は斯樣な情け無いことを爲たんですか』

『伯爵』と、少尉に近寄りながら、テリヤアニンは云つた。

『僕に觸つちやァ不可』と、ロストオフは體を退て、『君困るんなら、この錢を使ひ給へ』

彼は、テリヤアニンの手に錢入を握らせて、料理屋を駈け出た。

（五）

同なじ日の晩に、デニイソフの宿舍では、その隊の將校たちの間に、盛に議論が戰はされて居た。

『だが、おい、ロストオフ、君は何うしても、聯隊長に詫び無ければいかんよ』、背の高い、參謀の大尉は、激昂して眞赤になつて居たロストオフに向かつて、斯う云つて居た、參謀の大尉、キイルステンは、――半白の髮の、圖抜けて大きい頰鬚の、厚ぱつた道具立ての、皺の多い顏の男であつたが――名譽に關する事柄で、二度卒伍に貶とされた、そして、二度とも、元の職に登つたのであつた。

『虛言を吐くと云はれては、相手が誰でも承知が能きるもんかい』と、ロストオフは叫んだ。『彼方が僕のことを虛言者と云つたから、僕も彼方を虛言者と云つたんだ。唯だそれだけなんだ、僕は毎日當番に爲れぬうとも、僕は拘禁されやうとも、それは、長官の命の儘だから、爲方が無い、けれども、誰の言ひ付けでも僕を詫させることは能き無いよ、何故なら、彼方は大佐として、位地の低い僕と決鬪することは、身分柄能き無いといふんなら、左樣なら……』

『だが、まァ、待て、君、我輩の云ふことを善く聞け』と、參謀の將校は、落着拂つて、長い頰鬚を撫でながら、濁聲で云つた。『君は、他の將校たちの前で、大佐に、或る將校が盜みを爲たと云つた……』

『談話が他の將校たちの前で出たのは、僕が惡いのぢやァ無い。それは衆皆の前で云は無かつた方が宜かつたも知れ無いんだが、僕は外交官ぢやァ無いんだ。だからこそ僕は驃騎兵に入つたんだ、此所では、其樣なコセ〳〵した斟酌なんぞは要ら無いと思つて居たんだ、それだのに、聯隊長は僕が虛言者だと云つた……僕は彼の人から僕の胸の晴れるやうに爲て貰らひ度いんだ』

『それは至極道理だ、誰も君を臆病者だとは思やァせんよ、だが、問題は其所ぢやァ無い。君解ら無きやァ、デニイソフに聞いて見給へ、少尉が自分の隊の大佐から滿足を求めるなどは飛でも無いことぢやァ無いのか、何うか』

デニイソフは、不機嫌さうな顏容で、談話に加はるまいと思つて居るらしく、唯だ聞きながら、口鬚を嚙んで居た。大尉の問に對しては、勿論飛んでも無いことだといふ意味に、頭を振つただけで答へた。

『君は他の將校たちの前で、この怪しからん事件を大佐に話した』と、參謀の大尉は、前からの言辭を追つた『ボグダアニイチが』（ボグダアニイチと衆皆が大佐を呼んで居たのだ）『君を叱つたんだ』

『いや、左樣ぢやァ無かつた。僕の云つたことを虛言だと云つたんだ』

『その通りだ、君は聯隊長に痴愚しいことを話したんだ、だから、君は詫び無きやァ不可』

『何うしたつて詫び無い』

『君にしては意外な返答では無いか』と、參謀の大尉は、顏色を變へて、嚴しく云つた。『君は何うあつても詫んといふのだね、けれども君、君に侮辱されるのは、唯だ大佐ばかりで無く聯隊全體、卽ちわれ〳〵全體なのだ、君は四方八方に對して濟んことを爲たのだ、考へて見給へ、君はその事を善く熟考した上で、その事に就ては何ういふ扱ひを爲たものか內密に他人に相談すべき筈であつたのだ、それを、君は匆卒、多數の將校の前で喚いて了まふのだからなァ。聯隊長もそれでは爲やうが無からうでは無いか。その將校を呼び出して審問して、聯隊全體が恥辱を蒙むるのかね？。その唯つた一人の惡漢の爲めに聯隊全體に恥を搔かせても宜いかね、聯隊長は左樣すべきであつたのかね、君は左樣思ふのかね？。我輩等は左樣は思はんのだ。ボグダアニイチの所置は道理だ。君に向つては、君の話が虛僞だと云つたのだ。厭なことだ、だが、聯隊長に取つては他に爲やうが有るものかい？　畢竟君自身が惡りいのだ。所で、衆皆が事件を圓滿に濟まさうとするといふと、君はズツと高く豪く構へ込んで了まつて、詫びて堪まるものかと反り返つて、話を全然ぶちまけやうと爲るでは無いか。君は餘分に當番に爲れることを怒つて居るやうだが、然し、年長の尊敬すべき將校に詫びることが君に取つて何でさう苦しいんだ。ボグダアニイチは何であらうと、右に左、尊敬すべき年を取つた大佐では無いか。君は、それでも、怒つて居て、聯隊を侮辱することなどは何とも思つて居らん』。參謀の大尉の聲は震へ始めた。『貴下は、ねえ、聯隊へ來てから未だ何日も經たん、君は、今日は此所に居るだらうが、明日に爲つたら、將官附に爲つて、何處へか行くか知れんのだ、君は、他人が「パアヴログラァ

ドの將校の間には盜賊が居る」と云ふのなどは何とも思はんだらう。けれども我輩どもはそれは苦しいのだ。何うだ、デニイソフ？。われ〳〵は苦しくは無いか』

デニイソフは依然物を云はず、動か無かつた、彼のピカ〳〵する黑い眼が、時々、ロストオフをジロリ〳〵見た。

『君の自尊心が君には貴くつて爲方が無いのだ、それで、君は、詫びる氣が、無いのだ』と、參謀の大尉は續けて、『けれども、聯隊で年を取り、神の御意次第で、聯隊に居て死なうと思ふわれ〳〵老人は、われわれに取つては聯隊ほど貴いものは有りはせん、ボグダアニイチはそれを知つて居つたのだ。おい、われ〳〵には聯隊が一番貴くは無いかね、君それでは不可よ、それでは不可よ。君は怒るかも知れんが、斯う云つたら、けれども、我輩は有りの儘の眞實を云つて居るのだ。君、それでは不可よ』

で、參謀の大尉は起ち上つて、ロストオフに背部を向けた。

『その通りだ、畜生』と、デニイソフは、跳びあがつて、云つた。『さァ、ロストオフ、さァ』

ロストオフは、眞赤になり又直ぐ蒼く爲つて、將校の顏を順々に見た。

『いゝや、諸君、いゝや……君たちは考へ違ひだ……僕には善く解つてる、君たちは僕の心持を取り違へてる……僕が……僕に取つては……聯隊の名譽の爲めには、僕は……いや、それは云ふまい。僕は、それを實行で證明する、そして、僕に取つても聯隊旗の名譽が……うん、何うでも宜い、それは眞實だ、僕が惡いんだ』。ロストオフの眼には涙が出て居た。『僕が惡かつた。誰にも失敬だつた。さァ、これで宜かァ無いかね』……

『やァ、結構だ、伯爵』と、參謀の大尉はグルリと振り向いて、大きい手てロストオフの肩を叩いて、叫

んだ。

『おい、衆皆』と、デニイソフは叫んで、『立派な男ぢやァ無いか』

『結構です、伯爵』と、參謀の大尉は、ロストオフの告白を賞めるかのやうに、爵位を云ひ始めて、繰り返した。『行つて、詫びて來給へ、閣下』

『諸君、僕は何でも爲る、僕はこれからは一言も云は無い』と、ロストオフは、懇願するやうな聲で云ひ張つて、『けれども、僕にやァ何うしても詫びられ無い、何うあつても、不可、諸君が何と云つても宜い。小さい兒童が謝罪るやうに、何うしたつて詫びられるかい』

デニイソフは笑つた。

『詫び無ければ、ます〳〵君の爲めに善く無からうよ。ボグダアニイチは物を忘れ無い男だ、君の執拗に對して君に思ひ知らせることがあるだらうぜ』と、キイルステンが云つた。

『いゝや、何うして、執拗ぢやァ無いんだ。僕は、何と云つて宜いか解ら無い心持が爲るんだ。僕にやァ詫びられ無い』

『では、君の勝手にするさ』と、參謀の大尉は云つた。『その惡漢は自分では何うしたのかね』と、デニイソフに尋いた。

『病氣だといふ屆を爲たんだ、明日は、彼奴の名前を隊の名簿から除つて了まふ命令が來る筈なんだ』

『成るほど病には違ひ無いな、それより外に說明の爲やうが無いわい』と、參謀の大尉は云つた。

『病でも、病でなくても、彼奴は我輩の眼に掛らんやうに爲るが宜いんだ――我輩はその時は生して置かん』と、デニイソフは、凄い權幕で叫んだ。

ジエルコフが、部室へ入つて來た。

『何うして此樣な所へ來たんだい』と、將校たちが一遍に叫んだ。

『戰線へ、諸君。マックは彼の全軍を擧げて降服したんだ』

『痴愚を云つちやァ不可』

『僕は自分で彼を見たんだ』

『何だつて？　手も脚も揃つて生きて居るマックを見たのかい？』

『戰線へ。戰線へ。此樣な善い報告を持つて來たんだから、一堰當てがへよ。何うして此所へ來たんだい』

『僕は彼のマックの惡魔のお蔭で、又聯隊へ追ひこくられちやつたんだ。墺地利の將官が僕のことを訴へたんだ。僕はマックの歸つた祝詞を述べただけなんだ。……何う爲たい、ロストオフ、湯から出たばかりと云ひさうな顏ぢやァ無いか』

『この二日ばかりは隨分酷い目に逢つたんだ、君』

聯隊副官が入つて來て、ジエルコフの持つて來た報を確めた。聯隊は次の日出發すべき命令の下にあつたのだ。

『戰線へ、諸君』

『やァ、有り難いな、われ〳〵は此所にへバリ付いて居るのは、最早飽々して居たんだ』

（六）

クツウソフは、後方の、イン川（ブラウナウの）とツラウン川（リンツの）の橋を破壞して、維也納の方へと退却した。十月の二十三日に、露西亞軍はエンス川を渡つた。露西亞軍の輜重車輛と砲と、諸兵の隊列は、その日の眞晝頃橋の兩側のエンスの市を横ぎつて、長い絲のやうに延びて居た。暖かで、秋らしい日で、雨が降つて居た。橋を保護する爲めの露西亞軍の砲兵陣地の立つて居た高地からの廣い眺望は、吹き降の雨のモスリンのやうな帷帳の爲めに狹く限られて居たが、やがて、廣くなつて、輝いた日光の下で、遠くの物體が、假漆で塗つた被衣を掛けたやうに、艶々しく明瞭と見えた。下には、小さい市の白い家、赤い屋根、寺院、橋が見え、その橋の兩側を、露西亞軍の一緒に集まつた集團が流れて居た。ダニュウブ河の曲がつた所には船と、その河へ流れ込んで居るエンス川の水で取り圍かれた島と、廣い園のある城が見え、ダニュウブ河の左の險しい岸は、その彼方には綠の樹の頂上や青んだ谷が神秘的に遠くへ續いて居た松樹林で蓋はれて居た。自然に生ひ繁げつて、人間の手の更に觸れた痕の無いやうに見えたその松樹林の彼方に、尼寺の塔が幾つか立つて居り、それから、前面の遙か遠方の、エンス川の遠くの側の丘の上には、敵の斥候が見えた。

高地の砲の間に、後衞の司令官の將官と、その幕僚の一人の將校が立つて、望遠鏡で地形を偵察して居た。二人の少許後に、砲身に腰掛けて、總司令官から後衞へ差遣されたネスヴィイツキイが居た。ネスヴィイツキイに隨いて來た哥薩克兵が、背嚢と水筒を彼に渡した、そして、彼は、パイと純粹のドッペル・クムメルを將校たちに薦羞つて居た。將校たちはネスヴィイツキイを取り圍いて、嬉れしさうな團欒になつて、或る者は踞み、或る者は、濕つた草の上に、土耳古人のやうに、脚を十字に組み合せて坐わつて居た。

『左樣、此所の城を建てた墺地利の皇族は、可なり悧巧な人ですな。實に、景色の好い所だ。何故食べませんか、諸君？』と、ネスヴィイツキイが云つた。

『何うも有り難うございます、公爵』と、さういふ位置の高い參謀官と話を爲る機會の有るのを喜んで居る將校の一人が答へた。『景色の好い所です。われ〳〵は直ぐ園の傍を進んで來ました。鹿二匹と立派な家が見えましたぜ』。

『御覽なさい、公爵』と、今一人が云つた、この男はパイが食ひ度くつて堪まら無かつたのだが、それでも、何分手を出すのが恥かしいので、四邊の田舍を眺めて居るやうな風を裝ほつたのだ。『御覽なさい、我軍の歩兵は今丁度彼所へ達しました。彼方の、村の後の牧場の所で、そのうちの三人が何か引摺つて居ます。奴等は、奇麗に御殿を空にするでせう』と、明白に賛成な風で云つた。

『全く』と、ネスヴィイツキイは云つた。『いや、だが、我輩の望みは』、濕つた奇麗な口のなかでパイを嚙みながら、斯う云ひ足して、『彼方へ忍び込むことなんだ』と、山腹に見えた塔のある尼寺を指した。彼は、眼が細くなつてピカ〳〵して、微笑んだ。『左樣、それが一等善いぢやァ無いか、諸君』。將校たちは笑つた。

『少しは尼を威嚇した方が宜んですがねえ、奴等の間にやァ伊太利娘が居るといふ話ですぜ。確に、僕はその爲めなら五年位命を縮めても惜しく無いですよ』

『奴等も隨分退屈だらうよ』と、少し大膽な將校が、笑ひながら、云つた。

此方では左樣なことを云つて居る間に、前面に立つて居た幕僚の將校は、將官に何物かを指し示めした、將官は望遠鏡で見た。

『左樣、左樣なんだ、左樣なんだ』と、將官は、望遠鏡を眼から離して、肩を搖すつて、腹立たしさうに云つた。『敵は彼奴等が川を越す所で擊たうと爲て居るんだ。それだに、何故彼奴等は彼樣に長くグズ付いて

居るんだなア？』

その方向を見れば、肉眼で、敵と、牛乳のやうな白い烟が立ち登つて居る砲兵陣地とが見とめられた。烟の後から直ぐ、遠くの砲の音が聞えて來た、そして、確に、我軍は渡川の場所へと急いで居た。

ネスヴィイツキイはフウ〳〵云ひながら起ち上つて、微笑みながら將官の所へと行つた。

『中食を爲さいませんか、閣下』

『何うも不可な』、將官は、彼には返答を爲無いで、斯う云つて、『我軍は餘まりグズ付いて居る』

『私が參つて宜しいでせうか、閣下』

『左樣、行つて吳れ給へ、何うか』と、將官は云つて、最早出してあつた命令を、今一度細に繰り返した、『驃騎兵に最後に渡つて、橋を燒け といふことゝ、橋の上へ燃燒材料を集めて置くことの命令を傳へて吳れ給へ』

『承知しました』と、ネスヴィイツキイは答へた。馬を番して居た哥薩克兵を呼んで、背嚢と水筒の始末を言ひ付け、そして、自分は、重い體軀を輕々と鞍の上へ搖り上げた。

『いよ〳〵、尼さんの所へ尋ねて行きますぜ』と、微笑みながら、彼を見まもつて居た將校だちに云つて、そして、山の下の曲つた路を乘り進んだ。

『さア、大尉、何處まで達くか爲つて見給へ』と、砲兵將校に振り向いて、將官が云つた。『時間潰に一惡戯爲つて見るさ』

『砲に就け』と、將校が號令した、と、直ぐに、砲兵は勢好く焚火の所から駈け付けて、大きい幾つかの砲に裝彈した。『一』と、彼等は、號令の言語を聞いて、第一番は敏捷く跳び返つた、砲は耳を聾するやうな

金屬の音で迂鳴つて、山の下の我軍の將士の頭の上を、シュウ〳〵云ひながら、榴彈が飛んで行つた、そして、敵から覔然手前で落ちて、立登る烟で、それが落ちて破裂した場所を示めした。

將校と兵の顏がその音で勢付いた。誰も彼も起ちあがつて、手の掌にあるやうに見える、下の我軍の運動と、進んで來る敵の狀態を一生懸命に見まもつた。

恰もその時、太陽が雲の陰から全然出て來た、そして、唯一彈の響き渡つた音と、輝いた太陽のクワツとした光が、互に雜つて溶け合て、輕快な陽氣さの、人の心を勢付ける一つになつた印象を形造つた。

（七）

橋の上を最早敵彈が二つ飛んだ、そして、橋の上は大混雜に爲つた。橋の中央にネスヴィイツキイが立つて居た。馬を下りて、欄干へ壓し潰されさうに肥つた體を壓し付けられて立つて居た。彼は、二匹の馬の轡を執つて五六步後方に立つて居た自分の哥薩克兵を、笑ひながら顧みた。ネスヴィイツキイが、先方へ行かうとする度毎に、進んで來る兵と輜重車が彼に突つ掛つて來て、又欄干へと彼を突き除けて了まふのであつた。

彼は、微笑んで居るより外爲方が無かつた。

『おい、こらア、其所の奴』と、車輪と馬へグン〳〵壓し付けて來る步兵の間を無理やりに通らうと爲て居た輜重車を監して居る兵卒に、哥薩克兵は斯う云つた、『貴樣何うしやうと云ふんだい、おい、寸時待てよ、將官がお通りなさらうてんぢやア無いか』

が、輜重兵は、將官と云つたのなどは耳にも入れぬ體で、路を塞いで居る兵卒たちに喚いた、『やアい、衆皆、左へ寄れ。少し待つてろ』。が、衆皆は、肩と肩を連らね、銃劍を列べて、一つの密集になつて、橋の上

を進んだ。欄干から下を見ると、公爵ネスヴィイツキイには、エンスのザワ〳〵いふ速い、けれども、高くは無い川浪が橋臺の周圍で渦を卷いて、互に追つ掛け合ひながら流れ下るのが見えた。橋の上を見ると、何れも此れも同なじに、蓋被の掛かつた軍帽、背嚢、銃劍、長い旋條銃で、軍帽の下には、廣い顎、窪た頰、ダラリと草臥たやうな態の顏があり、脚は、ヘバリ付く泥で被はれた橋板の上を、動いて居る兵卒の生きた波浪が流れて居た。時々、兵卒の單調な流の間に、エンスの川浪のなかの白い泡の浪頭のやうに、兵卒とは全然違つた型の顏の、外套を着た將校が割つて通つた。時には、川面をグル〳〵廻つて流れる木片のやうに、馬を下りた驃騎兵だの、從卒だの、市の住民だのが、兵卒の波の間に混つて橋を越えた。時には又、川を流れ下る丸木のやうに、橋の上を、四方を圍まれて、高く物を積んで柔皮の外被を被けた輜重馬車が動いた。

『やァ、堤防の決れた河のやうだなァ』と、爲方無さそうに立ち止まつて、哥薩克兵が云つた。『未だ彼方に多勢居るかい？』

『百萬人マイナス一人』と、裂けた外套の調戯けた兵卒が云つて、眴を爲て、直きに先きへ行つて、見え無く爲つた、その後から、今一人の兵卒、少し年取つたのが來た。

『奴が』（奴とは敵を云つたのだ）『今橋の上をドシ〳〵擊ちだしたら』と、年取つた兵卒はその同行者に向いて、怖さうに云つて、『お前なざァ身體を搔く所ぢやァ無えだらうぜ』。で、そのタンボフ兵と、同行者は通つて了まつた。その後から、輜重車に乘つた今一人の兵卒が來た。

『やい、畜生、俺の脚絆を何處へ置きやァがつたい？』と、輜重車を追つ掛け、その後の方を搔き探して、從卒が云つた。で、それも又通つて了まつた。

それから、確に醉つて居たらしい幾人かの賑かな兵卒が來た。

『で、奴は跳び込んで、臺尻で、齒を眞向から喰はしたんだ』と、兵卒の一人が、腕を廣く振つて、さも可笑しさうに云つた。

『宛然旨い鹽豚肉の味が爲たい』と、ハァ〳〵笑ひながら、今一人が答へた。それ限りで、その連中は行つて了まつたので、ネスヴィイツキイには、誰が齒を打たれたのか、鹽豚肉がそれと何う關係があるのか解ら無かつた。

『左樣、衆皆最早大急ぎなんだ。奴が冷たい鉛の片を飛ばしだせば、衆皆殺されだすと思つて居るんだらう』と、下士官が、腹立しさうに、叱り付けるやうに云つた。

『俺の傍を迂鳴つて通つた時にやァ、伯父さん、銃丸がね』と、大きい口の兵卒が、可笑しさを堪らへ切れぬ體で、云つた。『俺は全然痺れあがつちやつた。眞個に、慄へ上がつたんぢやァねえかね』と、自分の恐怖を誇るやうな態で、云つた。

それも、直き行つて了まつた。その後は前に通つた孰とも違つた荷馬車が來た。二頭立ちの獨逸の驛遞馬車で、全然一世帶全體積んであつた。馬は、一人の獨逸人に導びかれ、その後に圖抜けた大きい乳の奇麗な斑の牝牛が縛つてあつた。積みあげた羽毛褥の上に、小さい赤兒を抱いた女と、年寄りの女と、顏立の好い頰部の桃色な獨逸娘が坐つて居た。彼等は、明白に、特別の許可を得て、軍隊の間へ入つて、避難する田舍人であつた。總ての兵卒の眼が、女たちの上に向けられた、そして、荷馬車が、一歩位づゝそろ〳〵と動いて行く間、兵卒の言語は悉皆二人の女のことであつた。何の顏も、その女たちに對する怪しからん考想を反射する、何れも此れも同なじな微笑を表はして居た。

『やァい、腸詰、動いてきやァがらァ』

『お前のお娘を俺に賣らんかい』と、今一人の兵卒が、獨逸人に聲を掛け、獨逸人は、腹を立てた不安の體で、伏目になつて急ぎ足になつた。

『美裝込んで居やがるぢやァ無えか。やい、畜生奴等』

『おい、何うだい、奴等の所を宿舍に充てゝ貰らひ度えだらう、フェドオトフ』

『俺だつて一寸と腕はあるんだからな、朋輩』

『何處へ行くのかね』と、林檎を食つて居た將校が尋いた。これも半ば笑顏で、奇麗な娘を見詰めて居たのだ。獨逸人は眼を閉つて、言語の通じ無いことを見せた。

『宜ければ、あげませう』と、云つて、將校は娘に林檎を與つた。娘は微笑んで、それを受けた。ネスヴィイツキイも、橋の上の外の衆皆と同なじに、女たちが通つて了まふまで、一度も眼を離さずに見て居た。女たちが行つて了まふと、後は又前と同なじの兵卒が、同なじやうな話を爲ながら來たが、やがて、衆皆ピタリと止まつて了まつた。屢く有る通、橋の袂で、輜重車の馬が荒れだしたので、衆皆は待た無ければならぬ無かつた。

『何んだつて奴等ァ止まつてやがるんだなア。最早秩序も何も有りやァし無い』と、兵卒たちが云つた。

『何處へ押してくんだい？』『こん畜生』『一寸待て無えのかい』『奴が橋を燒いたんだと此れ所ぢやァ無かつたらうなァ』

『見ろ、將校も彼樣な所へ壓し付けられてるぢやァ無えか』と、兵卒たちは、止まつた群集の諸所で云つた、やがて、見廻しながら、橋の下へと推し進んで居た。橋の下のエンスの水を見返つて居るうちに、ネスヴィイツキイは、倏忽、不思議な音を聞いた、非常に速くだん〳〵近くなつて來る何物か……大きい何物か

の音であつた、と思ふうちに、川で大きな水音が爲た。

『彼樣な所まで來やアがらァ』と、傍に立つて居た兵卒が、音の方を見返つて、荒々しく云つた。

『奴はわれ〳〵に今少許速く行けと催促してやがるんだぜ』と、今一人が不安さうに云つた。群集は又動きだした。ネスヴィイツキイは、砲彈だと解つた。

『おい、哥薩克兵、馬をよこせ』と、云つた。『さァ退いた。退いた。路を開けろ』

非常な努力で、彼は馬に乘り得た。始終怒號りながら、前へと動いた。兵卒たちは、彼を通す爲めに一所に壓し塊まつたが、直ぐ又、彼の脚を壓し潰ぶしさうに彼の周圍に推して來た、彼に一番近かつた連中が惡いのでは無かつた、彼等は、後から尙一層烈しく前へ壓されて居たからだ。

『ネスヴィイツキイ。ネスヴィイツキイ。おゝい、舊友』と、その途端に、後から叫ぶ皺嗄た聲を聞いた。

ネスヴィイツキイは、振り返つた、と、十五步程離れた所に、動いて居る兵卒の生きた團塊に掛け隔てられて、略帽を頭の後へ載せ、袰外套を勢好く肩へ羽織つたヴァアスカ・デニィソフの黑い髮のクシャ〳〵になつた赤い顏を見た。

『路を開けるやうに云つて呉れ、畜生奴等』と、太く激昂して居るらしかつたデニィソフは怒號つた。彼は、ピカ〳〵する、石炭のやうに黑い眼を、血走つた白眼が見えるまで轉がして、顏と同なじに赤い裸の手に持つて居た劍を鞘のまゝで振つた。

『やア、ヴァアスカ』と、ネスヴィイツキイは、嬉しさうに答へた。『君何う爲るんだい？』

『隊が進め無いんだい』と、意地惡るさうに白い齒を見せ、奇麗な靑の純種の『ベヅウイン』に拍車を當てながら、怒號つた、馬は、銃劍が打當る度毎に耳をピク〳〵させ、鼻嵐を吹き、轡から泡を飛ばし、橋板

を調子の好い音で踏んで、若し乘者が許るせば、直ぐに欄干を跳び越して了まひさうな勢であつた。

『この次ぎは何だ？。羊だ。全然羊だ。後へ……退け……やい、待て、輜重車なんざァ河へ叩つ込め。切るぞ』と、怒號つて、眞個に劍を拔いて、振り廻しだした。

兵卒たちは、怖れた顏を爲て、一緒に塊つた、で、デニイソフはネスヴィイツキイに合した。

『今日は何うして飲で居無いんだい？』と、彼が傍へ來た時に、ネスヴィイツキイが云つた。

『飲む間を吳れやがら無いんだ』と、ヴァアスカ・デニイソフは答へた。『終日聯隊は方々引摺り廻されたんだ。戰鬪は結構だ、けれども、これぢやァ、何のことだか解らん』

『今日は甚く奇麗ぢや無いか』と、デニイソフの新しい裘外套と、毛皮の鞍褥を見てネスヴィイツキイが云つた。

デニイソフは微笑んで、佩囊から香氣のプン〳〵する手巾を出した、そして、それを、ネスヴィイツキイの鼻へさし付けた。

『確に、實戰に加はるんだ。顏を剃つて、齒を掃除してよ、身體に香水を注けたんだい』

哥薩克兵の隨いたネスヴィイツキイの堂々たる姿と、劍を振つて、絕望的に怒號つて居たデニイソフの決心の表はれた顏が、非常な効果を得て、歩兵を止めて、二人が橋の彼方側へ行くことが能きた。ネスヴィイツキイは橋の袂で、命令を傳へるべき先方の大佐に逢つて、自分の任務を果たしてから、乘り戻した。

路を開けてから、デニイソフは、橋の袂で止まつた。仲間へ加はらうと斷いて足踏みする馬を無造作に扣へて、自分の方へと動いて來る隊を見た。橋の上での多くの蹄の音は、五六匹の馬が駈けて居るかのやうに響いた、そして、先頭に將校たちの立つた隊は、四列で橋を越えて來て、彼方側へ出だした。

止められた歩兵は、橋の踏み荒した泥濘に集まつて、軍隊の兵種の違つた者同士が遭會ふ時には常例感じる冷淡と皮肉の彼の一種の感情で、整々として通つて行く奇麗な氣の利いた驃騎兵を見て居た。

『奇麗な奴等だなァ。ボヅノヴィインスコエにばかり居りやァ宜いによ』

『餘まり役に立ち過ぎらァ。觀兵式に要るばかりの者ぢやァ無えか』と、今一人が云つた。

『やい、歩兵、泥を蹴あげるなよ』と、自分の馬が躍つて、一人の歩兵へ泥を撥ねかした驃騎兵が冷嘲した。

『背囊を背負つて長い行軍を二度爲つて見ろい。貴樣の金ピカも大分見すぼらしくならァ』と、袖で顏の泥を拭き取りながら、歩兵が云つた、『其所に棲まつてると、貴樣は人間といふより鳥のやうだぞ』

『何うだい、ジイキン、馬に乘せて貰らひ度かァ無えか、姿態の好い騎兵に爲るだらうによ』と、背囊の重量で身體の屈んで居る痩せた兵卒に向いて、伍長が冷嘲した。

『股間へ掃木を入ろよ、それがお前にやァ適應の馬にならァ』と、驃騎兵が答へた。

（八）

歩兵の殘餘は、橋の入口で、漏斗形に集まつて推し合ひ、そして、大急ぎで橋を越え進んだ。到頭、輜重車も殘らず越した、混雜が大分靜まつた、そして、最後の大隊が橋へと歩んで居た。

デニイソフの驃騎兵ばかりが、橋の彼方側で、敵に面して殘つて居た。反對の山からは遠方に見ることの能きた敵は、未だ、下の橋からも、川が流れて居るこの谷間からも、見え無かつた、半哩以上は地平線が高地で限られて居たのだ。

前面には、我軍の斥候が哥薩克兵の幾人かで點打たれた野原が横たはつて居た。

倏忽、向ふの高地を登ぼつて居る路の上に、青いチユウニックを着た軍隊が砲を引いて、現て來た。

これは佛蘭西人であつた。

哥薩克兵の偵察隊は駈足で丘を下りた。デニイソフの隊の將校や兵卒は、他の事を話し合ひ、他の方向を見やうと骨折つたけれども、誰も彼も、始終、丘の中腹に居るものに就ての外何物も考へられ無かつた、そして、天際に現はれて來た敵軍に違ひ無いと認めた黑い點々の方を始終ジロ〳〵見て居た。

天氣は午後又晴れた、太陽はダニユウブとそれを繞つた黑い山々を照してパツと輝いた。空は靜であつた、丘の腹から、時々、喇叭の音や、敵の叫聲が漂ひ聞えた。騎兵の一隊と敵との間には、唯だ二三人の斥候が居るばかりであつた。徑約六百碼の空な野原が二つの敵對軍を隔てゝ居た。敵は射擊を止めた、で、それが、二つの敵對軍の間の境界線であつたその近寄れ無い攻擊し難い土地の酷しい悽愴さを、一層強く感じ爲せた。

『死者から生者を別つ線を示す彼の線を一歩越えたら、知られざる苦惱と死があるんだ。で、何が其所にあるのか。誰が其所に居るのか。日にきら〳〵して居る彼の野原、彼の樹、彼の屋根の彼方の其所に何があるのか？。誰も知ら無い、誰もその境を知り度いと思ひながら、その線を越えるのを恐れる、恐れながら、それを越え度いと思ふ、そして、誰も、晩かれ早かれ、それを越えて、丁度誰もが死の彼方の側に在るものを見出すことを避け難いやうに、線の彼方側に何があるか見出さ無ければなるまい。けれども、自分は健全で、强く、快活で、いら〳〵と昂慣して居て、そして、同じやうにいら〳〵と昂奮した强い人々に取り圍かれて居る』

それが、誰もが、敵前で、考へ無いにしても、感じることだ、そして、さういふ感が、誰もが、その刹那に於て起る有らゆる物に對して持つ印象に、特種の光輝と、快適な鋭敏を與へるものなのだ。

敵に占領された高地に、砲の烟が立ち登つた、そして、砲彈が一つ驃騎兵の中隊の頭上を迂鳴つて飛んだ。一團になつて立つて居た將校は八方へ散つた。驃騎兵たちは、徐に馬を列に戻しだした。中隊全體が闃然として了まつた。衆皆前面の敵と、隊長を見て、號令を待ち設けた。今一つ砲彈が傍を飛んだ、そして、直ぐ三番目のが來た。敵が驃騎兵を砲擊して居ることは疑ひ無かつた、が、規則正しく、疾く迂鳴つて來る砲彈は、何れも驃騎兵の頭の上を飛び越して、後の地面を擊つた。

驃騎兵は誰も見返ら無かつた、が、飛ぶ砲彈の音が爲る度毎に、號令でも掛かつたかのやうに、中隊全體が、顏は種々違つて居ながら、悉皆全然同なじやうな表情になつて、彈が傍を迂鳴つて行く間、鐙を踏張つて立ちあがつて、呼吸を塞めて居て、やがて、又元へ戻つた。兵卒は、頭を振り向けずに、戰友たちの受ける感を知り度くつて、眼の隅から互にジロ〳〵見合つた。デニイソフから喇叭卒に至るまで、誰の顏も、唇と顎の附近に、心內の苦悶と、神經的の焦燥と、昂慣との、何れも同なじ筋を表はして居た。軍曹は顏を擊めて、罰で衆皆を威嚇すかのやうに兵卒たちを上から下へと見た。少尉ミロオノフは、砲彈の度毎に頸を縮めた。左翼ではロストオフが、白嘴鴉——脚は惡かつたが、奇麗な馬であつた——に跨がつて、必然拔群に爲つて見せると自信して多數の參觀人の有る試驗場へ呼ばれて出た小學生のやうな嬉しさうな態樣で居た。彼は、自分が砲火の下に居て何れ程平氣だか衆皆見て吳れとでも云ふかのやうに誰もを落ち着た晴々した顏で見た。が、その顏にも、我知らず、彼に取つては今迄に無い何か强い感が起つて居ることを示めす口の周圍のその筋が何時の間にか出て來て居た。

『其所でヒヨイ〳〵點頭をして居るのは誰だ？。少尉ミロオノフだな。不可ぞ。俺を見ろ』、一所に靜然としては居られ無くつて、中隊の前を彼方此方駈け廻つて居たデニイソフが斯う怒號つた。

ヴァアスカ・デニイソフの、獅子鼻の、黑い、毛深い顏、小さい、打滅したやうな形、拔劍の柄を握つて居る筋張つた短かい指のある手――彼の姿全體が、何時もと、殊に壘の二本も飲んだ晩と、寸毫も違は無かつた。唯だ顏が平生よりは少し多く赤かつたばかりであつた、で、烏が水を飲む時のやうに、毛のクシヤ〳〵になつた頭を後へヒヨイ〳〵振り、小さい脚では無慘に好い馬のベヅウインに拍車を當てゝ、鞍から後へ落ちさうに見える程で、中隊の他の翼へと驅けて行つて、短銃を調て置けと兵卒に皺嗄聲で叫んだ。それからキイルステンの所へ乘り寄つた。肥つた確乎した軍馬に乘つた參謀の大尉は、デニイソフの方へと、並足で乘つた。長い頰鬚のあるその參謀の大尉の顏は、何時もの通り落着て居た、が、眼が平常よりは多く光つて見えた。

『おい』と、彼はデニイソフに云つて『戰鬪には爲らんな。再退却だぜ』

『何を爲ろといふんだか寸毫も解からん』と、デニイソフが唸つた。『やア、ロストオフ』と、ロストオフの晴れ〴〵した顏を見付けて、少尉に云つた。『おい、君は長く待つにやア及ば無かつたらう』。で、少尉の態樣が確に氣に適つたらしく、奬勵するやうに微笑んだ。ロストオフは非常に得意であつた。途端に、聯隊長が、橋の上に現はれた。デニイソフはそれへと駈け付けた。

『閣下、突貫をお許しください。奴等を一擧してやつ付けますから』

『突貫、ふん、成る程』と、蒼蠅い蠅でも來たやうに顏を顰めて、退屈し切たやうな聲で、聯隊長は云つた。『何の爲めに此所に止まつとるかい？。兩翼が退却しとるぢや無いか。中隊を後へ卒けよ』

中隊は橋を渡り戻つて、一人の損害も無く敵の砲の彈着外に出た。その後から、今一つの中隊が來、それから、一番終末に哥薩克隊が渡つて、川の彼方側を全然と開け渡した。

パアヴログラアド聯隊の二中隊は、橋を越すと、相續いて丘を上へと乘つた、聯隊長のカルル・ボグダアニイチ・シュウベルトは、デニイソフの中隊に加はつて、ロストオフから餘まり離れて居無い所を並足で乘つて居たが、二人が、テリヤアニンの事件以來、顏を合せたのは此れが最初なのに、ロストオフには眼も遣ら無かつた。

ロストオフは、自分が今はその人に對して濟ま無いことを爲たと認めて居るその先方の人の權力の下にあつて戰線に居るのだと感じて、聯隊長の運動家らしい背部、麻色の毛の頭、赤い頸から、一度も眼を離さ無かつた。ロストオフは、暫時、ボグダアニイチは唯だ故意とロストオフが眼に入らぬやうに裝つて居て、その全目的がロストオフの勇氣を試すのに在るのだといふやうな氣が爲た、で、ロストオフは、ツント姿勢を正して、勢好く四邊を見廻した。が、又、ボグダアニイチは自分自身の勇氣を見せる爲めにロストオフの直ぐ傍を乘つて居るやうにも想像された。そのうちに、不圖、彼の敵は、彼――ロストオフ――を罰する爲めに今態々初めから駄目と知れて居る突擊に中隊を遣つて居るのだといふ氣も爲た。そのうちに、今度は、突貫の後で、彼は、負傷して倒れて居るボグダアニイチの所へ行つて、寬大に、協和を爲る爲めに手を指し出すやうに爲るだらうといふやうな夢を胸に描いたのであつた。

聯隊を離れてから未だ左樣なには經つて居無いので、パアヴログラアド驃騎兵には善く知られて居たジエルコフの肩の怒つた姿が、聯隊長へと乘り付けた。ジエルコフは、總司令官附から追ひ出されてからも、聯隊に長くは居無かつた、彼は、自分は、司令部附で何にも爲ずに居てもつと良い給料が得られるのに、戰線

の苦しい勤務を爲るほどの痴者では無いと云つて居るうちに、何うにか斯うにか爲て、公爵バグラアチオンの幕下の傳令を命ぜられることに爲つたのであつた。彼は、後衞の司令官からの命令を帶びて、前の聯隊長の所へと乘り付けた。

『聯隊長』と、太く陰氣な眞面目さで、ロストオフの敵に聲を掛け、自分の朋輩を見返つて『元へ戻つて、橋を燒けといふ命令です』

『命令？、誰が？』と、聯隊長は、凄い顏で尋いた。

『えゝ、私は知りません、聯隊長、誰だか』と、旗士は心配さうに答へて、『唯だ公爵が私に、「行つて、聯隊長に、驃騎兵を急いで戻して、橋を燒くやうに爲ろと傳へて吳れ」と、云はれただけなんです』

ジエルコフの直ぐ後から、司令部附の將校が同なじ命令を持つて、聯隊長へと乘り付けた。その將校の後からは、又、ネスヴィイツキイの肥つた姿が、彼を乘せて駈けるのは大分苦しさうに見える哥薩克馬に乘つて來るのが見えた。

『えゝ、聯隊長』と、未だ聯隊長へと駈けて居ながら、彼は叫んで、『私は貴下に橋を燒けと云つたぢやアありませんか、誰かそれを聞き違へた、彼所ぢやア量早衆皆狂亂だ、何も彼も滅茶滅茶だ』

聯隊長は悠々と聯隊を止めた、そして、ネスヴィイツキイに振り向いた。

『君は燃料のことを我輩に云つたぢやア無いか』と、彼は云つた、『だが、それを燒くことは、一語も云は無かつたよ』

『えゝ、友達』と、ネスヴィイツキイは、止まつて、騎兵帽を脫つて、汗みづくに爲つて居た髮の上を肥つた手で撫でながら、云つて、『橋へ燃料を置たら、最早それを燒くことをいふ必要が何處にありますか』

『我輩は貴下の「友達」ぢや無い、參謀殿、貴下は橋へ火を點けろとは一度も云はんかつた。我輩は自分の任務を知つとる、命令を嚴重に守るのが我輩の習慣なんぢや。君は、橋を燒けと云ふ、けれども、誰が燒きに行くのぢやか少しも分らん』

『あゝ、何時も斯うなんだ』と、腕を振つて、ネスヴィイツキイが云つた。『何うして君は此所へ來たんだい？』と、ジエルコフに向いて云ひ足した。

『なに、同なじ命令さ。君はグショ濡れだね、身體中擦すつちまは無きやア』

『君は云つたね、參謀殿……』と、聯隊長は甚く癪に觸つた調子で、言語を續けた。

『聯隊長』と、司令部附の將校が口を入れて、『急が無ければ駄目です、敵は葡萄彈の砲を持つて來るでせうから』

聯隊長は、司令部附の將校と、肥つた參謀と、ジエルコフを、ツク〳〵見て、そして、顏を顰めた。

『橋は燒く』と、彼は、衆皆が自分を何れ程困らせやうとも、自分の職責は何處までも盡すのだといふ意味を見せ度いかのやうに、嚴肅な調子で云つた。

馬に全體の責があるのだとでも云ひさうに、長い逞ましい脚で、拍車を入れて、聯隊長は前へ出て、デニイソフの率ゐて居た——ロストオフの勤めて居る——第二中隊に橋へ戻れと命令した。

『左樣だ、いよ〳〵だ』と、ロストオフは思つて、『俺を試めさうとするんだ』。胸はドキ〳〵し、血が顏へサツと上ぼつた。「俺が臆病者か臆病者で無いか、今に、見て居ろ』

再、中隊の人々の陽氣な顏には殘らず、衆皆が砲火の下に居た時のと同なじやうな沈痛な線が現て來た。ロストオフは自分の敵の聯隊長を凝乎と見詰めて、その顏の面で自分の想像の確めを見出さうと骨折つた。

が、聯隊長はロストオフを一寸も見はし無かつた、そして、戰線に居た時と同なじに、嚴づかし氣な、恐い顏を爲て居た。號令が聞えた。

『確乎、確乎』と、周圍で幾人もの聲が云つた。

手綱を劍に縋らせ、拍車をヂヤカ〳〵云はせて、驃騎兵は、何を爲るのか自分等にも分からずに、馬を下りた。兵卒は十字を切つた。ロストオフは、最早聯隊長の方を見無かつた、その暇が無かつたのだ。彼は恐れた、仲間に置いて行かれるのを、銷沈て行く心で恐れたのだ。從卒に馬を渡した時に、手が震へた、そして、血がバサリと音を立てゝ心臟へ突つ掛けて來るやうに感じた。デニイソフは、後へ戻つて、何か叫んで、ロストオフの側を乘つて行つた。ロストオフは、自分の周圍には、拍車に邪魔されながら、劍をガチヤつかせて駈けて行く驃騎兵たちの外何にも見無かつた。

『擔架』と、後で、聲が叫んだ。ロストオフは、擔架が何故必要なのか考へ無かつた。彼は唯だ駈けて、誰もより先へ出やうと骨折つた。が、丁度橋の元で、足下を見なかつたので、滑る踏み荒した泥濘へ足を入れて、轉ろんで、四這になつた。他の者が追ひ越した。

『兩側を、大尉』と、先頭に乘つて大得意の嬉しさうな顏で、橋の傍で馬を控へた聯隊長が叫ぶのを彼は聞いた。

ロストオフは泥だらけの手を乘馬袴で拭いて、自分の敵の聯隊長の方を見返つた、で、自分は前へ進めば進むだけ善いのだといふ氣が爲たので、もつと先方へ駈け出さうと爲た。が、ボグダアニイチは、見ても居ず、又、それをロストオフとも氣が付か無かつたけれども、ロストオフに斯う怒號つた。

『橋の中央を行く奴があるか?。右側を。少尉、後へ』と、彼は腹立しさうに叫んで、そして、橋板の上へ向ふ見ずな平氣な態で馬上のまゝで進んで居たデニイソフに振り向いた。

『何故無益な危險を冒すんぢや?。下馬ろよ』と、聯隊長は云つた。

『えゝ。罪の無い者にやア中らん』と、鞍の上で振り向いて、デニイソフが云つた。

一方では、ネスヴィイツキイや、ジエルコフや、司令部附の將校は、敵の彈着距離外に一緒に立つて、橋の所に集つて居る、黃色い軍帽で、金筋入りの黑ずんだ緣の短上衣で、蒼色の乘馬袴を穿いた人々の小さい集團と、それから、河の彼方側で、遠方から近付て來る蒼色のチユウニックと、一目で砲と分かる幾匹もの馬を引いた一團とを見まもつて居た。

『彼等は橋を燒くだらうか、何うだらう?。何方が先に彼方へ行くだらう。彼等は彼所へ走り着いて、燒くだらうか、或ひは、佛蘭西人が葡萄彈を向けて彼等を殺して了まふだらうか』斯ういふのが、橋を見渡して居た軍隊の大きな集團の裡の誰もが、胸を冷して、自分々々に尋いて居た疑問であつた。パツと照らして居た夕陽の下で、人々は、橋と、驃騎兵と、彼方側から進んで來て居た銃劍と砲を備へた蒼色のチユウニックとを見詰めて居た。

『うゝん。驃騎兵はやられるなア』と、ネスヴィイツキイが云つた。『最早葡萄彈の彈着距離外では無いんだから』

『彼れほど多く兵を遣つたのが惡りいな』と、司令部附の將校は云つた。

『左樣、全くだ』と、ネスヴィイツキイが云つた。『大膽な兵を二人遣ればそれで澤山だつたんだ』

『いや、閣下』と、眞面目だか、左樣で無いか一寸分から無い例の無邪氣な云ひ方ではありながら、ジエ

ルコフは、驃騎兵へ眼を見据ゑて、口を挾れた。『いや、閣下。何うして、左樣いふ風に御覽なさるんです。二人だけ遣るのは宜しい、けれども、それでは、誰がヴラディミイル勳章と綬を呉れますね？。だが、彼樣爲つとけば、敵に何れほど殺つけられやうとも、中隊を代表して、綬が貰へるんですからなア。ボグダアニイチの伯父さん何うして其所に拔け目が有るもんですか』

『やア』と、司令部附の將校が云つた。『葡萄彈』

彼は、砲車から取り下されて、急いで動かされて居た佛蘭西軍の砲へと指ざした。

佛蘭西軍の側では、烟が一つ、砲を持つて居た集團から、登つた。一吹、第二、第三、殆ど同なじ刹那に出た、最初の一發の音が聞えたその全く同なじの瞬間に、第四の烟が出た、二つの唸鳴が相續いて來て、それから直ぐ三番目のが來た。

『あア、あア』と、ネスヴィイツキイは、何處か非常に痛い所でもあるかのやうに、司令部附の將校の手を强く握つて、呻吟いた。『あれ、一人斃れた、斃れた、斃れた、斃れた』

『二人、のやうだ』

『若し、我輩が皇帝なら、何うしたつて戰爭はやら無い』と、ネスヴィイツキイは、背部を向けて、云つた。

佛蘭西軍の砲は敏捷く裝め返された。蒼色のチュウニックの步兵の隊が橋の方へと駈けて居た、再、烟が幾つもいろ〳〵な間を置いて、出た、そして、葡萄彈が橋へグヮラ〳〵落ちて、破裂した。が、最早、ネスヴィイツキイは、橋の方は何う爲つて居たか見ることは能き無かつた。烟の濃い雲が其所から立ち登つた。驃騎兵が橋へ火を點け得たのだ、そして、佛蘭西人は、今、彼等を砲擊して居た、が、それは、彼等の行動

を妨げる爲めでは無く、砲を持ち出した以上は、何か砲擊し無ければならぬといふので、何か無しに唯だ射擊たのであつた。

佛蘭西人は、驃騎兵が馬の置いて在つた所まで引返すうちに、葡萄彈を三發射擊し得た。二つは照準が惡るかつたので、驃騎兵の頭上を飛んで了まつたが、最後のは、彼等の集團の眞中央に落ちて、三人擊ち倒した。

ロストオフは、ボグダアニイチに對する關係にばかり氣を取られて、何を爲て可いか分らずに、橋の上を步いて居た。劍で斬る敵手は居ず（彼は戰爭は斬るものだと何時も思つて居たのだ）、と云つて、橋を燒く助力には少しも爲り得無かつた、他の兵卒のやうに、藁の束を一つも持つて來無かつたからなのだ。彼は立つて、見廻して居た、と、不意に、胡桃を多量撒布たやうなバラ〳〵いふ音が橋の上で爲た、彼の直ぐ側に居た一人の驃騎兵が、唸り聲を出して、欄干に倒れた。ロストオフは他の連中と一緒にその傍へ駈け寄つた。再、誰かが、『擔架』と、叫んだ。四人がその驃騎兵を捉まへて、擔ぎ上げ始めた。

『うゝう。……捨てといて呉れ、何卒』と、負傷者が苦しさうに叫んだ、が、それでも、衆皆はそれを擔ぎ上げて、擔架に入れた。ニコラアイ・ロストオフはそれから振り向いて、何物かを探すかのやうに、遠方のダニュウブの水や、空や、太陽を見詰め始めた。如何に晴やかにその空が見えたらう、如何に蒼く、靜に、そして、深く見えたらう。如何に燦然にそして盛に夕陽が見えたらう、何といふ誘ふやうな燦煌でズツと遠くのダニュウブの水が見えたことであらう。で、尙一層晴やかなのは、ダニュウブの彼方に青く見えたズツト遠くの山々や尼寺や、神秘らしい谷間や、頂上に靄を持つた松樹林であつた……其所では、總ての物が平和であり、幸福であつたのだ。……『彼所へ行けさへ爲るのだつたら、最早何も他に望むことは何にも無

い、何にも無い』と、ロストオフは思つた。『俺一人で彼の日光の裡に居たら何樣に幸福だらう、それだのに、此所では、呻吟があり、苦痛があり、そして、此の不安、此の急忙……。此所では、衆皆が、幾度も〳〵何かを叫んで居る、衆皆が何處へか駈け戻つて居る、俺はこの人々と一緒に駈けて居る、此所にいよ〳〵「それ」があるのだ、「それ」卽ち死が、俺の上に、俺の周圍に、落ち掛らうと爲て居るのだ。……一刹那、倏忽、俺は決して二度と彼の日光、彼の水、彼の山溪を見無いだらう……』

その途端に太陽は雲の蔭へ入つた、もう幾つかの擔架が、ロストオフの行方に現はれた。死の恐怖、擔架の恐怖、太陽と活氣の無くなつたこと、これ等が悉皆混り集まつて、胸苦しい恐怖の一つの感覺を造り出した。

『善なる神よ、彼の空に居ます神よ、我を助け、宥るし、護らせ給へ』と、ロストオフは心の裡で囁いた。

驃騎兵たちは馬へ駈け戻つた、衆皆の聲が前より高くなり、落着て來た、擔架は見え無くなつた。

『おい、何うだ、彈藥の臭氣をいよ〳〵嗅いだらう』と、ヴァアスカ・デニイソフが、ロストオフの耳へ叫んだ。

『最早終了だ、けれども、俺は臆病者だ、左樣だ、俺は臆病者なんだ』と、ロストオフは思つた、そして、重い溜息を爲て、跛脚を引きだして居た白嘴鴉を、馬丁の手から取つて、乘り始めた。

『何だつたね彼物は——葡萄彈?』と、デニイソフに尋いた。

『左樣だ、先づ左樣いふ物なんだ』と、デニイソフは叫んだ、『奴等は實に巧く砲を使う。だが、下ら無いことだ。騎兵の突擊は壯快なんだ——犬どもを叩き斬るんだ、けれども、これは箆棒な標的を覘ふやうなも

のなんだからな』

で、デニイソフは、ロストオフから餘り遠く無く立つて居た聯隊長、ネスヴィイツキイ、ジエルコフ、それから、司令部附の將校の集團へと乘り去つた。

『でも、誰も、何とも思つちやア居無いと見える』と、ロストオフは一人で思つた。そして、實際誰も何とも思つては居無かつたのだ、誰でも、砲火の下に一度も立つたことの無かつた少尉が始めて經驗して居たその感情は善く知つて居たからなのだ。

『さア、これで談話の種が出來たといふものだ』と、ジエルコフが云つた、『何時の間にか僕が中尉に昇任されて居るだらうぜ、ねえ?』

『我輩が橋を燒いたことを公爵に申しあげて呉れ給へ』と、聯隊長は、嬉しさうな大得意な調子で、云つた。

『それで、損害を尋ねられましたら?』

『云ふに及ばん程ぢや』と、聯隊長は、大きい濁聲で云つた、『兵二人の負傷、それから一人は卽座に死了つたんぢや』と、瞭然に嬉しさうな態樣であつた。この獨逸人は、終末の方の語句を露西亞の口語で調子好く云ひ得た滿足の微笑を抑へることが能き無かつた。

（九）

ボナパルトに率ゐられた十萬の兵に追蹤され、住民から敵意を以て待たれ、同盟軍に對しては信賴の念絕え、軍需品の不足に苦しみ、事毎に豫期に違ふ境遇の下に行動せざるべからざる狀態で、クツウゾフに率ゐ

られた三萬五千の露西亞軍は、ダニュウブ沿岸の低地へと草忙しい退却を爲た。其所で、彼等は止まつて、敵に追及されたが、唯だ軍需品と砲を失はずに退却するに必要なだけの後衛の小戰鬪を爲たのみで、全軍的の戰鬪は避けたのであつた。

ラムバッハでも、アムステテンでも、メルクでも、戰つた、が、露西亞人の戰場で發揮した勇氣及び頑强は——敵にさへ感嘆された位でありながら——それ等の戰鬪の結果は、尙一層急激な退却を行はせるに過ぎ無かつた。

ウルムで捕虜になることを免がれて、ブラウナウでクツウゾフの軍に合した墺地利人は、今は露西亞軍から別かれた、で、クツウゾフは、自分の弱い憊れた軍のみで、孤立の狀態に殘されて了まつた。

維也納の防禦などは最早思ひも寄ら無かつた。クツウゾフが、維也納に滯在中、墺地利の軍事會議から示めされた、近代軍學の原理に從つた攻擊戰の精妙な計策とは打つて代つて、今クツウゾフに取つて殘つて居る唯だ一つの目的——殆ど望の無い目的——は、ウルムでのマックのやうには兵を失ふことを避け、そして、露西亞から行進して來る新鋭の軍隊に合することであつたのだ。

十月の二十八日、クツウゾフは、ダニュウブの左岸へ軍を渡らせ、其所で、自分の軍と敵軍との間にダニュウブの大河を隔に置いて、始めて軍を休止させた。三十日には、ダニュウブの左岸に居たモルチエー枝軍を攻擊して、それを破つた。この戰鬪で、始めて戰利品が獲られた——軍旗一流、砲數門、それに、敵の將官二人を捕虜にした。二週間の退却の後、茲に始めて、露西亞軍は休止し、且、戰鬪の後で、戰場を退か無かつたのみで無く、尙その上に、其所から佛蘭西軍を追ひ退けた。

軍は被服無く、憊れて居たけれども、負傷、戰死、行方不明等で軍力の三分の一を失つて居たけれども、

病兵と負傷者を、敵の慈悲に訴へるクツウゾフの手紙を附けて、ダニュウブの彼方側に殘して置いたのだけれども、クレムズの大きい病院や家が病兵と負傷者を收め切れ無かつたけれども——總てさういふことに拘はらず、クレムズの前での休止と、モルチエーに對する勝利は軍の士氣を大いに振はした。

全軍に亙り、且總司令部に於てさへも、露西亞からの軍隊が餘程近くまで來て居るとか、墺地利人が何處かで勝利を得たとか、ボナパルトが周章狼狽して退却したとか、いふやうな、根據こそ無けれ聞いて實に快よいさまざまな流說が盛んであつた。

公爵アンドレエーは、戰鬪中、墺地利の將軍シュミットに隨いて居たが、その將官はその時戰死した。アンドレエー自身も乘つて居た馬を傷けられ、自分の身體も、腕に銃彈の輕傷を受けた。總司令官からの特別の恩惠の徵象として、彼は、維世納が佛蘭西軍に脅かされて居つたので、今はブルンに移された墺地利の宮中へ捷報を齎す使者に遣られた。戰鬪の有つたその夜、太く昂奮しては居たが、憊れては居ず（公爵アンドレエーは體質は頑丈には見え無かつたが、極く强い者よりも夐に能く疲勞に堪へ得たのだ）、ドオッウロフの使で、クツウゾフの居たクレムズへ行つた。その同じ夜、ブルンへの特使として差遣されたのであつた。この任務は、その賞として勳章の得られるものである外に、昇任に對する重要な階程となるものなのだ。

闇では有たが、星の多い夜であつた、路は晝間の戰鬪の間降つて居た雪のなかに黑く見えた。戰鬪のさまざまな印象や、捷報が人々の心に起す効果に對する心嬉しい豫期や、總司令官だの戰友たちと別れた時の追懷などで胸を滿たされて、公爵アンドレエーは、長く待つて居てから、艱然待ち焦れて居た或る幸福の最初の割賦を手に入れた人のやうな感覺で、輕い驛遞馬車に搖られながら行つた。眼を閉ぶるや否や、銃や、砲の音が耳の裡で響き、そして、その響が車輪の音と勝利の感覺とに溶け混つた。

時には、露西亞軍が敗走して居て、自分は殺されたのだと夢みだした、が、急に眼が覺めて、それは悉皆無いことで、反つて佛蘭西軍の方が敗走せしめられたのだと正氣に歸つて、又新たに嬉しさを覺へた。やがて、今度は、勝利の詳しい筋道や、戰場で自分が勇氣のある沈着た態度であつたことを憶ひ出した、で、それで安心して、ウツラ〳〵眠りだした……。

闇の星の多い夜は、麗かな朝に次がれた。雪は日に溶けて行つた、馬は速く駈けた、そして、今まで見たことの無い、いろ〳〵な姿の森や、野や、樹が、路の兩側を飛んで行つた。

とある驛所で、露西亞軍の負傷者の護送隊に追ひ付いた。隊を率ゐて居た將校は眞先頭の馬車にダラリと乘つて、一人の兵卒を口汚なく大聲で叱り付けて居た。

長い獨逸の驛遞馬車の一つ毎に、六七人の、顏の蒼い、繃帶を爲た、汚ない負傷兵が、石を敷た路を搖られて居た。そのうちの或る者は話を爲て居た（公爵アンドレエーは露西亞語の音を聞いた）、他の者は麵麭を喰つて居た、最も重傷の連中は、病氣の小兒のやうな懶い興味で、傍を駈けて通る驛遞馬車を、默まつて凝乎と見詰めた。

公爵アンドレエーは、馭者に止れと言ひ付け、そして、一人の兵卒に何處で負傷した連中なのか尋いた。

『一昨日、ダニュウブ附近で』と、その兵卒が答へた。

公爵アンドレエーは錢入を出して、兵卒に金貨を三枚遣つた。『早く快くなれよ、衆皆』と、兵卒どもに云つて

『衆皆にです』と、傍へ來た將校に向いて、云ひ足した。

『これから前途に盡くすべきことがウンとあるんだからなァ』

『何んな情報です』と、如何にも談話を爲たさうな態樣で、將校が尋いた。

『吉報です。前へ』と、馭者に叫んで、駈け出した。

公爵アンドレエーがブルンへ乘り付けたのは最早全く暗くなつてからで、彼は忽にして、高い家や、明るい店や、家々の明るい窓や、街燈や、敷石の上を音高く通つて行く奇麗な馬車といふ風な、野營の軍士には非常に快よい、生命に滿た大きい市の總てさういふ雰圍氣の裡に入つて了まつた。

公爵アンドレエーは、急激に馬車を驅つたり、夜寢なかつたりしたに拘はらず、皇宮へ乘り付けた時には、前の晩よりは反つて心が緊張つて居た。唯だ彼の眼がイラ〳〵した光輝を帶び彼の考想が非常な迅速と明瞭で、それからそれへと續いたのであつた。彼は、再び、戰鬪の總ての詳しいことを、雜然としてゞは無く、皇帝フランツに奏上しやうと思ふやうに確然と纏まつた形で、現然と眼の前に畫いた。

彼は、問はれるであらうと思ふその時々の問と、それに對して爲べき自分の返答とを、現然と想像した。彼は、直ぐ皇帝の前へ導かれるのだと想像した。が、皇宮の正面の入口で、一人の官吏が駈け出て彼を迎へた、そして、特使だと聞いて、今一つの入口へ彼を導いた。

『廊下から右へお曲りになりますと、閣下、當番の副官が居りますから』と、官吏は彼に云つた。『それが、陸軍卿へ御案內致します』

當番の副官は、公爵アンドレエーを迎かへて、待つて呉れと云つて、陸軍卿の許へと入つて行つた。五分經つて、副官は歸て來た、そして、著るしい叮嚀な態で、點頭を爲、自分より先へ公爵アンドレエーを立たせて、廊下を横ぎつて、陸軍卿の官房へと、案內した。副官は、その念の入つた禮儀正しさで、露西亞の總司令部附の將校の方から心安すく擧動はうと思つても寄り付きやうの無いやうに爲て置く積りらしく思はれた。公爵アンドレエーの愉快な感は陸軍卿の部室の戶に近づくまゝに、著るしく銷沈つて了まつた。彼は輕

侮されたやうに感じた、そして、その輕侮されたといふ感が乍ち――彼の氣の付かぬ間に――全く何の根據も無い先方に對する侮蔑の感に變つた。と同時に、彼の精到な頭腦は、副官と陸軍卿の雙方に對して侮蔑を感ずる權が自分にあるといふ論據を自分に對して供へたのであつた。

『奴等は、自身未だ一度も彈藥の臭氣を嗅いだことが無いので、勝利を得るのはホンの一寸とした容易いことだと思つて居るに違ひ無い』と、彼は思つた。

彼の眼瞼は侮蔑したやうに下がり、彼はイヤに落着き拂つて、陸軍卿の部室へと歩み込んだ。この感は、彼が、陸軍卿が大きい卓子の所に坐わつて居て、彼の入つて行つたのを、最初の二分ほどの間は、全然見返りも爲無かつたのを見た時に、尙一層强められた。陸軍卿は、額の兩側に半白の捲髮のある禿頭を、二本の蠟燭の間に低く下げて居た、彼は、何か書類を讀みながら、それに鉛筆で印を付けて居た、戸の開いたのと、足音の爲たのに對しては、眼を擧げずに終末まで讀み續けた。

『これを持つて行つて、彼に遣つて呉れ』と、陸軍卿は、露西亞の總司令部附の將校などは眼に入ら無い態樣で、書類を副官に渡しながら云つた。

公爵アンドレエーは、陸軍卿が、彼の注意を求める問題のうちでクツウゾフの軍の行動を一番輕いことだと思つて居るのか、で無くも、露西亞の總司令部附の將校にさういふ心持なんだと見せ付けやうと爲て居るのか、その孰れかなのだと感じた。『けれども、俺には、其樣なことは何うでも一向構は無いことなんだ』と、公爵アンドレエーは思つた。

陸軍卿は、他の殘りの書類を取り纏め、緣を揃へて、そして、頭を擧げた。怜悧さうな、特徵のある顏であつた。が、公爵アンドレエーに振り向いた途端に、陸軍卿の顏の一瓣ある斷乎した表情が、平常やるらし

い故意氣な態で變つた。その顏には、順々に種々な請願者に應對する人の間の拔けた――僞善的な、そしてそれを隱くさうと爲て居無い――微笑が殘つた。

『將軍――元帥（フイールド・マアシヤル）クツウゾフから？』と、彼は尋ねた。『吉報でせうな？。モルチエーとの交戰があつたですかな？　勝利ですかい？。最早大分待ち兼ねて居る時分です』

彼は、自分に宛てた急書を取つて、悲しさうな表情で讀みだした。

『やア。これは實に、これは實に。シュミットが』と、彼は獨逸語で云つた。『何たる不幸か。何たる不幸か』。急書に一渡り急いで眼を通し、それを卓子へ置いて、何か心積りを爲て居る態樣で、公爵アンドレエーをジロリ〳〵見た。

『やア、實に何たる不幸か。では、戰鬪は敵軍の全敗に終つたといふのですね？』。（『けれども、モルチエーは捕虜になら無かつた』と、彼は思ひ廻した）。『吉報を持つて來た貴下には感謝する、シュミットの死は、この勝利に對して、價の高い犧牲ではあるけれども。陛下は多分謁見を仰せ付けられるでせう、けれども、今日では無い。いや、有り難う、嘸ぞお疲れであらう、十分休息なさい。明日、閲兵の後の朝賀にお出なさい。いや、私からお知せ爲やう』

談話中は見え無くなつて居た間の拔けた微笑が、陸軍卿の顏に再現て來た。

○『では、又、實に有り難う。陛下は必らず謁見を仰せ付けられるでせう』と、彼は、繰り返し、そして、頭を下げた。

公爵アンドレエーが皇宮を出た時に、彼は、この勝利から彼が得た有らゆる興味も幸福も今は陸軍卿と禮儀正しい副官の無頓着な手に、自分で、渡して了まつたのだと感じた。彼の考想の全體の調子が倏忽にして

ガラリと變はつた。戰鬪は、彼の心の裡で、隔たつた極く往時の記憶と爲つて描かれるやうに爲つた。

（十）

公爵アンドレエーは、ブルンで、知り合の外交官ビリイビンの所に落ち着いた。

『やア、公爵、貴下にお目に掛かれたのは誰に逢つたよりも嬉しいんです』と、公爵アンドレエーを出て來て迎へて、ビリイビンが云つた。『フランツ、公爵のお荷物を俺の寢室に持つて行つとけ』と、彼は、ボルコオンスキイを案内して來た自分の從僕に云つた。『何、捷報の使者ですつて？。いや、實に結構。僕は、病氣で始終引籠つて居るんですからなア』

身體を洗ひ、着換へてから、公爵アンドレエーは、外交官の贅澤な書齋へ來て、設けられた食事に坐つた。ビリイビンは、暖爐の所で默まつて坐つて居た。

この行旅ばかりで無く、軍隊の行軍に從がつた始終、清潔の有らゆる便利、人生の華美なことには一切觸れずに來たのだから、公爵アンドレエーは、自分が小兒の時分から慣れて居た斯ういふ贅澤な種々な物の裡に入ると、安靜の快よい感覺を感じた。その上に、墺地利の大官に逢つた後なので、――談話を爲るのに佛蘭西語を使つて、露西亞語は用ひ無かつたけれども――彼は右に左、一般の露西亞人が感ずる（彼はその時殊に強く感じて居た）墺地利人に對する厭惡の心持を矢張持つて居るだらうと想像せられる露西亞人と口をきくのが嬉しかつた。

ビリイビンは交際社會に於ては公爵アンドレエーと同じ組の、獨身の、三十五歳の男であつた。二人は彼得堡で知人に爲つたのだが、公爵アンドレエーが一番最後にクツウゾフに隨いて維也納に居た間に、尙一層

親しく爲つたのだ。公爵アンドレエーが軍隊の方で立身する望が十分であつた若者であつたのと丁度同じやうに、ビリイビンの方は、外交官として尙一層前途多望の男であつた。彼は未だ若い男であつたが、十六歳から勤めて居たのだから、外交官としては若いとは云はれ無かつた。巴里にも居た、コペンハアゲンにも居た、で、今は維也納でなか〳〵大切な位地に居るのであつた。外務卿も、わが大使も、彼を知り、彼を大切がつて居た。彼は、外交官のなかには往々ある、消極的な才幹を持つて居るばかりで、唯だ或る事を爲ることを避けさへすれば可いといふのみで、極く善い外交官の資格は佛蘭西語が使へればそれで可いのだと心得て居るやうな男では無かつた。彼は、仕事を好み、仕事を解するといふさういふ外交官の一人であつた、で、本來は怠惰漢であつたに拘はらず、彼は、度々書物卓子で夜を明した。彼は、自分の仕事の目的が何であらうとも、少しも變らず何時も善く働いた。彼は、『何故か』といふ疑問には興味を持た無いで、『何う爲る』といふ方に興味を持つて居た。外交官としての本來の仕事は彼に取つては何うでも可かつた、けれども、回章を作るとか、覺書を拵へるとか、巧みに、簡潔に、華麗に報告を書くとかいふのが、彼の非常に好いた仕事であつた。斯ういふ方の努力の外に、ビリイビンは、上流社會に容易に加はつて談話を爲る伎倆で更に又尊敬されたのであつた。

ビリイビンは、談話が上品に氣の利たものである限り、仕事を樂むと丁度同なじに談話を好んだ。交際場裡では、彼は、何時も何か奇拔なことを云ふ機會を覗つて居て、それが云へさうな場合で無くば、談話に加はら無かつた。ビリイビンの談話には、全般的興味のある獨得な、寸鐵のやうな、洗練の句が絶えず煌めくのであつた。左樣いふ警句は、ビリイビンの心の底の化合室で、何んな智慧の無い人でもそれを覺え、それからそれへと方々の客室へ持つて廻はれるやうな、持つて行き易い形に、故意するかのやうに、造りこなさ

れたのであつた。で、ビリイビンの名言は、維也納の方々の客室へ持ち廻られて、その後では、所謂る大事件なるものに影響を及ぼすのであつた。

彼の細い痩せた黄色い顔は、湯に入つた後の人の指の尖頭のやうに何時も奇麗に念入りに洗つてあつた幾筋もの深い皺が顔全體に滿ちて居た。その皺の動きが、彼の顔の表情の主な變化を成して居た。

乍ち、額が廣い摺折で皺が寄つて眉が擧るかと見れば、直ぐ、眉が垂れて、深い筋が頰部を皺に爲るのであつた。彼の深く窪んだ小さい眼は率直に機嫌好さゝうに物を見た。

『さア、君の方の勝利の話を爲て聞かし給へ』と、彼は云つた。

ボルコオンスキイは、極く謙遜な風で、一度も自分自身のことには言ひ及ばずに、戰鬪の話と、其後での陸軍卿の應對振りを話した。

『奴等は僕も僕の報告も、九柱戲の場所へ跳込んだ犬を扱ふやうに扱かつたぜ』と、彼は談話を結んだ。

ビリイビンは、莞爾と爲た、顔の皺は一つも無くなつた。

『尙且、君』と、彼は、自分の指の爪を少し引離して見詰め、左の眼の上の皮に皺を寄せて云つて、『露西亞の聖軍に對する僕の大いなる尊敬に拘らず、僕は、君の方の勝利はそれほど豪いものでは無かつたと認め無い譯にやア行かんね』

彼は、侮蔑した調子を與へやうと思つた言語ばかりを、露西亞語で云つたのみで、全體の話は佛蘭西語で話し續けた。

『何故かといふのかね。君等は、全軍を擧て、僅か一枝軍の不運なモルチエーを襲つて、而かも、モルチエーを取り逃し了まつたぢや無いか。何處が勝利なんだい』

『だが、實際の所』と、公爵アンドレエーは答へて、『われ〳〵は、少くとも、ウルムより少し良いとだけは、大言に爲らずに云へやうぢや無いか……』

『何故、一人、責めて元帥を一人捕虜に爲て呉れ無かつたんだい』

『何でも豫定通りには行か無いもので、觀兵式の時のやうに事が規則正しく運ぶもので無いからなんだ、前に云つた通りね、われ〳〵の豫定は、朝の七時に敵の後方から攻擊を開始する筈であつたんだが、夕方の五時になるまで其所へ達し無かつたんだ』

『けれども、何故朝の七時に爲ら無かつたんだい？　朝の七時に爲るべきものぢやア無いか』と、ビリイビンは微笑みながら、云つた、『朝の七時に爲るべきものぢやア無いか』

『では、何故、君等は、外交術で、ボナパルトにゼノアを打捨つて置く方が可いのだと信じさせるやうに爲得無かつたんだい？』と、公爵アンドレエーは、相手と同なじ調子で云つた。

『僕にやア解つて居るんだ』と、ビリイビンが口を入れて、『煖爐の傍の長椅子に坐つて居て、元帥を捕虜に爲ることだけ考へるのは何でも無いことぢやア無いかと君は思つて居るね。その通りだ、けれども、それでも何故一人捕虜にし無かつたんだ？。で、英武なる皇帝及び王フランツ陛下も、陸軍卿のやうに、君の方の勝利に對して甚く大喜びで居無くとも、君は不思議に思つては不可よ。いや、露西亞大使館の昨たる一書記官の僕でさへ、勝利の祝賀にフランツに一タアレル握らせて、奴が情婚の手を引いてブラアテル公園を歩けるやうに一日暇を遣る必要を感じ無いんだ……尤も此所にやア、ブラアテル公園は無いけれども……』。彼は、公爵アンドレエーの顔を凝乎と見た、そして、不意に、顰んだ額から皺を落して了まつた。

『さア、今度は「何故だ」と君に尋く僕の順番が廻つて來たぜ。君』と、ボルコオンスキイが云つた。『實

は僕にやァ何うしても解ら無いんだ、僕の僅な智慧の到底及ば無い何か外交上複雜つた事情が有るのかとも思ふんだが、兎に角僕にやァ解ら無いんだ。マックは全軍を失つたらう、大公フェルディナンドも、大公カアルも、全然生きて居るらしい態樣も見せず、それからそれと失策ばかり爲つて居るだらう、所で、クツウゾフばかりが到頭決定的な勝利を得て、佛蘭西軍は打勝がたいといふ先蹤を破つたんだ、それだのに、陸軍卿は詳報を聞かうといふ氣さへ無いんだ』

『それはその筈なんだ、君、解らんかね。露皇帝萬歳、露西亞萬歳、國敎萬歳。それは、悉皆甚だ結構だ。けれども、われ〳〵は、いや、墺地利朝廷のことをいふんだがね、君の方の勝利に何の關係があるだらうか？。けれども、君が、大公のカアルかフェルディナンド——大公でありさへすれば熟らでも構は無いやね——さういふ大公の捷報を持つて來たんだつたら、その勝利が唯だボナパルトの消防隊に對して得たものであつたにしても、それは又別な話で、それこそ祝砲がドン〳〵鳴り渡るだらう。所を、今度のやつは、宛然、わざ〳〵われ〳〵に見せびらかす爲めに得たやうな勝利なんだ。大公カアルは何にも爲ずに居る、大公フェルディナンドは非常な不面目に陷いつて居る、君等は、維也納を捨てゝ了まつた、「此方は大丈夫だ、君等の都府のことなんざァ知るもんか」と云は無いばかりに、維也納の防禦を捨てゝ了まつたんだ。われわれ衆皆が愛して居た一人の將軍シュミットは、銃彈の路に置て殺して了まつた、それで居ながら、君等の方の勝利をわれ〳〵に向かつて祝うといふんだぜ。……君が持つて來た捷報位凡そ世の中に癪に觸るものは無からうぢや無いか。が、未ださういふことを除けても、若し君等が眞個に華々しい大勝利を得たに爲た所で、大公カアルが勝利を得ることに爲つて居たとした所で、それが、事態の進程全體に何の影響を及ぼすだらうかね？。維也納が佛蘭西人に占領された今に爲つては、最早遲いんだ』

『占領された？維也納が占領された？』

『維也納が占領されたばかりで無く、ボナパルトはシェーンブルンに居るんだ、そして、伯爵——われわれの心安い伯爵ウルブナ——はボナパルトの命令を受けに行つて了まつた』

行旅疲勞や、その印象や、陸軍卿との會見などの後では、殊に又今食事を爲たばかりの所なので、公爵アンドレエは、今自分が聞いた言辭の全意義を捉へることの能き無いのを感じた。

『伯爵リヒテンフルスが、今朝此所へ來てね』と、ビリイビンが言辭を續けて、『維也納で有つた佛蘭西軍の閲兵のことを詳しく書いた手紙を見せて呉れたんだ。公爵ムラァ始めその他の連中……何うだね、君の方の勝利はさう大して喜ぶ程のものぢやァ無からう、これぢやァ、君もわれ〳〵の救主のやうに迎へられまいぢやァ無いか……』

『實際、僕は左樣なことは何うでも構はん、左樣なことは何うでも一向構はん』と、云つた公爵アンドレエは、クレムズの前の戰鬪の自分の報告などは、墺地利の國都の陷落といふやうな大事件に比べられては、實際何でも無い小さい事であつたことを解しだしたのだ。『何うして維也納が落とされたんだい。橋だの、名高い城壁だの、それから、公爵アウエルスペルヒは何うしたんだ？。公爵アウエルスペルヒは維也納を守つて居るといふ風說だつたが』

『公爵アウエルスペルヒは此方側——われ〳〵の側——に止まつて、われ〳〵を守つて呉れてるんだ、極く手緩く守つてるらしいんだが、守つて呉れてるにやァ相違無いんだ、けれども、維也納は河の彼方側なんだ。いや、橋は未だ取られはし無い、火藥の裝置が出來て、爆裂させる命令が出たといふんだから、多分取られはしまいと思ふんだ、若し、左樣で無かつたら、われ〳〵は最早とつくの昔にボヘミヤの山の間へ行つ

て居るだらうし、君や、君の方の軍は腹背に砲火を受けて二十五分位の間ウンと苦んで居たに違無いんだ』

『けれども、未だそれだけで、戰役が終つたことには爲ら無いだらうぢや無いか』と、公爵アンドレエーは云つた。

『けれども、僕はこれで終末だと信じてるね。此所の大頭連は悉皆さう信じてるんだ、誰も口にこそ出し得無いけれどもね。僕がこの戰役の最初に云つた通りなんだ。事態は、君等がヅウレンスタインの前面で發砲したつて落着し無い、彈藥でも、彈藥を發明した人を伴れて來たつても落着し無いと云つたらう』と、ビリイビンは、例の警句の一つを繰り返して、云つて、皺を額から消して、そして、止まつた。『唯だ一つの問題は、皇帝アレクサンドルと普魯西亞王との會見の結果が何うなるかといふことばかりなんだ。若し、普魯西亞が同盟に加はれば、同盟國は墺地利の手を餘儀無くするだらうから、戰爭は續くだらう。けれども、普魯西亞がさう來無いとすると、第二のカムポオ・フォルミイオの條約を結ぶ場所を極めるだけの話なんだ』

『けれども、實に異常な天才だ』と、公爵アンドレエーは、不意に、小さい拳を握り固め、卓子の上へドンと云はせて、叫んだ。『それに、何といふ好運な男なんだらう』

『ブウオナパルトかね』と、ビリイビンは尋くやうに云つて、額に皺を寄せて、警句の出る前觸を爲た。『ブウオナパルトかね』と、ウに甚く力を入れて、云つた。『だが、彼は最早シューンブルンから墺地利を意の儘に爲やうとして居るのであつて見れば、われ〳〵も、彼にウを除せて了まは無きやァならん。僕もその改名通りに從がつて、彼を唯だボナパルトとばかり呼ばうよ』

『いや、冗談は措いて』と、公爵アンドレエーは云つて、『君は實際、戰役が終はつたと信ずるかね』

『僕が考へてることを君に話さう。墺地利は笑柄にされちまつたんだ、墺地利は其樣なことは慣れちやァ

居無い。で、今に復讐するだらう。第一國內の地方が掠奪されたんだ（聖なる露西亞軍は諸所殘酷に掠奪したといふ話なんだ）、自國の軍隊は全滅し、都府は取られたんだ、そして、それが悉皆サルディニヤ王のお蔭なんだから、何うしても、馬鹿にされたと云ふより外無からうぢや無いか。それで、これは極く內々なんだが、僕の本能の知らせる所ではわれ〳〵は出し拔かれて居るやうな氣が爲るんだ、佛蘭西との談判、平和の計畫、秘密な平和條約が各別に結ばれたやうな氣が爲るんだ、僕の本能の敎へて呉れる所ではね』

『左樣なことがあるものかね』と、公爵アンドレエーは云つた。『それは餘りに卑劣だから』

『何れそのうちにやァ分る』と、ビリイビンは云つて、その問題の談話はそれで終末だといふ徵象に、再た額から皺を消えさして了まつた。

公爵アンドレエーが、自分に向つて準備されて居た部室へ行つて、羽毛褥の寢床の淸潔なリンネルの間に、暖めた好い香氣のする枕を爲て、身體を橫たへるといふと、自分がその報告を持つて來た戰鬪は、自分から遠い、眞個に遠いものゝやうな感が爲た。普魯西亞の同盟や、墺地利の裏切や、ボナパルトの新成功や、聖日の朝賀、閱兵、皇帝フランツの謁見などが、彼の注意を占領した。眼を閉ぐと、倏忽、耳が、砲擊や、銃聲や、車輪の軋りなどで、鳴りだして、それから、再、眼前に、山を遁け降りる步兵の長い列と、彈を打ち掛ける佛蘭西人を見、胸がドキ〳〵するのを感じ、自分がシュミットと一緒に列の先頭を駈けて居て、銃彈が周圍を勢好くシウ〳〵云つて飛ぶのを見、そして、小兒の時から以來は感じたことの無い生きて居ることの强い喜悅の感覺を覺えた。彼は目覺めた。

『左樣だ、彼は悉皆實際在つたことなんだ』……と、彼は、嬉しさうな小兒らしい笑顏で、獨り云つた。で、壯漢の深い睡眠に入つて了まつた。

（十一）

次の日、彼は遲く目を覺ました、過ぎ去つた印象を辿つて行くと、一番現然と憶ひ起せるのは皇帝フランツに謁見する筈だといふことであつた、彼は、陸軍卿や、儀式張つた副官や、ビリイビンや、それから、前の晩の談話を憶ひ出した。宮中へ出るのだといふので、最早長いこと着たことの無い大禮服を着て、勢好く、熱心に、奇麗になつて、吊腕帶を掛けて、ビリイビンの部室へ入つて行つた。外交團の四人の紳士が最早其所に來て居た。大使館の書記官であつた公爵イポリイト・クラアギンとは、ボルコオンスキイは、彼得堡で既に知り合つて居た、他の人々へはビリイビンが彼を紹介した。

ビリイビンの所に來て居た紳士たちは、粹な、金持の、勢の好い若い連中で、此所でも、維也納と同なじやうに、その首領のビリイビンが『われ〳〵の連中』と云つて居た一團を別に造つて居た。この一團は、殆んど全く外交官ばかりで成り立つて居て、確にそれ自身の利害を持つて居るらしかつた——それは、戰爭だの、政治とは懸け離れたもので——交際社會とか、或る女たちとの關係とか、勤務の儀式的な側などに限られた興味であつたのだ。彼等は、公爵アンドレエーを、自分等の仲間の一人と見做して（滅多に與へ無い待遇なのだ）、確に親しい待遇を爲た。禮儀からと並に打ち解る爲めの前提として、その兩方を兼ねて、彼等は公爵アンドレエーに軍隊や戰鬪に就て二言三言尋いた、そして、談話が順序の無い、罪の無い冗談や、世間談に何時の間にか再立ち戻つて了まつた。

『だが、一番面白かつたことはね』と、一人が同僚の遭會つた災難のことを談しながら、云つて、『外務卿が口を醋つぱくして、倫敦へ遣られるのは榮轉であるのだから、左樣思つて行かぬきやァ不可と言つて聞し

たことなんだ。奴のその時の態樣は一體何樣なだつたと思ふね』

『けれども、彼に取つて最も厭なことがこれから起つて來やうと爲て居るんです、諸君。僕はクラアギンのことを素破抜くがね——彼の男の不幸に附け込んで、旨いことを爲やうといふドン・ジュアンが此所に居るんです。實に豪い男なんで』

公爵イポリイトは、安樂椅子にグタリと掛けて、脚を自分の腕の上へ乘せて居た。彼は笑つた。

『その談話を爲て呉れ給へ』と、彼は云つた。

『やアい、ドン・ジュアン。やい、蛇』と、幾個もの聲が叫んだ。

『君は知ら無いだらうがね、ボルコオンスキイ』と、公爵アンドレエーに振り向いて、ビリイビンは云つて、『佛蘭西軍の（いや、もう少しで露西亞軍と云ふ所だつた）彼の兇暴も、貴婦人の間でこの男が擧ける功績に比らべたら、何でも無い位なんだぜ』

『女は……男の伴侶なんだ』と、公爵イポリイトが講釋して、そして、眼鏡越しに、自分の擧げた脚を見詰めた。

ビリイビンと、その連中が、イポリイトの顏を眞向に見ながら、哄と噴飯した。公爵アンドレエーは——自分でも承知して居た通り——自分の妻のことで嫉ましく思つて居たこのイポリイトが、この連中の好い弄物に爲つて居るのを見た。

『いや、クラアギンの面白い風を君のお慰みに見せませう』と、ビリイビンが竊然とボルコオンスキイに云つた。『政治上の意見を得意になつて述べ立てる時が、實に妙なんだ、その眞面目くさつた所を見て遣つて呉れ給へ』

ビリイビンは、イボリイトの傍へ坐つて、額を皺だらけに爲て、彼に向かつて政治の談話を始めた。

公爵アンドレエーや、他の連中は、二人の周圍に立つた。

『伯林の内閣は同盟の感情を云ひ表はすことが能き無い』と、イボリイトは勿體振つて、一座を順々に見廻しながら、云ひ始めて、『言ひ現はさずに……前の書面の通り……解つたらう……解つたらう……で、それ、皇帝陛下がわれ〳〵の同盟の主義を捨て給はずんば』

『待ち給へ、未だ終了は無いんだ』と、公爵アンドレエーの腕を捉まへた。『干渉は無干渉より強いと僕は想像する。で……』。彼は止まつた。『十一月二十八日のわれ〳〵の急書は除外例とは考ふるを得ず。總て斯ういふ風に終るんだ』

で、彼は、最早それで終了だといふ徴象に、ボルコオンスキイの腕を放した。

『デモステネス、汝の黄金の口に隱されたる礫に依つて汝を認める』と、云つたビリイビンの厚い髪の房は、大喜びで額に皺を動すに伴れて、頭の上で前の方へと動いた。

誰も笑つた。イボリイトが一番聲高く笑つた。彼は明かに弱つて居た、苦しさうに息を爲たが、野蠻な笑ひ方で噴飯すのを堪らへて居られ無かつた、その笑は彼の平常の無感覺らしい顏をいろ〳〵に痙攣せた。

『それで、諸君』と、ビリイビンは云つて、『ボルコオンスキイは、此のブルンでは僕の珍客なんだ、で、僕の能きる限り、此所の生活で面白いことを見せ度いと思ふんだ。これが維也納なら、其樣なことは何でも無く能きることなんだが、この獸なモルダヴィヤの穴窪ぢやア、それがなか〳〵容易で無いんだ、それで、諸君の手が借り度いんだ。われ〳〵は彼にブルン相應の接待を爲無きやアならんのだ。君等は演劇の方を引受けて呉れ給へ、僕は交際社會の方を受け持つ、イボリイト、君は勿論貴婦人たちの方を引受けて呉れ給

へ』

『アメリイを見せるべきだね、彼女は實に素的なんだから』と、『連中』の一人が、自分の指の尖頭で接吻しながら、云つた。

『一擧にして』と、ビリイビンは云つて、『われ〳〵はこの獰惡な男をもつと人情の深い方面へ導かぬ無きやアなら無いんだ』

『諸君のご好意に甘へる機會が殘念ながら無かりさうなんです、今も最早これから出掛け無きやアならんのですからね』と、懷時計を見て、ボルコオンスキイが云つた。

『何處へ？』

『皇帝の前へ』

『おゝ。おゝ。おゝ』

『では、後刻、ボルコオンスキイ。後刻、公爵。食事に早くおいでなさい』と、聲々が云つた。『屹度、お待ち申して居りますから』

『皇帝にお話しする場合には、軍隊の規律の正しいことや、軍需品の供給や、進軍の方向などをウンと褒めあげ給へ』と、廣室へボルコオンスキイを送つて出ながら、ビリイビンが云つた。

『僕もそれを褒め度いんだがね、僕の觀た所ぢやア、さうは行かんよ』と、微笑みながら、ボルコオンスキイが答へた。

『では、能きるだけ話し給へ、右に左。皇帝は謁見が好なんだ、けれども、自分からは話すことを好まれ無いんだ、それに、話すことも能き無いんだ、そりやア行つて見れば直ぐ解るんだがね』

（十二）

朝賀の時には、皇帝フランツは、唯だ公爵アンドレエーの顏を凝乎と見て、墺利地の將校の間で彼に充てられた場所に立つて居た彼に向いてその長い顏を頷かせたばかりであつた。が、朝賀が濟むと、前の晩の陸軍卿附の副官が、儀式正しく、謁見を許るさうといふ皇帝の意思をボルコオンスキイに傳へた。皇帝フランツは、部室の中央に立つて居て、公爵アンドレエーに應對した。公爵アンドレエーは、談話を始める前に、皇帝がモジ〳〵して、何を云つて宜いか分ら無いと云つたやうな態樣で、顏を赤めたのを、甚く異樣に思つた。

『何時戰鬪が始まつたですか？』と、皇帝は急いで尋いた。

公爵アンドレエーは答へた。

その問に續いて、『クツウゾフは健全か』とか、『クツウゾフがクレムズを出てから最早幾日程に爲る』とかいふやうな一寸〳〵した問が幾つも出た。

皇帝は、或る極つた數の問を出すだけの目的であつたかのやうに、物を云つた。さういふ問に對する返答は、皇帝の方に取つては、何樣なであつても一向構は無いのだといふ態が、如何にも現然と見えて居た。

『何時に戰鬪が始まりましたか』と、皇帝は尋いた。

『何時に前線の戰鬪が始まつたのですかそれは申し上げ兼ねますが、私の居りましたヅウレスタインでは、軍が夕方の六時頃に攻擊を開始しました』と、ボルコオンスキイは云つて、少し熱心に爲り、今こそ、兼々頭の裡で用意して居た、自分が見たり、知つたり爲て居た總てのことの正確な說明を爲る機會が來たと思つた、

が、皇帝は微笑んで、彼の言語を遮ぎつた、——

『何哩ですか』

『何處から何處までですかいますか、陛下』

『ヅウレンスタインからクレムズまで』

『三哩半でございます、陛下』

『佛蘭西軍は左岸を捨てたのですか』

『斥候の報告では、最後の者が筏で河を越したのはその晩だといふのでございます』

『クレムズでは軍需品は十分ですか』

『糧、食の供給は不十分でして、その額は……』

皇帝は、彼の言葉を遮ぎつた——

『何時にシュミットは戰死しましたね』

『七時、だと思ひます』

『七時ですか？、實に悲しいことで。實に悲しいことで』

皇帝は、公爵アンドレエーに、禮を云つて、頭を下げた。公爵アンドレエーは退出した、そして、直ぐ、宮中官たちに取り圍かれた。彼は、八方で、自分を見詰めて居る親しげな眼を見、自分に話し掛ける親しげな聲を聞いた。前の晩の副官が、彼が宮中に滯在し無いのを責めて自分の家へ宿まらぬかと云つた。陸軍卿が、彼の傍へ來て、皇帝がマリヤ・テレサの三等勳章を彼に授けられる筈だと云つて、祝ひを述べた。皇后附の侍從が陛下からの招待を彼に傳へた。大公妃も彼に逢ひ度いと云つて居るといふのであつた。彼は、

誰に返答して宜いか分ら無かつた、そして、四五秒の間自分の考想を取り纏めるのに骨折つた。露西亞の大使が、彼の肩へ手を掛けて、窓の所へ伴れて行つて、彼に話を爲始めた。

ビリイビンの豫測とは反對で、公爵アンドレエーが持つて來た報知は、大喜びで受け取られた。寺院では感謝の勤行が用意された。クツウゾフはマリヤ・テレサの大勳章を授けられ、その他の賞が全軍に授けられた。ボルコオンスキイは八方から招待を受けた。そして、午前中を、墺地利政府の重立つた人々を訪問するのに費さ無ければなら無かつた。

訪問を終はつてから、夕方の五時に、公爵アンドレエーは、腹の裡で、戰鬪のことだの、ブルンに於ての待遇だのを、父親に知らせる手紙の文言を拵へながら、ビリイビンの家へと歸つて行つた。ビリイビンの家の昇降段の所に、道具で半分通り積れた荷馬車が立つて居て、そして、ビリイビンの從僕のフランツが、旅行革函を艱然引摺りながら、戸口から出て來た。

ビリイビンの家へ歸る前に、公爵アンドレエーは、この戰役中讀む書籍を買ひ込まうと思つて、書店へ馬車を寄せて、その店で少し時間を費したのであつた。

『何う爲たんだ？』と、ボルコオンスキイは尋いた。

『やア、閣下』と、重さうに荷馬車へ革函を轉がし込んで、フランツが云つた。『もつと遠方へ參るんです。惡黨奴又追つ付いて來やァがつたんで』

『えゝ？。何だつて？』と、公爵アンドレエーは尋ねた。

ビリイビンは公爵アンドレエーを迎へに出て來た。平常は落着て居る顏が昂奮して居るやうに見えた。

『いゝや、いゝや、こりやァ面白いぢやァ無いか』と、彼は云つて、『タボルの橋の話さ。奴等は刃に屆んで

橋を越しちまつたんだぜ』

公爵アンドレエーには何の事だか解ら無かつた。

『おい、市の何の馭者も最早知つてることを知ら無いなんて、君は今まで何處に居たんだい？』

『大公妃の所からの歸りなんだ。彼所ぢや何にも聞か無かつたんだが』

『でも、諸方で荷造りを爲てるのを見無かつたのかい？』

『僕は何にも見無かつた……。けれども、一體何事なんだ？』。公爵アンドレエーはヂレ込んで尋いた。

『何事だといふのかい？斯うなんだ、佛蘭西軍がアウエルスベルヒの守つてる橋を越したんだ、橋は墺地利軍の手では破壞され無かつたんだ、だから、ムラァは、ブルンへの往還を今頃は驀地に駈けて居る所で、今日か明日か、奴等は此所へ來るだらう』

『此所へ？。でも、火藥の裝置が出來て居たといふのに、何うして、橋を破壞し無かつたのかい？』

『いや、それは此方で君に尋き度い所なんだ。誰も——ボナパルト自身でさへ——何故だか解るまいよ』

ボルコオンスキイは肩を搖つた。

『でも、奴等が橋を越したんなら、墺地利軍は萬軍休した譯だ、それは包圍されて了まふだらう』

『いや、全く其所なんだ』と、ビリイビンが答へた。『まア聞き給へ、斯ういふ譯さ。君に話した通り、佛蘭西軍は維也納へ入つた。其所は何事も結構安心なんだ。次の日、卽ち昨日だ、ムラァ、ランヌ、ベリアールなんといふ元帥連中が、馬に乘つて、橋へと出掛けたんだ。(宜いかね、三人ともガスコン人なんだよ)。「諸君」と、そのうちの一人が云つて、「ご承知の通り、タアボル橋は、十分火藥が裝置してあつて、恐るべき堡壘と、驚破と云へば橋を破壞して、われ〳〵を通さ無いやうにしろといふ命令を受けた一萬五千の兵とで守

られて居る。けれども、若し、われ〳〵が彼の橋を取れば、われ〳〵の英聖なる皇帝ナポレオンのご機嫌が麗しからうと思はれる。一つわれ〳〵三人で行つて取らうでは無いか」。「左樣、行きませう」と、餘の二人が云ふんだ、で、三人が出て行つて、橋を取り、それを越え、そして、今、ダニュウブの此方側へ全軍を持つて來て、最早ドン〳〵われ〳〵の方へ、君等や、君等の聯絡線の方へ、進んで來つゝあるんだ』

『冗談どころかい』と、公爵アンドレエーは、悲しさうな眞面目で、云つた。この報知は彼に取つては苦しかつたと同時に、又嬉しくもあつた。露西亞軍が左樣な絶望的な位置に陷つて了まつたことを聞いた途端に、彼の心にはフイと、自分こそ左樣な位置から露西亞軍を救ひ出すべき人間であつて、無名の將校の列から常久に自分を挺んでさして、自分の爲めに、大榮譽に達する最初の路を開いて呉れる事件——卽ち、自分に取つてのツウロン——が今來たのだといふ考想が起つた。ビリイビンの談話を聞いて居るうちに、彼は、最早、何ういふ風にして、軍に達し、戰略會議で軍を救ふ卓說を出し、そして、何ういふ風にして、自分獨りでその計策を實行する任に就くといふやうなことを考へ〳〵して居た。

『冗談どころかい』と、彼は云つた。

『冗談なものかね』と、ビリイビンは、談話を續けた。『これ位眞實の、これ位悲しいことアありやアし無いよ。で、その三人の紳士は、他に誰も伴れずに、橋の傍へ進んで、白い半巾を振つたんだ、彼等は、休戰だと云ひ、それから、自分達——元帥——は公爵アウエルスペルヒと會見する爲めに來たんだと云つた。當番の將校は、橋の元へ三人を入らせた。彼等はその將校を捉まへて、ガスコニイ式の出鱈目を山ほど並べ立てたね、戰爭は終つたの、皇帝フランツがボナパルトと會見を約されたの、自分たちは公爵アウエルスペルヒに會ひ度いの、なぞと、勝手な熱を吹いたんだ。將校はアウエルスペルヒにその旨を取り次がせたんだ。そ

のガスコニイ生れの紳士たちが、將校たちを抱擁し、洒落を云ひ、砲身に脚掛なぞして居るうちに、一方では、佛蘭西兵の一大隊が、何時の間にか、橋の上へ進んで來て、燃料の袋を河へ擲り込み、そして、橋の元へと推し寄せたんだ。到頭、中將、われ〳〵の親愛なる公爵アウエルスペルヒ・フォン・マウテルン自身が現て來た。わが親愛なる敵よ。墺地利武士の精華なる君よ。土耳古戰爭の勇士よ、兵端は收まりましたぞ、われわれは互に手を摯り得るんです……。皇帝ナポレオンは公爵アウエルスペルヒにお會ひなさるのを待ち焦れて居られます」。一言で云へば、その紳士たちは——流石はガスコン人で——彼等の言語の砲火がアウエルスペルヒの眼へ入つて、敵に砲火を浴せるべきことを忘れさせた位に、旨い口前でアウエルスペルヒを烟に卷いて了まひ——彼は、佛蘭西の元帥たちに斯う急に心安く爲つたので、有頂天にされ、彼等の外套や、ムラアの駝鳥の羽毛の附いた帽子に眼を眩まされて了まつたんだ』(自分の物語の面白味に拘はらず、ビリイビンは、自分の警句を云つてから、それに感服する時間を聽者に與へる爲めに、一寸と言語を止めることを忘れ無かつた)。『佛蘭西兵の一大隊が橋の元へ駈けて來て、砲孔を塞ぎ、それで、橋が取られて了まつたんだ。いや、所が、實際この物語のなかで一番振つてる所はね』と、自分の昂慣は、自分自身の物語の興で鎭められて了まつて、ビリイビンは言語を續けて、『火藥に火を點けて、橋を破壞して了まふ合圖の爲めの砲を掌かつて居た軍曹のことなんだ、その軍曹はね、橋へと駈けて來る佛蘭西軍を見て、發砲しやうと爲たんだ、けれども、ランヌがその手を抑へて了まつた。で、自分の將官より拔目の無かつたその軍曹は、アウエルスペルヒの所へ行つて、斯う云つたんだ、「公爵、この人たちは貴下を欺ましてるんです、あれ、佛蘭西軍が來ました」。ムラアは、その軍曹に十分口をきかしては大事去るべしと見て取つた。で、さも呆れた顏付で(其所が如何にもガスコン人なんだね)アウエルスペルヒに向つて、「世界ぢうに鳴り響いて居た墺地利の紀律といふ

のは、此樣なものなんですかなァ」と、云つて、「低い位地の者が閣下に向つて此樣な風に話し掛けるのを許してお置きに爲るのですか」さ。これは、天來の妙策だつた。公爵アウエルスペルヒは面目を失なつて了まつて、その軍曹を制縛させたんだ。おい、何うだい、タアボル橋のこの物語は總て實に面白からう。頓間な爲めでも無ければ、又臆病な爲めでも無し……』

『謀叛かも知れ無い』と、公爵アンドレエーは、云つて、眼の前に現然と、鼠色の外套や、負傷や、發砲の烟、音、それから、自分を待つて居る榮譽を描いた。

『それでも無いんだ。この爲めに墺地利の宮中は隨分な逆境に陷つたね』と、ビリイビンは物語の續きを追つた。『謀叛でも無し、臆病でも無し、頓間でも無いんだ、丁度ウルムの場合と同なじで……』彼は、警句を案じながら、考へ込んで居るらしかつたが、『それは……マック式なんだ。われ〳〵はマック式にされちまつたんだ』と、やがて云つた彼は、警句も、警句も、全く斬新な、他人が諸方で繰り返すだらうと思はれる奴を巧く云ひ得たと感じたのだ。得意の徵象に、額の皺をサツと一遍に引込せて、微弱な笑顏で自分の指の爪を調らべ出した。

『何處へ行くんだ？』と、彼は、起ち上がつて、部室へ行かうと爲た公爵アンドレエーの方へ振り向いて、唐突に云つた。

『僕は發足なければならぬ』

『何處へね？』

『軍へ』

『でも、君は未だ二日居る積りだつたぢやァ無いか』

『でも、僕は直ぐ發つ』

で、公爵アンドレエーは、二言か三言で、行旅の用意を極めて、自分の部室へ行つた。

『おい、君』と、その部室へ來て、ビリイビンが云つて、『僕は君のことを考へて居たんだ。何の爲めに君は行くのかい？』

で、この問題に對する自分の意見の動かし難いものであるといふ知らせに顏の皺を全然消して了まつた。公爵アンドレエーは、ビリイビンを不審さうに見たばかりで、返答を爲無かつた。

『何だつて君は行くんだい？　君が、軍が危險に陷つた今の場合、君の義務は、軍へ駈け付るのにあると考へるのは、僕にも解つてる。そりやァ道理だよ、君、そりやァ勇壯だ』

『いや、何うして、それ程のことぢやァ無いさ』と、公爵アンドレエーは云つた。

『だが、君は哲學者ぢやァ無いか、だから、もつと何處までもそれで行つて、他の側から物を見給へ、さうすれば、君の義務は反つて、君自身の身體を大切に爲るのにあることが解るだらう。戰爭なんぞは、それより他に能の無い徒輩に任しとくさ……、君は歸れといふ命令は全く受けて居らん、又此所から去つて宜いといふ許可が出た譯ぢやァ無いぢやァ無いか、すれば此所に居て、僕等と一緒に、運命の導くまゝに、何處へでも行つたら宜い譯なんだ。オルムッツへ行くんだといふ話なんだがね。所で、オルムッツはなか〳〵佳い市なんだぜ。われ〳〵は一緒に馬車で心持好く其所へ行けるぢやァ無いか。』

『それは、冗談が過ぎるぜ、ビリイビン』と、ボルコオンスキイが云つた。

『僕は信友として、誠心で君に云ふんだぜ。君は此所に居て宜い人だのに、何ういふ處へ君は行くのか、何んな目的で行くのか、熟く考量て見給へ。君が此所を出れば君には二つの途しきや無いんだ』（ビリイビン

は左の顴顴の皮に皺を寄せた)『君は、平和の條約が結ばれ無いうちに軍に達することは能き無いか、で無くば、クツウゾフの全軍と一緒に敗戰と恥辱の裡に陷るか、何方か一つより他は無いんだ』

ビリイビンは、その二重體は何したつて崩つこは無いと感じて、再、額の皺を消した。

『いや、そりやァ分らん』と、公爵アンドレエーは冷然と云つた、が、肚の裡では、思つた『俺は軍を救ひに行くんだ』

『あゝ、君、君は勇者だ』と、ビリイビンが云つた。

《十三》

その同じ夜、陸軍卿に暇乞を爲て、ボルコオンスキイは、露西亞軍が何處に居るか知らずに、クレムズへ行く途では佛蘭西人の捕虜になるかも知れぬといふ危險を冒して、露西亞軍に加はりにと出發した。

ブルンでは、全朝庭、及びそれに附屬して居る人々は誰も彼も、荷造りを爲て居た、そして、重い荷は最早オルムッツへ向けて差し立てられて居た。エッセルスドルフの近傍で、公爵アンドレエーは、露西亞軍が隊伍を亂して、大急ぎで動いて居た路へ出た。路に、輜重馬車の塞へて居たことゝ云つたら、乘用馬車で乘り拔ることは到底能きさうも無かつた程であつた。公爵アンドレエーは、哥薩克兵の司令の將校から馬と哥薩克兵を一人得て、飢ゑ、憊れたまゝで、輜重車の間を縫つて、總司令官と自分自身の荷物とを探して乘り進んだ。軍の狀態に就ては非常に厭な風說が路で耳に入つたが、今、潰亂の有樣で逃げて行く軍の態樣を目前に見て、その風說の虛で無いことが分つた。

『英吉利の黃金が、世界の盡端より買ひ來つたその露西亞軍に對しては、予は、それに同じ運命(ウルム

軍の運命)を蒙むらすべしと』、公爵アンドレエーは、その戰役の始に於て、ボナパルトが自分の軍に與へた訓諭の言語を憶ひ起したが、その言語が、彼の心の裡に、彼の崇拜して居る大人物の天才に對する嘆服の念と、傷けられた自尊心の感と、榮譽の希望とを同時に喚び起したのであつた。

『死ぬるより他に途が無かつたとしたら?』と、彼は思つた。『いや、他に途が無いのなら、それで構はん。俺は、人並にやァやつて見せる』

公爵アンドレエーは、種々の隊や、輜重車や、砲兵の集團などの切れ目の無い混然になつた群集だの、その後から、輜重車、小荷馬車、又大荷馬車といふ風に有りと有らゆる形の馬車が續いて、三列にも四列にも並んで、互に追掛合ひ、泥濘つた路を塞いで居る光景だのを、さも苦々しげに見遣つた。四方八方、後も前も、耳の達く限り、何の方でも、車輪の轟、小荷馬車、大荷馬車、砲車の音、馬の足音、鞭の音、馭者の喚く聲、兵卒、從卒、將校などの罵る聲が聞えた。路側には、斃れた馬や、時には、その皮を剝ぎ屍體や、何物かを待つて隊に離れた兵卒の坐わつて居る打壞れた荷馬車や、隊から落伍した兵卒の群が附近の村へと向つたり、家禽、羊、乾草、又は何かして食物の袋を持つて、歸へつて來たりして居るのなどを見た。路が登り坂か下り坂かに爲つて居る所では、混雜が一層甚くなつて、引切り無しに怒號り聲のワァ〳〵いふのが聞えた。泥濘に脚を吸はれる兵卒は、鳴り響く鞭や、滑る蹄、斷れる曳革、咽喉を裂くやうな叫喚の最中で、銃を握り詰め、荷馬車に繞つた、兵の進退を指揮して居る將校は、輜重の前、後と、彼方此方乘り廻した。彼等の聲は一般の叫喚の最中では、艱然微弱に聞えるばかりであつて、彼等の顏は、彼等自身混亂を鎭める方は最早無いと諦らめて居る態樣を洩らして居た。——

『あゝ、これが、われ〳〵の愛する聖軍なのか』、ボルコオンスキイは、ビリイビンの言語を憶ひ起して、

斯う云つた。

彼は、そのうちの誰かに、總司令官の所在を尋かうと思つて、輸送隊の一つへ乘り附けた。彼の眞向から、兵卒が有り合はせの材料で拵へ上げたらしい、荷馬車と、一頭馬車と、四輪馬車との間物の變挺な馬車がやつて來た。一人の兵卒が、それを馭して居た、帷帳の後の、柔皮の車蓋の下に、肩掛で身體を纏んだ女が坐つて居た。

公爵アンドレエーは、その傍へ乘り附けて、兵卒に尋ねやうとしたが、途端に、その馬車の裡での女の絶望の金切り聲に注意を轉じさせられた。輸送を掌どつて居た將校が、馭者臺の兵卒が前の者を追ひ越さうとばかり燥るので、それを目掛けて、擲ぐるといふと、鞭が車蓋の上へ當つた、女は遽然しく叫んだ。公爵アンドレエーの姿を見るといふと、女は、車蓋の下から覗き出し、肩掛から痩せた手を出し、それを振つて、叫んだ、——

『副官。貴下。……後生です。……助けてください。……何うされるのか分ら無いんですから……第七獵兵の軍醫の家内なんですよ……通して呉れ無いんですよ、後れちまつたんです、はぐれましたんですよ……』

『潰肉のやうに叩き潰ぶして呉れるぞ。後へ戻れ』と、ムカッ腹を立てた將校は、兵卒に怒號つた、『醜婦を伴れて後へ戻れ』

『貴下、助けてください。何うしたことなんだらうねえ、これは』と、軍醫の妻は叫んだ。

『この馬車を通してやつて呉れ給へ。女ぢやァありませんか』と、公爵アンドレエーは、將校へと乘つて行つて、云つた。

將校は彼をジロリと見た、そして、一言も返答せずに再び兵卒に振り向いた。『一歩でも割り込んで見ろ、

唯は置かんぞ……戻れ』

『通して遣り給へ、是非』と、公爵アンドレエーは、云つて、緊然と唇を結んだ。

『君は一體何だ？』と、將校は、醉狂の恐しい權幕で、不意に公爵に振り向いた。『君は一體何だ？。君は』

（將校は、その一語に如何にも無禮な調子を籠めた）『司令なのか、おい？。此所の司令は俺だぞ、君ぢやァ無いよ。後へ戻れ』と、繰り返して、『で無きやァ、潰肉のやうに叩き潰すぞ』。この言語が、將校には太く氣に適つて居るらしかつた。

『小さい副官の野郎に旨く劍鑿を食はしたな』と、後の方で、聲が云つた。

公爵アンドレエーは、將校は、何を云つて居るのか自分にも解らぬまで圖部六に醉拂つて物の辨別も附かぬ狀態に居るのだと見た。彼は、變挺な馬車の裡の軍醫の妻を保護することが、彼が世の中で何よりも厭だと思ふこと、卽ち佛蘭西語でいふ滑稽の狀態に、彼の身を曝らすのだと見た、が、彼の本能は、それより他の或るものを彼に告げた。將校の言語が切れるか、切れ無いかの間に、公爵アンドレエーは、前後を忘れるやうな憤怒を帶びた顏で、將校の傍へグッと馬を寄せて、鞭を振り上げた、『さァ——通して——遣らんか』

將校は腕を振り廻はして、急に乘り去つた。

『これは悉皆奴等、あゝいふ參謀どもの咎なんだ、この混亂は悉皆』と、彼は、咳いた。『何うでも勝手に爲ろ』

公爵アンドレエーは、眼を擧げずに、自分を生命の親だと呼んだ軍醫の妻から急いで遁れた。その氣の利か無い一場の詳細を憶ひ出しては、何とも云へ無い厭な心持が爲ながら、彼は　總司令官が居ると敎へられた村の方へと馬を驅つた。

村へ着くと、馬から下りて、責めて寸時休み、何か一口食ひ、胸を苛責む種々な苦しい印象を何うになりと明瞭な形に纏めやうと思つて、取つ付きの家へと行つた。『無賴漢の群集だ、軍隊ぢやァ無い』と、心の裡で思つて、窓の所へ行つた、と、聞馴れた聲が、彼の名を呼んだ。

彼は見返つた。小さい窓からネスヴィイツキイの奇麗な顏が突き出した。ネスヴィイツキイは、濕つた口で何か嚙みながら、手招ぎを爲て、彼を呼び込んだ。

『ボルコオンスキイ。ボルコオンスキイ。聞え無いか、おゝい？早く來給へ』と、ネスヴィイツキイは叫んだ。

家へ入つて行くと、ネスヴィイツキイと今一人の總司令官附の將校が食事を爲て居た。二人は、急いで、ボルコオンスキイに向いて、情報を尋ねた。二人の見馴れた顏の面に、ボルコオンスキイは心配と不安の樣態を讀んだ。さういふ表情は、常例は哄笑の充ちて居るネスヴィイツキイの顏に著るしかつた。

『總司令官は何處なんだ？』

『此所、この家にお居でです』と、總司令官附の將校が答へた。

『おい、眞實かね、平和、降伏といふのは？』と、ネスヴィイツキイが尋いた。

『それは僕の方で聞きたいことだ。僕は此所まで來るのが非常な骨折だつたといふ他に、何も知ら無いんだ』

『あれからの狀態といふのは實に無いね、君。恐ろしい狀態なんだ。マックを笑つたのは間違つて居たよ、われ〳〵の方はこれから先彼どころぢやァ無からうぜ』と、ネスヴィイツキイは云つた。『が、まァ坐わつて、何か食り給へ』

『貴下の荷物や何かは何うなつたか最早分りませんぜ、公爵、貴下のビョオトルが何處へ行つて了まつたか知れんのです』と、今一人の副官が云つた。

『總司令部は何處だね』

『ツナイムがわれ〳〵の今夜の宿泊地です』

『ねえ、僕は、入用の物を悉皆馬二匹に捆げちやつたんだ』と、ネスヴィイツキイが云つた。

『所が、非常な荷を拵へて呉れやがつたね、ボヘミヤの山の裡ぐらゐまでは大丈夫逃げられやうといふ荷支度なんだ。事態は容易ならん狀態なんだ、君、や、おい、君は病氣ぢやァ無いか、其樣なに慄へて？』、ネスヴィイツキイは、公爵アンドレエーが、流電槽にでも觸はつたとでも云ひさうに、身振るひを爲て居るのに氣が付いて、斯う尋ねた。

『いや、僕は何でも無い』と。公爵アンドレエーは答へた。彼は、その時、軍醫の妻と、輜重監督の將校の事件を憶ひ起して居たのであつた。

『總司令官は此所で何ういふことを爲て居るんだね』

『一向分らん』と、ネスヴィイツキイは云つた。

『僕には唯だ何でも厭で、厭で、厭で、爲方が無いんだ』と、公爵アンドレエーは云つて、總司令官が居るといふ家の方へと行つた。

クツウゾフの馬車、その幕僚の疲れ切つた乘馬、聲高に話して居る哥薩克兵どもなどの傍を通つて、公爵アンドレエーは、クツウゾフの部室の次の室へ行つた。クツウゾフ自身は、公爵バグラアチオンとウァイエロテルと一緒に小家の奥の室に居るといふのであつた。ウァイエロテルといふのは墺地利の將官で、シュミット

に代つた人であつた。

次の間には、小さいコズロオフスキイが、書記に眞向かつて、床に蹲踞んで居た。書記は、顚倒へした桶に腰掛けて、制服の袖口を捲りあげて、大急ぎで何か書いて居た。コズロオフスキイの顏は心配窶れがして居た、一晩中寢なかつたとでも云ひさうな態に見えた。彼は公爵アンドレエーをジロリと見たばかりで、目禮も爲無かつた。

『第二線……宜いかね？』と、彼は、書記に口授しながら、言語を續け、『キイフ選拔兵、ボドルスキイ……』

『餘まり速過ぎます、貴下』と、書記は、突慳貪に云つて、コズロオフスキイを見た。

その途端に、急込んだ不滿らしいクツウゾフの聲と、それを遮ぎる聞き馴れ無い他の聲々が、戸越しに聞えて來た。さういふ聲々の響、コズロオフスキイが公爵アンドレエーをジロリと見たのみで構ひ付け無い態度や、惱まされた書記の無愛想なさまや、書記とコズロオフスキイとが、總司令官の居所の左樣な間近で、床に桶を顚倒へして、その周圍に坐つて居ることや、馬を抑へて居る哥薩克兵どもが、窓の所で、左樣聲高に笑つて居ることや、まづさういふ一體の有樣が、公爵アンドレエーに、何か重大な災害が、人々の上に落ち懸つて居ることを感じさせた。

公爵アンドレエーは、燥き込んで、樣子を尋かうとコズロオフスキイに振り向いた。

『今直ぐ、公爵』と、コズロオフスキイは云つた。『バグラアチオンの兵の配置は……』

『降伏は何うなんです？』

『左樣なことは寸毫も有りません、戰鬪の準備が出來てるんです』

公爵アンドレエーは、幾人かの聲の響が聞えて來た戸の方へと行つたが、彼が戸を開けやうとしたその途

端に、部室の裡の聲々がパタリと止んで、戸が自然に開いた、そして、鷲鼻の、圓顏のクツウゾフが戸口に現はれた。公爵アンドレエーは、クツウゾフの全くの眞正面に立つた、が、總司令官の見える方の眼の表情で見ると、考慮と心配が視力を、云はば、曇らした程までに、彼の心に一杯になつて居たことは明瞭であつた。彼は、副官の顏を凝乎と見た、が、それをそれと氣が付か無かつた。

『おい、出來たかね』と、彼はコズロオフスキイに聲を掛けた。

『唯今直ぐ、閣下』

背の低い瘠せた、まだ、年寄りでは無い、勇氣の表はれた落着た東洋型の顏のバグラアチオンが、總司令官の後から出て來た。

『唯今歸りました』と、公爵アンドレエーは、封狀をクツウゾフに指し出しながら、稍聲高に、再び云つた。

『うん、維也納から？あゝ、宜しい。後で、後で』

クツウゾフは、バグラアチオンと一緒に、昇降段の所まで行つた。

『では公爵、左樣なら』と、彼は、バグラアチオンに云つた。『ご機嫌克う。大捷を祈りますぞ』

クツウゾフの顏は不意に和いだ、そして、涙が眼に溜つた。左の手でバグラアチオンを引き寄せた、と共に、指輪を嵌めて居た右の手で、常例やるらしい手付で、相手の頭の上で十字を切つて、彼は、圓い肥つた頰部をさし付けた、が、バグラアチオンは、其所で無く、頸部に接吻した。

『ご機嫌克う』と、クツウゾフは繰り返し、そして、自分の馬車の方へと行つた。

『一緒に乘りなさい』と、彼はボルコオンスキイに云つた。

『至高なる閣下、私は此所で働き度いのです。公爵バグラアチオンの隊に加はることをお許しください』

『乘りなさい』と、クツウゾフが云つた、そして、ボルコオンスキイが躊躇つて居るのを見て、

『善い將校は私自身入用なのだ、私自身』

二人は馬車の裡に座を占めた、そして、少時の間默つて行つた。

『未だこれから先、種々なことが澤山、澤山ある』と、彼は、ボルコオンスキイの心の裡を過ぎて居た有らゆることを見徹したかのやうに、老年の千里眼の表情で、云つた。『彼の枝隊の十分一が歸つて來れば、非常な好運だ』と、獨語のやうに、云ひ添へた。

公爵アンドレエーは、クツウゾフをヒョイと見た、そして、我知らず、自分とは一碼離れぬ所にある、イスマイルで頭を彈で擊ち拔かれた後の額の念入りに洗つた疵痕と、眼球の無い空な眼窩に、眼が付いた。

『左樣だ、この人こそ、多くの人々の死滅を左樣平氣で云ふ權利があるのだ』と、ボルコオンスキイは思つた。

『ですから、私は彼の枝隊へ遣つて頂き度いと願つた譯です』と、彼は云つた。

クツウゾフは何とも返答し無かつた。彼は、相手の話を全然忘れて了まつたやうに見えた、そして考慮に沈んで坐つて居た。五分ほど經つて、クツウゾフは公爵アンドレエーに話し掛けた。最早その顏には情緒の痕跡は全然無かつた。微妙な皮肉で、皇帝に謁見の詳細、その宮中でのクレムズの戰鬪に關する評判、互の知り合の貴婦人たち、などのことを、公爵アンドレエーに尋ねた。

（十四）

クツウゾフは、十一月の一日に、彼の間諜の一人から、自分の率ゐて居る軍は殆ど絕望の位地に居るのだといふことを示す情報を得た、間諜は、佛蘭西軍は、維也納で橋を渡つてから、大擧して、クツウゾフと露西亞から進軍して來る援軍との間の聯絡線へと動いて居ると報じた。

若し、クツウゾフにして、クレムズに止まるに決するのであつたら、ナポレオンの十五萬の軍が、有らゆる聯絡からクツウゾフの軍を絕ち、四萬の疲憊れた軍を包圍するので、クツウゾフはウルムの前面のマックと同じ位地に陷るであらう。

若し又、クツウゾフにして、露西亞からの援軍と聯絡し得られる路を捨てると決するのであつたら、彼は、ボヘミヤの山中の知ら無い地方の路無き路を辿りながら、敵軍の精英に追擊されて、ブクスヘフデンと聯絡を遂げることの望を全く擲つて了まは無ければなるまい。

更に又、クツウゾフにして、露西亞からの軍に聯絡する爲めに、クレムズからオルムッツに至る路を行進するに決するのであつたら、彼は、維也納橋を越えた佛蘭西軍が、彼に先立つて、その路の行方を占領して居るのに遭會ひ、隨つて、彼の輜重の足手纏になる行進中に在つて、彼の軍より三倍の數で、兩側から、彼の軍を取り圍んで居る敵軍と、何うしても戰は無ければならぬといふ危險を冒す譯になつて居た。

クツウゾフは最後の方を擇んだ。

間諜の報告に依れば、佛蘭西軍は河を渡つてから、クツウゾフの進路の行方百露里餘の所に在るツナイムに向けて急行進を起して居るといふのであつた。佛蘭西軍より先にツナイムに達することが能きれば、自分の軍を助ける望が十分あつた。が、佛蘭西軍を先にツナイムに入らせては、それは、自分の全軍をばウルムの墺地利軍のやうな恥辱に曝すか、で無くば、軍の全滅かといふことになる譯であつた。所で、全軍を提げ

て、佛蘭西軍より先にツナイムに達することは思ひも寄らず無かつた。佛蘭西軍の通る維也納からツナイムに至る路は、露西亞軍の通るクレムズからツナイムに至る路より近くもあり好くもあつたのだ。

情報を受けたその晩に、クツウゾフは四千の兵のバグラアチオンの前衛を、クレムズ――ツナイム街道から山を越えて右へ、維也納――ツナイム海道へと送くつた。バグラアチオンは、强行で進んで、ツナイムを背にして、維也納の方に向いて止まり、それで若し佛蘭西軍より先にその海道に達し得たらば、能きる限り佛蘭西軍を阻止て置く筈であつた。クツウゾフ自身は全輜重を提げて、ツナイムに直行して居た。

バグラアチオンは、夜、暴風雨を冒して、路の無い山の間を、飢ゑた跣足の兵を率ゐて、四十五露里の行進を爲た。兵の三分の一の落伍を後に殘して、バグラアチオンは、維也納から進んで居た佛蘭西軍より二三時間先に、維也納――ツナイム海道のホラブルンに達した。クツウゾフは、全輜重を率ゐてツナイムに入るには、未だその先二十四時間タップリ要するのであつた、で、軍を助けるのには、バグラアチオンは、四千の飢疲れた兵で、ホルブルンで自分に對して居た敵の全軍を二十四時間阻止て居無ければならぬ無かつた、所で、これは何う見ても不可能であつた。

が、運命の氣紛は不可能を可能に爲た。

佛蘭西軍の手に維也納の橋を與へた詐略の成功が、クツウゾフをもその策で爲てやらうと、ミュラアを誘つた。ミュラアは、ツナイム海道のバグラアチオンの弱い枝隊に遭會ふと、それをクツウゾフの全軍だと想像した。その軍に最後の殲滅的敗軍を與へやうと思つて、彼は、未だ維也納からの途中にあつた兵を待つた、で、その積りで、彼は、兩軍が位地を變へも爲ず、又、その時居る所から寸毫も動かぬといふ條件で、三日間の休戰を言ひ込んだ。

ミュラアは、平和談判が今進行中であるのだから、無益に血を流さずに濟ます爲めに休戰を言ひ込むのだと確言した。前衛を引受けて居た墺地利の將軍ノスティッツは、ミュラアの使者どもの言辭を眞に受けて、兵を退けて、バグラアチオンの枝隊を孤立させて了まつた。他の使者どもが、露西亞軍の戰線へ乘り込んで、平和談判に關する同じ話を爲、そして、三日間の休戰を露西亞軍に言ひ込んだ。バグラアチオンは、自分には休戰に就て諾否とも返答を爲る資格が無いと答へ、そして、敵の提言の報告を持たして自分の副官をクツウゾフの許へとさし立てた。

休戰は、クツウゾフに、バグラアチオンの疲れ切つた兵に休息を與へると同時に、自分の輜重其他（その行動は佛蘭西軍には隱してあつた）を、その旅程の前方へ一層進ませる唯だ一の方を開いた。休戰の提言は、軍を助ける唯だ一の――而も全く思ひ掛け無い――機會を與へた。

その情報を得るや否や、クツウゾフは直に、自分の所に居た高級副官のウィンツェンゲロオデを敵營へ急派した。ウィンツェンゲロオデは休戰を承諾するばかりで無く、尙進んで降服の條件を言ひ込むやうに命令されて居た、と、同時に、クツウゾフは自分の副官たちを派して、クレムズ――ツナイム海道を全軍の輜重に全速力で急がせるやうにと促がした。バグラアチオンの飢ゑ疲れた枝隊ばかりが、數に於て八倍の强さの敵に對して動かずに居て、輜重及び全軍の行進を掩護することに爲つた。

守るに及ば無い降服の提言を爲て居るうちには、輜重の一部は確にツナイムに入れるだらうといふのと、ミュラアの失策が直に發見せられるに違ひ無いといふ、その二つに對するクツウゾフの先見は的中した。

ホルブルンから僅か二十五露里のシェーンブルンに居たナポレオンが、休戰と降服に就てのミュラアの急報を受取るや否や、彼は直に露西亞軍の詐略だと見透した、で、次の手紙をミュラアに與へた。

『公爵ミュラアへ

シューンブルンにて、千八百〇五年革命暦第二月二十五日、午前八時。

足下の處分に對する予の不滿は何とも云ふに言語無し。足下は唯だ予の前衛に將たるのみで、予の命令を俟ずして休戰を爲す權力無し。足下は、予をしてこの戰役の結果を失なはせんとして居るのだ。休戰を破ぶつて敵に突進すべし。敵には、この降服條約を締結せる將官は、その資格無く、唯だ露西亞皇帝のみその權力を有するのみと、通牒せよ。

然れども、露西亞皇帝が前言の條約を批准するのならんには、予は何時にてもこれを批准すべし、されども、これは唯だ謀略に過ぎず。進め、露西亞軍を殲滅せよ……足下は、敵の輜重と砲を鹵獲すべき位地にあり。

露西亞軍の高級副官は……。權力を持ざる將校は何でも無し、この將校は權力を持たず。……墺地利人は、維也納の橋に於て、足下の策に乘つた、今度は、足下の方が露西亞皇帝の一副官の策に乘せられたるなり。

ナポレオン』

ボナパルトの副官が、ミュラアに宛てたこの威嚇的な手紙を持つて、全速力で馬を驅つた。自分の將官たちを信じ無いで、折角蹄に掛けた犧牲を指の間からずり拔けさしてはならぬと、ナポレオンは自身親兵全體を率ゐて、戰線へと進んだ。此方では、バグラアチオンの枝隊の四千の兵は、賑かに燎火を焚いて、身體を乾かし、暖め、三日目にこゝに始めて粥を拵らへた、そして、そのうち一人でも、自分たちの上に何なことが

落ち掛つて來つゝあるのか、知りもし無ければ、夢みた者も無かつた。

《十五》

午後の四時前に、クツウゾフに願ひ通した公爵アンドレエーは、グルンテに達して、バグラアチオンに合した。ボナパルトの副官は未だムラアの枝軍に達せず、戰は未だ始まら無かつた。バグラアチオンの枝隊では、誰も事態の進行を知つて居無かつた。人々は、平和の話を爲た、けれども、それが實際になるとは信じ無かつた。人々は戰の話を爲た、けれども、それが目睫に迫つて居やうとは信じ無かつた。

ボルコオンスキイをクツウゾフの氣に入りの信任の厚い副官だと知つて居たので、バグラアチオンは、司令官として能ぎる限りの親切と丁寧で、彼を迎へた。バグラアチオンは、彼に、その日かその翌日に多分戰があることを告げ、戰鬪中バグラアチオンに附いて居やうとも、或は、後衛に退いて、同じく大切な勤務の退却の秩序を監視することに爲やうとも、孰れとも、當人の所好次第で宜いと云つた。

『けれども、今日は九部通り戰は無からう』と、公爵アンドレエーを安心させやうとするとでも云ひさうに、バグラアチオンが云つた。

『この男が勳章を得る爲めばかりに、此所へ差遣されたザラな色男の參謀なら、後衛でもそれを得ることが能きる、が、若し、俺の傍に居度いといふのなら、さう爲て遣らう……勇敢な將校であつたら、俺の傍で入用なのだから』と、バグラアチオンは思つた。

公爵アンドレエーは、何方とも返答は爲ずに、傳令に出る場合に行き先を心得て居る爲めに陣地を乘り廻つて、各隊の配置を見て置き度いから、それを許して呉れとバグラアチオンに請うた。當番の附將校の、立

派な服裝の金剛石の指輪を箝めた、拙い佛蘭西語を落着き拂つて平氣で使ふ奇麗な男が、公爵アンドレエーを案内する爲めに呼び出された。

二人は、八方で、グショ濡れの將校たちが、銷沈つた顏付で、何か探がして居るらしい樣子や、村から、戶、嚶架、垣根などを引摺つて來る兵卒どもを見た。

『此所では、斯樣な奴等を制しやうはありません』と、彼等を指しながら、參謀が云つた。『司令者たちが各自の隊を抑へんのです。それ、此所をご覽なさい』と、彼は酒保の屋臺を指して、『此所に皆衆集まつて、此所に坐つて居るんです。今朝私が一遍全然追ひ拂つたんですが、ご覽なさい、再充滿です。行つて、叱ら無きやアなりません、公爵。少時、お待ちください』

『一緒に行きませう、彼所で麵麭と牛酪を買ひ度いんですから』と、未だ食事の暇の無かつた公爵アンドレエーは云つた。

『何故早く左樣仰しやら無かつたんです、公爵。何か上げさしたものを』

二人は馬を下りた、そして、酒保の屋臺へと行つた。五六人の將校が、赤くなつた疲れた顏で、卓子の所に坐つて、食つたり、飲んだりして居た。

『おい、こりやア何う爲たんです、諸君』と、同なじことを五六度繰り返した人の叱るやうな調子で、參謀が云つた。『貴下方は、各自の任務を放擲つて置て、此樣な所に來て居ては不可。公爵の命令では、誰も自分の任務の位地を離れては不可といふのぢやア無いか。さア、眞實に大尉』と、(酒保に賴んで長靴を乾かして貰つて居る)靴足袋の儘で、二人の入つて來たのを見て、起ちあがつて、少しヘンな顏を爲て微笑んで居た瘠せた小さい泥だらけの砲兵大尉を訓誡めた。

『さア、貴下は面目無くは無いかね。大尉ツウシン』と、參謀は押冠せて云つた。『僕は、貴下なんかゞ砲兵將校として、模範を示すべきだと思ふんです、それだのに、貴下は靴無しでは無いか。戰鬪喇叭でも鳴つてご覽なさい。靴無しで貴下は何う爲る積りなんです』。(參謀は微笑んだ)。『さア、何うぞ、各自の位地に歸つてください、諸君、衆皆、衆皆』と、嚴重な調子で云ひ添へた。

公爵アンドレエーは、大尉ツウシンを一寸と見ると、微笑を禁じ得無かつた。微笑みながら一言も云はずに、ツウシンは、靴無しの足を互ちがひに踏み換へて、大きい、怜悧らしい、人の好ささうな眼で、公爵アンドレエーから參謀へと、尋くやうに見廻した。

『兵が云ふのにやア跣足の方が樂ださうなんで』と、大尉ツウシンは、冗談の調子で、自分の拙い位地を取り繕らはうと骨折るらしく、恥かしさうに、微笑みながら云つた。が、彼は、その言辭を言ひ切つて了まは無いうちに、冗談は駄目で、何の効も無いことを感じた。彼はドギマギして了まつた。

『何うぞ、各自の位地へお歸りなさい』と、參謀は、嚴格を失は無いやうにと骨折りながら云つた。

公爵アンドレエーは、今一度砲兵將校の小さい姿を一寸と見た。その姿には全く軍人らしく無い、寧ろ滑稽な、が、非常に懷しい特殊なヘンな所があつた。

參謀と、公爵アンドレエーは、馬に乘つて、進んで行つた。

村を乘り拔け、種々の隊の兵卒や將校に遭會つたり、追ひ付いたりして居るうちに、二人は左り方に、今掘つたばかりの土で未だ赤い、築き立て中の土壘を見た。兵の數大隊が、上衣を拔ぎ捨てゝ、寒風を物とも爲ずに、その掩堡で、白蟻のやうに働いて居た、塹壕からは赤土の幾掬ひもが、見え無い幾つもの手から間斷無しに投げ上げられるのが見えた。二人は掩堡へ乘り上つて、それを査た、そして、尙先きへと乘り進ん

だ。掩堡の直ぐ裏の所で、土壘から行つたり來たりして居る兵卒の幾十人かに遭會つた、そして、二人は、その間に合はせの汚溝の害のある空氣から、鼻を摘んで、馬を飛ばせて驅け拔け無いでは居られ無かつた。

『彼が軍陣の常例です』と、參謀が云つた。公爵アンドレエーは止まつて、自分たちの前面の模樣を尙詳しく眺め始めた。二人は、眞向ふの丘に乘り上がつた。二人はその丘から、佛蘭西軍を見ることが能きた。公爵アンドレエーは一番高い地點を指して、參謀は云つて、『司令は、先刻靴無しで坐つて居た彼の可笑しな男なんです、彼所から何でも見えます、行つて見ませう公爵』

『何うも有り難うございました、最早一人で行けます』と、成るべく速く參謀と別れ度いと思つて、公爵アンドレエーは、云つた、『何うぞ、最早お構ひ無く』

參謀は彼に別れた、そして、公爵アンドレエーは一人で乘り進んだ。

だん〳〵前へと進んで、敵に近くなればなる程、兵の樣子は一層秩序正しく、愉快らしく見えた。公爵アンドレエーがその朝通つた、佛蘭西軍から十露里離れた、ツナイムの前面の輜重隊の間では、非常な混亂と銷沈が行渡つて居た。グルンテでも、又、何と無く不安な樣子と、漠然とした恐怖が感ぜられたのであつた。

が、公爵アンドレエーが、佛蘭西軍の戰線に近づけば近づくほど、だん〳〵わが兵の自信の樣子は加はるのであつた。外套を着た兵卒は、軍曹と共に、列伍を整へて立つた、そして、大尉が點呼を爲て、列の最端の兵卒の横腹を突付いて、手を擧げろと命じた。他の兵卒は、野原ぢう方々へ散らばつて、饒舌つたり、機嫌好ささうに笑らつたりしながら、丸木や、柴を引擦つたり、假小舍を建てなどして居た。彼等は、火の周圍に坐つて、衣服着たまゝだの、裸體だので、襯衣や、履物を乾かして居るのもあつた。又は、粥鍋や大鍋の周圍に集まつて、長靴だの外套の掃除を爲て居るのもあつた。一つの隊では食事の支度が出來て居て、兵

卒は、自分の小舍の眞向の丸木の上に坐つて居た軍吏の所へ鹽梅試の分が木の鉢に入れて持つて行かるゝのを待つて居た。

今一つの隊では、——何の隊も露西亞酒を持つて居るといふ譯では無かつたので、その隊は運の好い方であつた——兵卒が、露西亞酒の小樽を傾むけて、順々に指し出される水筒の蓋へ注いで遣つて居た肩幅のある、痘痕の軍曹の周圍に坐つて居た。兵卒等は、恭しい顏容で、大切さうに、口へ蓋を擧げ、それを飲み干し、舌喋ずりを爲、外套の袖で、唇を拭いて、前より更に機嫌好ささうに歩み去つた。何の顏も、これが悉皆、少くとも枝隊の半分は確に戰場に斃れたまゝで遺さるゝ戰鬪の直ぐ前の敵前のことでは無く、何う見ても靜な駐軍地が前方に必定あるらしい露西亞國内のことであるかのやうに、如何にも落着き拂つて居た。

公爵アンドレエーは獵兵聯隊の傍を乘り越して、恰幅の立派な兵卒が悉皆前と同なじな平穩な仕事をやつて居たキイフ選拔兵の隊へと進んで居ると、他よりも一段高い所にあつた聯隊長の假小舍から遠く無い所で、裸體になつて倒れて居る男を前にして選拔兵の分隊に行掛かつた。二人の兵卒がその男を抑へ付けて居ると、今二人が撓ふ小枝を振舞して、その男の裸の背部へ、一定の時を刻んで、それを打ち下ろして居た。

男は仰山さうに叫んだ。肥つた少佐が、分隊の前を彼方此方と歩いて居て、叫聲を耳にも入れずに、斯う云ひ續けた、『軍人が盜みを爲るなどゝは實に以ての外だ、軍人は廉直で、名譽を重んじ、それから、勇敢で無きやァならん、而るに、戰友の物を盜むなどゝは全く破廉恥だ、妖怪だ、尙未だ、尙未だ』

で、又更に、鈍いバタリ〳〵といふ音と、絶望的な然かし態とらしい叫聲が、公爵アンドレエーの耳に入つた。

『尙未だ、尙未だ』と、少佐は云つて居た。

若い將校が、顏に當惑の表情を見せて、司令部附の將校を不思議さうに眺めながら、笞刑の場所から歩み去つた。

公爵アンドレエーは最先頭の線まで出て來て、その前面に沿うて乘つた。わが前線と敵のそれとは、左翼でも、又右翼でも、互に離れて居た、が、中央の、朝使者たちが會合した地點では、兩軍の兵卒が相互の顏を見て、談話を爲合へる位に、兩軍の戰線が近寄つて居た。戰線のその部分を守つて居た兵卒の外に、兩軍から他の兵卒が其所へ集まつて來て、相互に敵の不思議な目新らしい服裝や態容をジロ〳〵眺めながら、笑つて居た。

早朝以來、戰線へ出ることは禁じてありながら、司令の將校たちも物見高い兵卒を引留めて置くことは能き無かつた。戰線のその部分を守つて居た兵卒は、何か珍物を見せる見世物師のやうに、最早佛蘭西人は見ずに、見に出て來た人々のことを種々と評し、退屈し切つた顏で、交代を待つた。公爵アンドレエーは、佛蘭西人を熟く見やうと、馬を止めた。

『見ろ、見ろ』と、一人の兵卒が、一人の將校と一緒に戰線に行つて、一人の佛蘭西の選拔兵と熱心に速話に話して居た露西亞の銃卒を指して、戰友に云つて居た。『何うだい、奴巧くペラ〳〵やりやがるぢやァ無えか。フランチイ奴到底追付けるもんぢやァ無えや。おい、何うだい、シドオロフ』

『ま、少し待て、聞けよ。うん、巧えもんだ』と、佛蘭西語を話すのでは一廉の學者だといふ評判であつたシドオロフが答へた。

二人が笑ひながら指した兵卒はドロオホフであつた。公爵アンドレエーは直ぐそれだと氣が付いて、彼が云つて居ることに耳を傾けた。ドロオホフは自分の中隊長と一緒に、自分の聯隊の配られて居た左翼からや

つて來たのであつた。

『さう、今一遍、今一遍』と、大尉は促がして、自分には寸毫も解から無いに拘はらず、頸を伸ばして談話のなかの一言も聞き洩すまいと骨折つた。『もつと、やつて呉れ。奴何を云つてるのかい？』

ドロオホフは大尉には返答し無かつた、彼は、佛蘭西の選拔兵と激論をやり出して居た。二人は、勿論、その戰役の談話を爲て居た。佛蘭西人の方は、墺地利人と露西亞人をゴッチャに爲て、露西亞人は負けて、ウルムから此所までズッと逃げ續けた、と云ひ張つて居た。ドロオホフの方は、露西亞人は一度も負けは爲ず、反つて佛蘭西人を破つたのだ、と主張した。

『われ〳〵は此所からお前たちを追ひ拂ふ命令を受けて居るんだ、で又、左樣爲るよ』と、ドロオホフが云つた。

『お前さんたちが、哥薩克兵全部と一緒にわれ〳〵の捕虜にならんやうに氣を付けなさい』と、佛蘭西人が言ひ返した。

佛蘭西側の見物人や聽者は笑つた。

『スヴォーロフ時代にお前たちが踊つたやうに、此度もさういふ風にお前たちを踊らしてやるぞ』と、ドロオホフが云つた。

『彼奴は何を饒舌り散らしてるんだい？』と、今一人の佛蘭西人が云つた。

『ズッと昔の歷史だ』と、往時の戰爭の物語だと推量して、今一人が云つた。『皇帝は、他の奴等をやつつけたやうに、お前のスヴォーロフもやつつけてお了まひなさらァ……』

『ボナパルトは……』と、ドロオホフが云ひ始めた、が、佛蘭西人は彼を遮ぎつた。

『ボナパルトでは無い。皇帝なんだぞ。この野郎……』

『死滅りやアがれ、貴樣の方の皇帝なんざア』

で、ドロオホフは、露西亞語で、兵卒らしい口汚ない惡體を吐いて、銃を肩へ擧げて、歩み去つた。

『お來なさい、イヴァン・ルキイチ』と、彼は大尉に云つた。

『成る程、奴等の佛蘭西語は彼樣いふんだな』と、戰線の兵卒どもは云つた。『さア、おい、シドオロフ、お前だ』

シドオロフは瞬きを爲て、佛蘭西人に振り向き、意味も何にも無い綴字を非常な速語でペラ〳〵饒舌りだした。

『カリ…マ…ラ…タ…ファ……サ…フィ…ム…テル…ケス…カ』と、聲に如何にも意味ありげな調子を付けて、彼は饒舌つた。

『は、は、は。あは、あは。あは、あは。あァ。うゥう』と、兵卒どもは、如何にも心の底から機嫌の好い笑で哄と噴飯し、佛蘭西人もそれに誘はれ無いでは居られ無かつたので、その後では、雙方とも、銃の彈を拔き、彈藥を爆發させ、大急ぎで國へ歸ら無ければならぬ譯でありさうに見えた位であつた。が、銃は裝彈の爲たまゝであり、家だの、土堡の銃眼は、尙且凄まじげに外を睨み、そして、砲車から下された砲は、前の通りに、敵對の位置に据ゑられて居た。

《十六》

右翼から左翼へと、軍の全線をグルリと廻つてから、公爵アンドレエーは、參謀が、全戰場が一眼に見渡

せると話したその砲兵陣地へと乘り上がつた。其所へ行くと、彼は馬を下り、砲車から取り下されて居た四門の砲の一番端のものゝ傍に立つた。

砲の前で哨兵の勤務を爲て居た砲兵が、將校と見るや否や、敬禮に向き直らうと爲た、が、それに及ばぬといふ手眞似を見て、元の通り、規則正しい單調な歩行を續けた。

砲の蔭に砲車が立つて居た、そして、まだズッと後に、砲兵の繫馬索と、燎火が在つた。左の方、最端の砲から餘まり離れ無い所に、新に建つた小さい假小舍が在つて、それから、熱心に話し合つて居る將校たちの聲が聞えた。

この砲兵陣地からは實際露西亞軍の配置は殆ど全部、敵軍のは大部分見渡せた。砲兵陣地の眞正面、向ふの丘の空際線の上にシェーングラアベンの村が見えた、左と右に、三が所で、燎火の烟の際間から、佛蘭西軍の集團が認められた。その大部分は、何うしても村その者のなかと丘の蔭とに居るらしかつた。

村の左には、煙のなかに、砲兵陣地らしい物が在つた、けれども、肉眼では明瞭には識別られ無かつた。わが軍の右翼は、佛蘭西軍の位地を見渡せるなか〳〵險しい高地に置かれて居た。その周圍に、わが軍の歩兵の諸聯隊が配置され、そして、山脊その物の上に龍騎兵が見えた。

中央、卽ち、公爵アンドレエーが全體の位置を見渡して居た、ツウシンの砲兵陣地の在る所からは、シェーングラアベンからわが軍を分つて居た川へと、最も勾配の急な坂が直下して居た。

左では、わが軍は小さい森に接して居て、其所から、森の裡で樹を伐つて居るわが歩兵の燎火の烟が揚つて居た。

佛蘭西人の戰線はわが軍のより廣かつた、で、佛蘭西軍に取つては、わが軍を兩翼から包圍するのは容易

らしかつた。わが軍の陣地の後には、險しい深い谷があつて、それへ下りて退却するのは、砲兵だの騎兵に取つては至難であつた。

公爵アンドレエーは砲に肱を凭せ、手帳を取り出して、兵の配置の見取り圖を造つた。二か所に、その點に就てはバグラアチオンに話す積りで、鉛筆で覺書を爲た。彼は、第一には中央へ、砲全部を集めること、第二には騎兵を谷の今少し奥の側へ引込めること、この二點の意見を云つて試やうと思つた。

始終總司令官に隨いて居て、兵の集團や、隊の行動を觀ると同時に、何時も、往時からの戰爭の歷史的記述を研究して居た公爵アンドレエーは、今起らうとして居た作戰の進行を、その全般的傾向に於てのみ、觀るやうに爲らざるを得無かつた。彼の想像は、次のやうな概括的な狀態を考へ設けた、——

『敵軍が、若しわが右翼を攻擊點と爲る場合には』と、彼は自分自身に向つて云つて、『キイフ選拔兵とポドオロスキイ獵兵は、中央からの遊軍が援助に來るまで、自分等の陣地を守つて居無ければなるまい。で、その場合には、龍騎兵がその側面から攻め掛つて、彼等を殲滅することが能きる。それから又、中央の攻擊の場合には、われ〳〵は、この高地に、中央の砲兵陣地を置いて、その掩護の下に、左翼を引込めて小部隊宛谷へ退却する』

彼は、斯う論定した……。

砲の所に居た間始終、彼は、往々ある通り、假小舍の裡で話して居た將校たちの聲の響を聞いた、が、彼等の云つて居たことは一語も聞き分けることが能き無かつた。不意に、假小舍の聲が、彼が耳を傾け無い譯には行かぬ程の熱心な調子に爲つて來た。

『いや、君』と、公爵アンドレエーには何と無く耳馴れたやうな心持の好い聲が云つた。『僕の云ふのはね、

人が、死んで後のことを知ることが能きるのだつたら、誰も死を恐れはしまひといふんだよ。それは、左樣なんだ、君』

今一つの若い聲がそれを遮へぎつた、『で、恐れやうが、恐れまいが、それを遁がれやうは無いぢや無いか』

『やア、君たちは何時も恐れて暮してるのかい。わアい、學者ども』と、雙方を遮へぎつて、男らしい第三の聲が云つた。『何うも、君たち砲兵士官は悧巧だな、食ふ物も、飲む物も悉皆持つて歩けるんだから』

で、その聲の持主、何うも步兵將校らしかつたのが、笑つた。

『それでも、人は恐れて居る』と、公爵アンドレエーには聞き覺えのある最初の聲が續けた。『人は知れざるものを恐れるんだ、卽ち、それなんだ。靈魂は天へ行くんだといふのは甚だ結構なんだが……けれども、天などゝいふものは無くつて、唯だ空氣があるばかりだといふことを、われ〳〵は知つて居るんだ』

再、男らしい聲がそれを遮へぎつた。

『さア、おい、君の藥草火酒を一杯吳れ給へ、ツウシン』と、その聲が云つた。

『あゝ、屋臺店で長靴を脫つて居た大尉なんだな』、その哲理を論ずる心持の好い聲をそれと心嬉しく認めて、公爵アンドレエーは斯う思つた。

『藥草火酒、勿論さ』と、ツウシンが云つた、『が、それでも、未來の生を考へるのは……』

彼は、その言語を終はる間が無かつた。

その途端に、空でビュウといふ音が聞えた、見る〳〵近く、見る〳〵速くなり、形が明かになり、ます〳〵速く飛んで來た、で、砲彈は、それが云はうと思ふことを悉皆云ひ切れ無かつたとでも云ひさうに、假小舍の間近の地面へヅシンと落ち、異常な力で土を搔き破つた。地は恐ろしい打擊の爲めに唸るやうに見えた。

と、同時に、假小舍から、眞先に、口に短い烟管を啣へて、小さいツウシンが跳び出して來た、彼の怜悧さうな、機嫌の好い顏が少し蒼かつた。その後から、男らしい聲の持主、背の高い步兵將校が出て來て、上衣の釦を掛け〳〵、自分の隊へと駈け去つた。

《十七》

公爵アンドレエーは、馬に乘つた、が、砲兵陣地に依違つて、彈が飛んで來た砲の烟を見て居た。彼の眼は廣い平原ぢうを速く動いた。彼は唯だ佛蘭西人のこれ迄は動か無かつた幾つもの集團が彼方此方と波立ちだしたことゝ、成る程、左の方に砲兵陣地のあることを見たばかりであつた。副官等に違ひ無い馬上の二人の佛蘭西人が丘を駈け下りて居た。瞭乎見える步兵の小さい縱隊が、多分前線を强める爲めであらう、丘を下へと動いて居た。最初の彈の烟が未だ晴れ切らぬうちに、烟は又パッと出て、今一つ彈が飛んだ。

戰は始まりだした。

公爵アンドレエーは馬を振り向け、公爵バグラアチオンを索めにと、グルンテへ驅け戻つた。彼は、後で、砲戰がだん〳〵高く繁くなるのを聞いた。わが兵も確に答へだして居た。銃聲が、下の前線が互に一番近寄つて居た場所で聞えた。

ルマルロアが唯つた今ナポレオンの恐ろしい手紙を携つて、ムラアの所へ驅け付けたばかりの所であつた、そして、ムラアは、恥ぢ入つて、自分の失策を取り返さうと燥つて、自分の前面の眼の裡へ入る位の枝隊なぞは、日暮前、皇帝の來無いうちに、殲滅して了まはうと思つて、直ぐに敵の中央と、兩翼の方へ兵を動かした。

『始まつたぞ。いよ〳〵來たな』と、血が心臟へ突き上つて來るのを感じて、公爵アンドレエーは思つた。

『が、何處だらう？。俺のツウロンは何んな形に爲つて來るだらうな』と、彼は訝かつた。

十五分位前には粥を啜り、露西亞酒を飲んで居た隊の間を通つて行くと、彼は、何處でも、隊伍を整へ、銃を用意して居る兵卒の同なじやうな敏活な行動を見、また、何の顏にも、彼自身の胸に感じたと同なじやうな熱心を見た。

『始まつたぞ。いよ〳〵來たな。恐しい、が、面白いぞ』と、何の兵卒の顏も、何の將校の顏も、云つて居た。

築き立てられて居た土壘に達し無いうちに、彼は、鈍い秋の日の夕方の光のなかで、彼の方に横切つて來る幾人かの騎馬の人々を見た。先頭の人はフエルトの雨外套を着、アスツラアハン帽を冠ぶつて、白馬に乘つて居た。それがバグラアチオンであつた。公爵アンドレエーは止まつて、彼方の近付くのを待つて居た。公爵バグラアチオンは馬を止めて、公爵アンドレエーをそれと認めて、頷いて會釋した。バグラアチオンは、公爵アンドレエーが見て來たことを話して居る間も、尙且前面を見詰めて居た。

『始まつたぞ。來たな』といふ表情は、半分閉むつた、光の無い、眠むさうな眼のある公爵バグラアチオンの强い鳶色の顏の面にさへ認め得られた。公爵アンドレエーは不安な好奇心でその無感覺のやうな顏をジロ〳〵見て、その男は考へて居るのか、感じて居るのか、若しさうならその刹那何を考へ、何を感じて居るのか、知り度く思つた。『彼の無感覺らしい顏の蔭に其所に一體何があるのだらう』と、公爵アンドレエーはその將官を見ながら、不思議に思つた。

公爵バグラアチオンは公爵アンドレエーの言語に贊同した徵に首肯いて、そして、起つたことの總て、話

されたことの總ては、全く自分の先見した通りであることを見せるやうな表情で『うん、宜しい』と、云つた。公爵アンドレエーは、急速力で馬を驅つたので呼吸を切つて、速語に話した。公爵バグラアチオンは、急ぐ必要は少しも無いことを公爵アンドレエーの心に印象しやうとでもするかのやうに、東洋訛りの言語をイヤに緩々と云つた。それでも、彼はツウシンの砲兵陣地の方へと、馬に拍車を加へて駈させた。

公爵アンドレエーはバグラアチオンの幕僚と一緒にその後へ隨いた。一行は、司令部附の將校、バグラアチオン直屬の副官のジエルコフ、從將校、英吉利西種の美しい馬に乘つた當番の參謀、それから、戰を見度いといふ好奇心から同行の許可を得た文官の會計檢査官で成り立つて居た。眞圓い顏の眞圓い男であつた檢査官は、面白さうな無邪氣な顏で四邊を見廻し、馬の上でフラ〳〵と搖れ、鞍の上に外套のまゝで乘つて居る所が、驃騎兵や、哥薩克兵や、副官等などの間では餘程異樣な形に見えた。

『このお方は戰鬪を見度いと仰しやるんです』と、ジエルコフが、檢査官を指して、ボルコオンスキイに云つて、『けれども、最早ヘンな氣持に爲つておいでなんです』

『まアさ、措いてください』と、無邪氣であると同時に狡猾さうなホヤ〳〵した笑顏で檢査官は云つたが、その樣子は、ジエルコフの冷嘲の的になつたのを得意に思つて、故意と實際より間の抜けたやうに見せ掛けやうと骨折つて居るかのやうであつた。

『餘程變挺なんです、モン・モシュウ・ブランス』と、當番の參謀が云つた。(彼はウロ覺えに、公爵といふ稱號は佛蘭西語では特殊な譯し方を爲るものだとは知つて居たのだが、さて、それを本當に譯すことは能き無かつた)。

最早その時は、衆皆ツウシンの砲兵陣地へ乘り上る所であつた、そして、砲彈が直ぐ前の地面を打つた。

『落ちて來るのは何ですか？』と、檢査官は無邪氣に微笑みながら尋いた。

『佛蘭西煎餅』と、ジエルコフが云つた。

『奴等が貴方がたを打つのは此れでなんですか？』と、檢査官は尋いた。『實に恐ろしいものだ』、で、彼は面白さで身體ぢうハチ切らすかと見えた。

その言語を云ひ切るか切らぬかのうちに、再、唐突に恐しい風を切る音がして、今度は何か柔かい物にヅシリと當つた、と、バタリ——檢査官の右寄りの少し後を乘つて居た哥薩克兵が馬から地面へ落ちた。ジエルコフと參謀とは、鞍の上へ前に身體を曲げて、馬を傍へ向けた。檢査官は哥薩克兵に向かつて、停まつた、そして、それを不思議さうに見て居た。哥薩克兵は死んで居た、が、馬は未だ捲いて居た。

公爵バグラアチオンは眼瞼を下げ、見返り、そして、人々の躊躇の理由を見て、『何んだ其樣な下らんことに氣を付けるのか？』、と尋くかのやうに、無頓着に彼方へ振り向いて了まつた。馬術の名人の容易さで、馬を止め、少し前へ屈んで、外套に引搦まつた軍刀を直した。軍刀は今帶びるのとは違つた古風のものであつた。公爵アンドレエーは、スヴォーロフが伊太利で、自分の軍刀をバグラアチオンに與へたといふ物語を憶ひ出した、その追懷がその刹那彼に取つては殊に快よかつた。

衆皆は、公爵アンドレエーが戰場を見渡したその同なじ砲兵陣地へ乘り上がつた。

『誰の隊だ？』と、公爵バグラアチオンは、彈藥函の傍に立つて居た砲兵に尋いた。

彼の尋いた言語は、『誰の隊だ？』といふのであつたが、實際彼の尋たことは、『お前たちは此所で狼狽して居無いか』といふのであつた。で、砲兵はそれを理解した。

『大尉ツウシンのです、閣下』と、赤毛の雀斑のある砲兵は、頭を前へヒヨイと屈めて、快活な聲で歌

ふやうに云つた。

『成る程、成る程』と、バグラアチオンは、何か考へ込んで居ながら、云つた、そして、砲車の傍を最端の砲の所まで乘つて出た。彼が其所へ行き着いた丁度その途端に、彈が砲から唸り出て、バグラアチオンと幕僚の耳を聾した、そして、不意に砲を包んだ烟の裡で、砲兵が砲を引擦つて、元の位置へ轉がし返して居るのが見えた。砲手一番の肩幅の廣い身體の見上げる程大きい兵卒が、布箒を持つて、車輪の所へ跳んで行つて、股を廣げて突つ立つた、と、二番は、震へる手で、砲の口へ彈を入れた、肩の屈んだ小さい男、將校のツウシンは、將官のことは氣が付かずに、砲に躓きながら、前へ跳び出して、小さい手を眼の上に翳ざして、彼方を見た。

『最早二點高く、さうすれば大丈夫だ』と、黃色い聲で叫んだ、彼はその聲に、彼の姿には全然適應は無い威張り返つたやうな調子を付けやうと骨折つた。『二だ』と、彼は叫んだ。『打ち捲くれ、メヅヴィエーデフ』

バグラアチオンは、將校を呼んだ、ツウシンは、敬禮を爲る軍人と云ふより寧ろ誰かを祝福する僧といふやうな態で、臆病さうな拙態な手振りで、帽子の庇へ三本指を付けながら、將官の傍へ行つた。ツウシンの砲は悉皆谷を砲擊する積りであつたのに、彼は、その端から佛蘭西人の大集團が幾らも動き出て居たシェーングラアベンの村へ破裂彈を注いで居た。

誰もツウシンに、何に向けてとも、若くは何んな彈で擊てとも、命令したものは無かつた、で、自分が常から非常に尊敬して居た軍曹のザハルチエーンコと相談した上で、村へ火を付けるのが一番可からうと決したのであつた。

『うん、宜しい』と、バグラアチオンは、將校が左樣いふ風に爲たことを報告したのを聞て云つて、自分

の前に展いて居た全戰場を見渡し始めた。彼は何か考量て居るやうであつた。

佛蘭西軍は右側で最も近く進んで來て居た。キイフ聯隊の居た高地の下の、川が流れて居た凹地では、銃の間斷無しのボン〳〵いふ音が聞え、その物音は非常であつた。司令部附の將校が、それから右のズツと先、龍騎兵の蔭の所に、バグラアチオンに、わが軍の側面を圍まうとして居る佛蘭西軍を指し示めした。左は、地平線が傍の小さい森で劃られて居た。

公爵バグラアチオンは、中央からの二大隊に側面を援ける爲めに、右へ行けといふ命令を出した。司令部附の將校は、それだけの大隊を移せば、砲は掩護無しに爲つて了まうといふ意見を公爵の前に提出した。公爵バグラアチオンは、司令部附の將校に振り向いて、默つて光の無い眼で、それを見詰めた。公爵アンドレエーは、その將校の意見は全く妥當であつて、それに反對しやうは何うしても無いと思つた。が、その途端に、副官が、凹地に居る聯隊長から、佛蘭西軍の非常な多數が自分の隊へと突擊して來るので、自分の隊は混亂して、キイフ選拔兵の方へ退却して居るといふ報告を以て、駈け上がつて來た。公爵バグラアチオンはそれに對する承認と可納を示めす爲めに頷いた。彼は並足で、右へと乘つて、佛蘭西軍を攻擊しろといふ命令を以て、龍騎兵へ副官を送つた。が、副官は、半時間經つと、龍騎兵の聯隊長は、殲滅的な砲火が自分等の上に開かれて、無益に部下を失ふのであつたから、最早既に谷を越えて退却して、森の裡へ兵を集中したといふ報告を齎らして、歸つて來た。

『うん、宜しい』と、バグラアチオンは云つた。

丁度彼が砲兵陣地を去らうとして居た時に、銃聲が又左りの森で聞えた、所で、自分で行くには左翼は餘まり遠かつたので、公爵バグラアチオンは古參の將官——ブラウナウでクツウゾフの檢閲を受けた聯隊の將

官――に、右翼は最早長くは敵を阻止めては居られまいから、能きるだけ速く谷の彼方へ退却しろと云ふ爲めにジエルコフを遣つた。ツウシンと、その砲兵陣地を掩護して居た大隊のことは全然忘すれられて了まつた。

公爵アンドレエーは公爵バグラアチオンと司令將校等との談話と、さういふ人々に彼が與へる命令を非常に注意して聞いて居た、所が、意外なことには、何の命令も彼からは與へられずに反つて、公爵バグラアチオンの方が、必要上、若くは偶然に、若しくは、個々の將校の氣向きで、爲されたあらゆることが殘らず、彼の命令に因つてでは無くも、少くとも彼の意向には適つたものであるかのやうに見せることに骨折るだけであつたことに氣が付いた。が、公爵アンドレエーは、公爵バグラアチオンの物馴た掛引のお蔭で、爲されたことは、司令官の意志には何の關係も無く、唯だ偶然の結果であつたに拘らず、彼の居合はすことが非常な價値を持つて居たことを認めた。周章の體でバグラアチオンの所へ乘り近づいて來る司令將校たちは、彼の前へ來ると落着を得た、兵卒も將校も、彼を嬉しさうに喝采し、彼の前では元氣を回復し、そして、確に、彼の眼前で勇氣を見せやうと勵むのであつた。

《十八》

わが軍の右翼の最高點へ乘り上がつてから、公爵バグラアチオンは銃聲が間斷無しに響き烟の爲めに何も見え無い麓へと下り始めた。凹地へ近く爲れば爲る程、ますます物が見え無くなり、そして、實際の戰場の近いことが一層明瞭に感ぜられた。負傷者に行き逢ひ始めた。二人の兵卒が一人を兩側から支へながら引擦つて來た。その頭は血みどろであつた、帽子も無く咳嗽を爲て、血を吐いた。銃彈が口か喉かへ入つたらしかつた。今一人、壕の口からのやうに外套の上へ、血の流れ出る傷の痛みで大聲で唸り、手を握り扭らせて、銃無しでドン〳〵歩いて來た。その顏は痛みよりはもつと恐怖を表はして居た。これは、ホンの少し前に負傷したのだ。路を横ぎつて、バグラアチオンの一行は、深い谷へと下り始めたが、坂路で、彼等は地面に横たはつて居る五六人を見た。兵卒の群集のやつて來るのに行逢つたが、その裡には傷の無い者も居た。その兵卒どもは、喘ぎ〳〵、丘を駈け上つて居て、將官の前も平氣で、大聲で話を爲、腕で手眞似を爲た。

前の方の烟の裡に、鼠色の外套の列が見えた、そして、司令の將校は、バグラアチオンを見るといふと退却して行く兵卒の群集を追つ掛けて、引き返すやうに呼んだ。バグラアチオンは、隊列へと乘り込んだ、其所には、彼方此方で、兵卒の話聲や將校の叫聲を沒するやうな銃の遽然しい音が爲た。空氣には烟の獸な臭氣が充ち渡つて居た。兵卒どもの顏は殘らず昂奮が滿ち烟硝で燻されて居た。或る者は、棚杖で彈を裝めて居ると、他の者は、藥地に烟硝を入れ、彈盒から彈を出し、掛けて居り、更に他の者は、銃を發射して居た。が、吹き拂ふ風も無い烟の裡では、誰に向いて打つて居るのかを見ることは到底能き無かつた。銃彈の吃くやうな心持の好いヒユウ〳〵といふ音は可なり速く繰り返へされた。

『彼は何だ？』と、公爵アンドレエーは兵卒の群集へと乘り付けながら訝かつた。『戰線では無い、衆皆一緒に團まつて居るのだから、又、攻擊隊でも無い、動いて居無いから、と云つて方陣でも無い、左樣いふ風に立つて居るので無いから』

瘠せた、身體の弱さうな、見た所老人らしい聯隊長――愛嬌深い笑顏の、その老人らしい眼を半分蓋つて柔和らしい態に見せる眼蓋のある男――が、身分の高い客を自分の家へ迎へるとでも云ひさうな態で、公爵バグラアチオンの傍へ乘り付けて來て、迎へた。彼は、公爵バグラアチオンに、自分の聯隊は、佛蘭西軍の

騎兵の突擊を逆へ無ければなら無くつて、その突擊は擊退したけれども、聯隊は兵の半分を失つて了まつたと報告した。聯隊長は、それが、起つたことに對する妥當な軍事上の語詞だと想像して、突擊は擊退したと云つたのであつた、が、實は、その半時間程の間自分の率ゐて居た隊が何う爲つて居たのか彼自身知ら無かつた、そして、突擊が擊退されたのか、聯隊の方が突擊の爲めに擊破られたのか、孰らなのか、確には云へ無かつたのだ。彼の覺えて居ることは、戰鬪の始まりに、砲彈と榴彈が、聯隊の周圍にドン〳〵飛んで來て、兵を殺し始めたことゝ、それから、誰かゞ『騎兵だ』と叫んで、わが兵が發射しだしたことだけであつた。で、彼等は依然銃を擊つて居たが、それは、見え無くなつた騎兵に向つてでは無く、凹地に現はれて、わが兵に向いて擊つて居た佛蘭西の歩兵に向かつてであつた。

公爵バグラアチオンは、さういふことは總て悉皆全然自分が希ひ且つ豫期して居たものだと見せるやうに頷いた、一人の副官に振り向いて、自分たちの今通つて來た路に居た第六獵兵の二大隊を丘から下へ進ませるやうに爲ろと命令した。公爵アンドレエーは、その刹那に、公爵バグラアチオンの顏の面に現て來た變化に驚かされた。バグラアチオンの顏は、暑い日に今一走りで水のなかへもんどり打つて飛び込まうと斷けて居る人の顏に見られるやうな集中した嬉しさうな決心の樣子を表はして居た。ドンヨリした眠むさうな眼付や、深い考を裝つて居るやうな容態は、無くなつた。整然とした擧作には尙且前と變ら無い同なじ落着が有つたけれども、圓い、酷しい、鷲のやうな眼が、特に何物を見て居るといふのでは無いらしかつたが前の方を大得意なそして少し侮蔑した風で見て居た。

聯隊長は、今の位地は非常に危險だからといふので、後へ退くやうにと、公爵バグラアチオンを熱心に諫めた。『お願です、閣下、何卒』と、彼は云ひ〳〵、加勢を求めやうと司令部附の將校を見た、が、司令部附

の將校は何も云はずに彼の方へ背中を向けて了まつた。

『一寸、御覽なさい、閣下』と、聯隊長は、自分たちの周圍に間斷無しに、ヒユウ〳〵、シユツ〳〵、歌つて居た銃彈にバグラアチオンの注意を促がした。聯隊長は、大工が、斧を手に取り上げた紳士に云ふやうな諫言と懇願の調子で云つた。『私どもは慣れてますから宜いんですが、旦那は指に豆が出來ますから』。彼はその銃彈は自分を殺す氣遣ひは無いかのやうに、物云つた、そして、彼の半ば閉ぶつた眼が、その言語に尙一層說得的の効果を加へた。

參謀は、聯隊長の後に隨いて諫めた、が、バグラアチオンは、二人に何の返答も爲無かつた。彼は唯だ、發砲を止めて、援兵の二大隊の入れるやうな餘地を造くれといふ命令を出した。丁度彼がさう云つて居る最中に、凹地を蓋つて居た烟の雲が、見え無い手で挂げられたやうに擧がり、右から左へと、吹き起つた風で拂はれた、そして眞向ふの丘が、それを横ぎつて動いて居る佛蘭西軍と一緒に見えて來た。あらゆる眼は、自然に、自分たちへと下り進みながら、地面の高低を越えて曲がり屈つて來る佛蘭西の縱隊の上に見据ゑられた。最早、人々は、兵卒の毛皮の帽子を見ることが能きた、兵卒と將校を識別ることが能きた。竿をハタハタ打つ旗を見ることが能きた。

『立派な隊形で進んで來るなァ』と、バグラアチオンの幕僚の裡で誰かが云つた。

隊の先頭は最早凹地へと浸るやうに下りて居た。それでは、戰鬪は坂の此方側で始まるのだらう。……

前に戰鬪に加はつた聯隊の殘部は、急いで集合して、右へ引き退いた、第六獵兵の二大隊が、彼等の前に他の隊からの落伍者を追つ立てながら、隊伍整々と進んで來た、彼等は未だバグラアチオンの所までは來無かつた。が、重々しい足踏みの音が、歩調を合はせた全隊から聞くことが能きた。バグラアチオンに一番近

かつた左翼に、顏に間の拔けた、嬉しさうな表情を持つた圓い、勿體振つた顏付の大尉が進んで居た。それは、ツウシンの後から假小舍を跳び出したその同なじ步兵將校であつた。彼は、その刹那は、自分が司令官の前を見事な態で進んで居るといふことの外、何も考へて居無いらしかつた。

觀兵式の時のやうな得意で、彼は、空にブラ〳〵して居るかのやうに、何の苦も無く身體を眞直にして、丈夫さうな筋張つた脚で、跳あがるやうに、進んだ、そして、その苦も無ささうな彈力のあるやうな容態が、彼と步調を合せて居る兵卒の重い足踏みと著るしい反照を爲して居た。

彼は、脚の側へ、拔いた、細身の劍（武器といはうより寧ろ玩具のやうな、小さい反のある軍刀）を垂下けて居た、今司令官へ、今後へと、周圍を見廻しながら、步調を少しも崩さずに、その力强い全身を振り向けた。心の全力が、能きる限り良い態で司令官の側を進まうとすることに、向けられて居たかのやうであつた。で、彼は、さう爲得たと自ら認めたので、喜んで居た『左……左……左……』と、彼は一步隔に、心の裡で繰り返して居るやうに見えた。そして、背囊と銃の重量で壓し付けられたやうな、それ〴〵な態で悉皆嚴格な顏貌をした兵卒の姿の壁が、兵卒の數百人の一人一人が一步隔に、『左……左……左……』と、心の裡で繰り返して居るかのやうに、悉皆同なじ節調で動いた。

肥つた少佐は、フウ〳〵息を吐き、步を踏み換へながら、行方の灌木を廻つた。落伍した兵卒は、自分の失策に忙てふためいた風で、隊の後を追つて駈けた。空を唸つて來た砲彈は、公爵バグラアチオン一行の頭上を飛び越し、『左……左……』の同なじ節調に合せて、隊列の中へと落ちた。

『隊列を直せ』と、大尉の勢の好い聲が響き渡つた。兵卒どもは、砲彈が落ちた場所に在る何物かの周圍を半圓に爲つて進んだ、そして、下士官の、年老つた騎兵は、死人の傍に寸時と殘つて居たが、直ぐ列に追

ひ付き、ヒヨイと一跳して步を踏み換へて、步調を合し、そして、周圍を腹立しさうに見た。『左……左……左……』が、物凄い沈默と、地面を踏む單調な足音とから、反響するやうに見えた。

『萬歲、若者たち』と、公爵バグラアチオンが云つた。

『閣……下、下、下』が、隊列ぢうで響き渡つた。左を進んで居た無愛嬌な顏貌の兵卒が、叫びながら、

『それは、云はれ無くつても此方で知つてる』といふやうな表情で、バグラアチオンに眼を向けた。今一人は、口を廣く開いて、傍目も振らず叫んだ、そして、自分の注意を外れさしてはならぬと虞れるかのやうに、進んだ。

止まつて、背囊を下ろせといふ命令が出た。

バグラアチオンは、彼の傍を進んだ兵の列の横を乘り越した、そして、其所で、馬から下りた。手綱を哥薩克兵に與へ、外套を脫いで、それも渡し、脚を踏み廣げ、帽子の冠りやうを直した。將校だちを先頭に持つた佛蘭西軍の隊は、丘の麓に見えて來た。

『神の助を以て』と、バグラアチオンが、斷乎とした調子の好い聲で叫んだ。彼は、直ぐ先頭に振り向いた、そして、手を少しブラ〳〵させながら、何時も馬の上にばかり居る人の無態な步き慣くさうな態容で、凹凸の地面の上を前へと步いた。公爵アンドレエーは、何か見え無い力が自分を前へ引張つて居るのを感じた、そして、非常に嬉しい感覺を持つた。

「これは、チエールが、「露西亞人は勇敢に行動した、そして、戰爭では珍らしいことに、步兵の兩隊が、互に接觸するまでは一步も逡巡がすに、決然として雙方より同時に進擊した」と、云つて居る攻擊なのだ。それから、ナポレオンはセント・ヘレナで、「露西亞軍の大隊のうちには、猛勇を示したものがあつた」と云つた——原著者註」

佛蘭西軍は近かつた。バグラアチオンの傍を歩いて居た公爵アンドレエーは最早、佛蘭西人の懸章や、赤い肩章は元より、その顏さへ瞭然と識別ることが能きた。(彼は、灌木に縋りながら艱々と丘を登ぼつて來る、ヘッス靴を穿いた、脚の彎つた年老つた佛蘭西の將校を瞭乎と見た)。

公爵バグラアチオンは、それから上何の命令も出さ無いで、依然、默まつたまゝで、隊列の先頭に立つて進んだ。不意に、佛蘭西軍の裡で、一發の銃聲が起り、續いて、第二、第三と……そして、烟が立ち、銃聲が敵の散開した隊形ぢうで響き渡つた。わが兵が數人倒れた、非常に氣を付けて、得意さうに進んで居た彼の圓顏の將校もそのなかであつた。が、第一發のその途端に、バグラアチオンは見返つて『萬歲』と、叫んだ。

『ばんざ……あ……あ……い』が、引張つた哮叫になつて、わが隊列ぢうに響き渡つた、そして、公爵を追ひ越し、又相互に追ひ越し合ひ、隊伍を亂し、けれども、熱心な大喜びの群集になつて、わが兵は、敗走した佛蘭西軍の後を麓へと追つ駈けた。

《十九》

第六獵兵の進擊は、右翼の退却を掩護した。中央では、ツウシンの忘れられた砲兵が、シューングラアベンで火事を起させ、佛蘭西軍の進擊を牽制することに成功した。佛蘭西軍は、風に煽られて廣がらうとする火事を消しにと止まつた、そして、これが露西亞軍に退却の間隙を與へた。谷の彼方への中央の退却は忙だしく、騷しかつた、けれども、各兵は別々になつて混亂は爲無かつた。

が、アゾフスキイ及びボドオルスキイ歩兵と、パアヴログラアド驃騎兵で成り立つて居た左翼は、ランヌ

の率ゐた佛蘭西軍の精英に前面から攻擊され、包圍されて、潰亂に陷つた。バグラアチオンは、直ぐに退却しろといふ命令を持たせてジエルコフを、左翼の司令官の將官の所へ、遣つた。

ジエルコフは、帽子に手を翳したまゝで、勢好く馬を出して、駈け去つた。が、バグラアチオンの眼界の外へ乘り出すや否や、勇氣を失つて了まつた。何うにも抑へ切れ無い狼狽に襲はれて、危險の有る場所へ行く氣になれ無かつた。

左翼の隊の方へと少しの間乘つて行つてから、銃聲の聞えて居る場所へとは乘り出さずに、將官や聯隊長が居る氣遣の無い方角へ行つて、二人を探がした、だから、使命は果され無かつたのだ。

左翼の司令權は、先任の權で、ドロオホフが勤めて居た聯隊——ブラウナウの前面でクツウゾフの檢閲を受けた聯隊——の將官に屬して居た。が、最左翼の司令權は、ロストオフが勤めて居たパアヴログラアド驃騎兵の聯隊長の手に委ねられて居た。で、其所に誤解が起つた。兩方の司令官は相互に甚く憤つて了まつて、戰鬪が右翼では最早餘程前から始まつて居て、佛蘭西軍が最早左翼へ進擊を始めた時分にも、相互に相手を困らせるのを專一の目的にした論判ばかり爲て居た。

兩聯隊は——騎兵も歩兵も共に——少しも戰鬪準備を爲て居無かつた。兵卒から將官に至るまで、誰あつて戰鬪を豫期し無かつた、で、衆皆平和な仕事に平氣で取り掛かつて居た——騎兵の方では馬に秣料を遣り、歩兵の方では森で木を拾つて居た。

『ぢやが、彼奴が右に左長官ぢや』と、眞赤になつて、驃騎兵の獨逸人の聯隊長は、乘り付けて來た副官に向いて云つた。『奴の勝手に爲るが宜えんぢや。我輩は自分の驃騎兵を犧牲にすることは能けん。喇叭手。退却の命令を吹け』

が、事態は急迫して來つゝあつた。砲と銃の音が一整に右翼や中央の方で轟いて、ランヌの狙擊兵の佛蘭西の軍服姿が水車溜を越えて、銃の彈着距離の殆ど以内の此方側で陣形を整へて居る所であつた。

少兵の將官は、ブル〳〵震へる歩みで、自分の馬へ歩いて行つて、それに乘り、グッと眞直に背高く身體を伸して、パアヴログラアドの聯隊長へと乘り付けた。二人の將校は、愛想の好い目禮で出逢つて、相互の憤激を胸の裡に隱して居た。

『今一度願ひますぢや、聯隊長』と、將官は云つて、『森の裡へ我輩の部下を半分捨て去る譯にや行かんです。お願ひぢや、眞にお願ひしますぢや』と、彼は、繰り返し、『陣地を占めて、突擊の準備を爲てくださらんかい』

『でも、私は、貴下が貴下の職務で無いことに口をお入れにならんやうに願ひますわい』と、聯隊長は、熱しかけながら、答へた。『貴下が若し騎兵將校なりや……』

『我輩は騎兵將校ぢや無い、聯隊長、が、我輩は露西亞の將官ぢや、そいで、貴下がこの事實を御承知なりや……』

『いや、それは十分承知であります、閣下』と、聯隊長は馬を動かし、顏が紫になつて、唐突に叫んだ。『前線へ來てご覽にならば、この位地の保てんことは直ぐお解りぢやらうと思ふのであります。私は、貴下を滿足させる爲ばかりに、わが聯隊を殺戮することは厭であります』

『途方も無いことを云うては不可、聯隊長。我輩は自分の滿足などを眼中には置いとらん、此樣いふことは聞捨には能けん』

聯隊長の言語を自分の勇氣に對する挑言だと取つて、將官は胸を四角に張つて、二人の異論は敵の砲火の

下へ出さへすれば其所で何うしても殘らず落着するといふのであつたかのやうに顰つ面で聯隊長と列んで前線へと乘り出た。二人は前線に達した、五六の銃彈が傍を飛んだ、二人は一語も云はずに、靜乎と立つて居た、前線を見に來るのは無益な手數であつた、二人が前に立つて居た所から見ても、灌木の叢が多いのと、地勢が險しく凸凹して居るのとで、騎兵の働け無いことゝ、佛蘭西軍が左翼を包圍して居たことは明瞭であつたのだ。

將官と聯隊長は、蹴合はうとする二羽の雄鷄のやうに無効に臆病の徵候を相手の上に索めながら、荒々しく、意味あり氣に、睨み合つた。兩方とも、逡巡ずに試驗に堪へた。云ふべきことは何にも無く、相互に相手に、孰方が先に最初に砲火の下を退いたと云ひ得る論據を與へ度く無かつたのだから、二人は、相互に相手の元氣を試驗しながら、何時までも其所に立つて居るのであつたらう、が、その時、二人の殆ど直ぐ後の森の裡で、銃の遽然しい音と、混雜した叫聲が聞えた。

佛蘭西軍が、森で木を拾つて居る兵卒を攻擊して居た。驃騎兵は最早退け無かつた。歩兵とてもその通りであつた。彼等は、左方へ退くことから、佛蘭西軍の戰線で遮斷された。最早、地形が不利でも何でも、自分達の血路を斬り開く爲めに進擊する外は無かつた。

少尉としてロストオフが加はつて居た中隊の驃騎兵は、馬に乘るか乘ら無いかに、敵に向かつて來られたのであつた。再、エンス橋の時のやうに、中隊と敵との間には誰も居無かつた、で、雙方の中間に、死者から生者を分つ線のやうに、不定と恐怖のその物凄い境界線が横たはつて居た。兵卒は誰も彼も、その線の有るのを知つて居た、で、自分等がそれを越えるか何うか、又何いふ風にそれを越えるか、といふ問題が、衆皆の胸に昂奮を滿たした。

聯隊長は、前線へ乘り付けて、將校たちの問に、怒つた返答を爲た、そして、我武者らに自分の權利を主張する人のやうな態で、何か命令を出した。誰も瞭乎とは何も云は無かつた、が、突擊の喞は薄々ながら中隊ぢうへ見る〳〵行き渡つた。隊形を整へろといふ號令が響き渡つた。それから、鞘から拔かれる劍の音が爲た。が、未だ誰も動か無かつた。左翼の隊は、歩兵も驃騎兵も共に、自分等の司令官たちさへ各自何を爲べきか、知ら無いで居たことを感じた、司令官たちの考の不定が兵卒に傳染した。

『急げ、急いで呉れさへすれば』と、ロストオフは思つて、戰友たちから度々聞かされて居た突擊の愉快を味ふ刹那が到底やつて來たことを感じた。

『神の助を以て、若者たち』と、デニイソフの聲が響き渡つて、『前へ、早く、駈足』

馬の臀部が先頭で動き始めた。白嘴鴉は手綱を引いて、獨で駈け出した。

ロストオフは、右に、自分の驃騎兵の最先頭を見た、そして、尙覆然先に、黑い線を見ることが能きた、それは瞭乎と識別られ無かつたが、敵であらうと思つた。銃聲も聞えた、が、遠くの方であつた。

『もつと速く』と、號令の言語が鳴り渡つた。ロストオフは、駈足になつた時の白嘴鴉の臀部の低くなるのを感じた、彼は疾驅の愉快が加はつて來るのを感じた、そして、だん〳〵心が輕快に爲つて行つた。彼は自分の彼方に唯だ一本だけの樹のあるのに氣が付いた。樹は最初は自分の前面、甚く凄く見えたその境土の眞中に有つた。が、最早彼等はそれを越えた、そして、凄いことは何にも起ら無かつた、反つて、彼は次第にだん〳〵快活に、勢込んで來るのを感じた。

『なに、斬らずに置くものか』と、ロストオフは軍刀の柄を緊然と攫んで、思つた。

『萬……ざ……あ……い……』と、聲々が怒號つた。

『さア、誰でも來て見ろ』と、白嘴鴉に拍車を當てゝ、ロストオフは思つた、そして、他の者を追ひ越しながら、馬を全速力で駈けさした。最早敵は前面で見えだした。唐突に何物かが、廣い掃木のやうに、中隊ぢうを拂つた。ロストオフは一刀斬らうと思つて、軍刀を揚げた、が、その途端に、兵卒のニキテエンカが、前へ駈け出て、彼の側を去つた、そして、ロストオフは、夢の裡で、何か不可思議の迅速で、前へ擔ぴ去られて居るかのやうに感じた、が、彼は同なじ場所に殘つて居た。驃騎兵のバンダアルチュックが、後から彼の上へ觸るまでに駈けて來て、彼を腹立しさうに見た。バンダアルチュックの馬は側へ跳び退いた、そして、彼は駈け去つた。

『何う爲たんだらう？ 俺は動いて居無いな？ 俺は倒れたんだ、殺されたんだ……』と、ロストオフはホンの一刹那に斯う自ら問ひ、自ら答へた。彼は、野の眞中に一人ぽつちであつた。動いて行く馬と、驃騎兵の背部に引き代へて、彼は、周圍に動か無い地面と畑を見た。彼の下には暖い血があつた。

『いや、負傷したんだ、馬が殺されたんだ』。白嘴鴉は、前脚で起きあがらうとした、が、再ドタリと倒れて、自分の脚の下へ乘者の脚を壓し潰ぶした。血が馬の頭から流れて居た。馬は挽いた、が、起きられ無かつた。ロストオフは、起きやうと爲た、けれども、倒れた。佩嚢が鞍に搦まつて居たのだ。何處にわが軍が居るのか、何處に佛蘭西軍が居るのか、少しも分から無かつた。四邊には、誰一人居無かつた。

脚を拔いて、彼は起ちあがつた。

『兩軍を彼樣に劃然と別つて居たあの線は、何方の側、何處に今在るんだらう？』と、彼は自問したが、それに答へることは能き無かつた。『俺は、何か飛んでも無いことに爲つたんぢやァ無からうか。斯樣なことがあるものか知ら、斯樣な時にやァ一體何う爲るものだらう？』、彼は起ちあがりながら、斯う思ひ惑つた。

が、その途端に、何か餘計な物が、萎えた左の腕から吊らさがつて居るかのやうに感じた。手首は腕に附て居無いものゝやうな氣が爲た。彼は、手を見て、血が出て居るかと凝乎と査べた。『や、誰か來たぞ』と、自分の方へと駈けて來る幾人かの人を見て、彼は嬉しく思つた。『俺を助けて呉れるだらう』

その人々の先頭に、ヘンなシヤコ帽の、青い上衣の、日に燒けた赤黑い顏の鈎鼻の男が一人駈けて居た。それから、二人來、その又後から、多勢駈けて來た。

そのうちの一人が、露西亞語では無い何かヘンな言語を云つた。

同なじシヤコ帽の同なじ姿の人々の間に、少し後の方に露西亞の驃騎兵が立つて居た。それは、腕を扼へられて居て、その後に、彼の馬も引かれて居た。

『わが軍の誰かが捕虜になつたんだな……左樣だ。眞個に俺も捕虜に爲るのか知ら？一體何ういふ連中なんだらう』。ロストオフは自分の眼を信ずることが能き無いで、未だ思ひ惑つて居た。

『佛蘭西人なのかなア？』

彼は、近づいて來る佛蘭西人を見詰めた、が、ホンの數秒前には、さういふ佛蘭西人に向かつて行つて、切り倒して遣らうと焦燥つて居たのに、今は、彼等の自分に左樣近くあるのが、自分の眼で現在見ながら眞在だとは思ふことの能き無いまでに、恐ろしかつた。

『あれは何ういふ人間なんだらう？。何を目掛けて駈けて居るんだらう？俺を目掛けてなのか知ら？俺の所へと駈けて來るのかなア？。で、何故なんだらう？。俺を殺しにか？。誰からも好かれるこの俺をなのか？』

彼は、母親の自分に對する愛、家族や朋友の自分に對する愛を憶ひ起した、で、彼を殺さうとする敵の了簡が全く有るまじきことだと思はれた。

『でも、奴等は俺さへ殺すかも知れ無い』。十秒以上も、彼はその場所から動かず、自分の位地に氣が付き得ずに、立つて居た。

眞先の鈎鼻の佛蘭西人は、その顏の表情が識別られる程までに近く爲つて來た。で、銃劍の尖を低くして、輕々と、息を次がずに、自分の方へと驅けて來る人の昂奮した見慣れぬ顏容が、ロストオフには實に凄かつた。彼は、短銃を攫んで、それを擊ちは爲ずに、佛蘭西人に擲き付け、一生懸命で、雜木のある方へと駈け出した。エンス橋へと動いた時のやうな疑念と煩悶の感で、彼は今駈けたのでは無く、犬から逃げる野兎の感であつたのだ。自分の若い幸福な生命を失なつてはといふ危虞の單一な感情が彼の全身を領した。遊戯を爲る時に何時も駈けたのと同なじやうな激迅で幾つもの生籬を迅速に飛び越え、跳ね越え、時々蒼くなつた人の好ささうな若い顏を後へ振り向け振り向け、野の上を飛んで行つた、恐怖の惡寒が脊骨を走せ下つた。

『いや、見無い方が宜い』と、彼は思つた、が、雜木の叢へ近づいた時に、今一度見返つた。佛蘭西人は追つ掛けるのを止めた、そして、ロストオフが見返つた時は眞先の男は丁度駈足から並足に戻り掛けて居て、後の戰友に聲高く何か叫ばうと振り向く所であつた。ロストオフは止まつた。『何かの間違ひだ』と、彼は思つた。『奴等が俺を殺さうとする筈は無い』。と、同時に左の腕が、何百斤もの重量が吊らさがつて居るかのやうに、恐ろしく重く爲つた。彼は、最早駈けられ無かつた。佛蘭西人も止まつた。そして、覘つた。ロストオフは睨み付けて、頸を縮めた。一彈又一彈、彼の傍をシュウ〳〵と飛んだ、彼は右手で左の手を押へ、最早それ限りの最後の力を出して、雜木の所まで駈けた。雜木の裡には、露西亞の狙擊兵が居た。

《二十》

森の裡で、不意に襲撃された歩兵は逃げ出した、そして、種々な隊が、ゴッチヤに爲つて、隊伍の無い群集に爲つて、退却した。一人の兵卒が狼狽して、『退路を斷られた』といふ――戰爭では恐ろしい、そして無意味な――言語を口へ出した、それで、その言語が、集團全體へ狼狽を傳染さしたのだ。

『包圍された』……『退路を斷られた』……『最早駄目だ』と、彼等は逃げながら叫んだ。

將官は、後衞で銃聲と叫聲を聞くといふと、その刹那に直ぐ、何か恐ろしいことが自分の聯隊に起つたのだと覺つた、そして微少とした失策さへ無しに何十年も勤め來つた模範將校たる自分が、怠慢若くは軍紀の弛廢の爲めに上官から責められるかも知れぬといふ考想が、胸に甚く應へたので、直ぐ不從順な騎兵の聯隊長のことも、將官としての自分の威儀も忘れ、危險や自衞の本能さへ全然忘れて了まつて、鞍の前穹を攫み、馬に拍車を入れて、銃彈の眞の霰のやうな裡を、宜い案配に擊たれも爲ずに、聯隊の方へと、駈け去つた。彼は、何ういふ不可事に爲つて居るかを見出し、若し失策が自分から起つたものなら、その失策が何であらうとも、他を助けて、それを直し、それで、何の譴責も受け無かつた二十二年間の模範的勤務の今日、この失策の責を負ふことに爲らぬやうに爲度いといふ、唯だそれのみの希求に胸を領されて居た。

佛蘭西軍の間を巧く駈け拔けて、彼は森の後の野に達した、その森からは、わが兵が、號令の言語を耳にも入れずに、麓へと駈け下りて居たのだ。

戰の運命を決する精神上の逡巡のその瞬時が來て居た。兵卒の斯ういふ潰亂した群集が、その司令官の聲を聞くだらうか、或は、司令官を見返つて、尙先きへと逃げるだらうか？。

これまでは、兵卒に取つて恐くつて堪まら無かつた司令官の絶望的な怒號り聲も何のその、同なじ人の顏とは何うしても思はれぬやうに歪み攣つた、憤然となつた、司令官の紫の顏も何のその、振り舞す劍も何

のその、兵卒は、號令の言語などは耳にも入れず、空へ向けて銃を放ち、相互に談話を爲ながら、依然逃げて行つた。戰の運命を決する精神上の衡秤は、確に、狼狽の方へ傾き掛つて居た。

將官は、大聲を出したのと、硝烟の爲めとで、息が塞つて、絶望して唯だ立つて居た。最早全く駄目かと見えた。

が、その途端に、わが兵に向つて進擊して居た佛蘭西軍が、不意に、何故とも知れず、逃げ出して、森の緣には最早見え無くなつた、そして、露西亞の狙擊兵が森の裡に現はれた。これは、ティモオフィンの隊で、この隊ばかりが唯だ一つ森の裡で隊伍を亂さずに居たのだ、そして、森の陰の堀に埋伏して居て、不意に佛蘭西軍を攻擊したのだ。ティモオフィンが佛蘭西軍に突進した必死の怒號り聲や、手に劍を持つたばかりで敵中に飛び込んだ我武者らの醉拂ひの勢が、凄まじかつたので、佛蘭西兵は武器を擲り出して、逃げ出し、途中で踏み止まつて盛り返さずに、その儘潰走して了まつたのであつた。

ティモオフィンの傍を駈けたドロオホフは、接戰で佛蘭西の兵卒を一人殺ろし、敵の將校の頸筋を眞先に掴んで捕虜に爲た。逃げて居た露西亞兵は歸つて來た、各大隊が一緒に纏められた、それで、左翼の兵力を將に兩斷する所であつた佛蘭西軍は暫時阻ひ止められた。遊擊隊が本隊に合する間もあつた、逃げた兵は止められた。

將官は、少佐エコノオモフと、橋の所に立つて、傍を退却して行く諸隊を觀て居た、すると、兵卒が一人、將官の側へ駈け寄つて、鐙を捉へて、殆どそれに吊らさがるやうに爲た。その兵卒は、青い、地の細かい布の外套を着て居て、背嚢も無く、軍帽も無く、頭は繃帶し、肩から佛蘭西の彈筐を吊げて居た。手には、將校の劍を持つて居た。顏は蒼かつた、碧い眼が、將官の顏を無遠慮に見て居た、が、口は微笑んで居た。將

官は。少佐エコノオモフに命令を與へて居る最中であつたけれども、この兵卒には氣が付かざるを得無かつた。

『閣下、此に戰利品が二つあります』と、佛蘭西の劍と彈筐とを指して、ドロオホフが云つた。『私は私の手で將校を捕虜に爲ました。私は隊を止めました』

ドロオホフは、疲れて息苦しかつた。彼はボツ切れに云つた。『隊中の者が證人です。何卒私のことを御記憶を願ひます。閣下』

『感心だ、感心だ』と、將官が云つた、そして、少佐エコノオモフに振り向いた。が、ドロオホフは去か無かつた、彼は繃帶を解いた、そして、頭で干固まつて居た血を見せた。

『銃劍の傷です、私は戰線を去りませんでした。私のことを記憶して居てください、閣下』

ツウシンの砲兵は忘れられて居た、で、公爵バグラアチオンが、中央で未だ砲擊の音が爲るのを聞て、當番の參謀を、その後から公爵アンドレエーを、砲兵に大急ぎで退却しろと命令する爲めに、差遣したのは、やつと戰鬪の全くの終頃のことであつた。

掩護の爲めに、ツウシンの砲の傍に置いてあつた兵は、誰だかの命令で戰鬪の眞中頃に退却して了つた。が、砲兵陣地は依然砲擊を續づけた、そして、それが佛蘭西兵に奪られ無かつた譯は、敵は、掩護の無い唯つた四門の砲で、左樣な向ふ見ずの砲擊を續けて居やうとは全く思ひも掛け無かつたからであつたのだ。佛蘭西軍は、反つて、その砲兵陣地の手強い行動から見て、露西亞の主な兵力が其所の中央に集中されて居るのだと思つた、で、二度その地點へ突貫しやうと爲たのだが、二度とも、その高地に孤立して居た四門の砲

から、葡萄彈を浴びせ掛けられて、擊退された。

公爵バグラアチオンが去つてから直き後で、ツウシンはシューングラアベンで火事を起させ得た。

『見ろ、奴等の顚倒つてる拙態を。燃えだしたぞ。盛な烟ぢやァ無えか。巧く行つたぞ。一等一等。烟。烟』と、元氣が恢復して、砲兵どもが叫んだ。

砲は殘らず、命令を俟たずに、火事の方へと覘はれた。兵卒は、相互に勵まし合ふかのやうに、一整射擊の度毎に、叫んだ、『萬歲。大分巧えぞ。やつゝけたい。……一等だ』

火事は、風に煽られて、見る〳〵廣がつた。村を越えて進み出て居た佛蘭西兵の諸隊は村へと戻つて行つた、が、この被害の復讐だとでも云ひさうに、敵は、村の少し右へ十門の砲を据ゑて、其所からツウシンを砲擊し始めた。

村の火事を見ての小兒らしい嬉しさと、佛蘭西兵に對する砲擊の成功に勢ひ付いて居たのとで、わが砲兵は、砲彈が二つ、それから續いて今四つ、自分たちの砲の間へ落ち、その一つが馬を二匹擊ち倒し、今一つが、砲兵の足を擊ち切つて了まふまでは、敵のその陣地には氣が付か無かつた。が、一度昂つた兵の意氣はたじろが無かつた、彼等の昂奮は唯だ方向を變へたのみであつた。馬は、彈藥車の分で補はれ、負傷者は側へ移され、そして、四門の砲が、敵の十門の陣地へと向けられた。

今一人の將校、ツウシンの戰友は、戰の始めに殺された、そして、一時間後には、その陣地の四十の砲兵のうちで、十七人が負傷した、が、衆皆依然何時までも陽氣で熱心であつた。二度、彼等は、自分たちの直ぐ下に佛蘭西兵の現はれたのに氣が付いた、で、それに葡萄彈の一整射擊を浴びせ掛けた。

小さい男は、弱さうな無態な擧作で、『その一發で眞個にこれつ切り今一烟管』と、烟管のツルウボチカと

いふのを、ツリイボチカと云つて、始中終從卒に烟管を充めさせ、それから火花々散らかしながら、前線へ駈け出、駈け出して、小さい手を翳して、佛蘭西軍を見た。

『奴等を打つ崩づせ、若者たち』と、彼は始終云つて居た、そして、自ら砲の車輪を掴み、螺旋を外づした。烟の裡で、一發擊たれる度毎に彼に戰慄を爲せた砲の絶えざる唸りに耳を聾されながら、ツウシンは短い烟管を決して口から離さずに、一つの砲から他の砲へと駈け廻つた。或る時は、覘を定め、やがて、出て居る砲彈を勘定し、それから、死んだり、傷いたりした馬を變へることや、馬具を解くことを指揮し、そして、始終、弱い、黃色い、躊躇する聲で叫んだ。彼の顏はだん〳〵熱心になつて行つた。唯だ、兵卒が殺されたり傷いたりした時ばかり、彼は額を顰めて、死人の方へ背部を向けて、何時も傷者や、死人を運ぶのに遲なはる兵卒たちを腹立たしく怒號り付けた。

兵卒は、大抵、立派な恰幅の男であつた、(彼等は砲兵の常として、彼等の將校よりは頭二つ分だけも背高く、胸も倍の廣さであつた)、が、衆皆で、困まつた位地に立つた小兒等のやうに、自分たちの司令將校を賴みに爲た、で、彼等が將校の顏の面で見る表情が、大抵その儘に彼等自身の顏の面に寫つて出た。

恐ろしいどよみや、物音や、注意と敏速の必要などの爲めに、ツウシンは、恐怖の不愉快な感覺は少しも持た無かつた、そして、自分が死ぬるとか、重傷を負ふかも知れぬとかいふやうな考想は全然頭の裡には入つて來無かつた。反つて、彼はだん〳〵快活に感じた。彼には、初めて敵を見て、最初の一發を放つた時は、ズツト長い〳〵前、多分昨日でゞもあるやうに思はれ、彼が今立つて居る地上のその點は、彼には、もう昔から慣れ切つた居心の好い場所のやうな氣が爲た。彼は、有らゆることを考へ、有らゆることを見計らひ、最良の將校が彼の位地に於て爲し得るやうに何ごとをも爲て居ながら、彼は、熱病の夢中か、醉拂の醉狂に

似たやうな心持であつたのだ。

四邊での自分の方の砲の耳を聾する音や、敵の破裂彈のヒユウといふ音とドンと落ちる響や砲の周圍を駈け廻はつて居る汗みづくになつた上氣した顏の砲兵の姿や、人と馬の血みどろになつた光景や、向ふ側の敵からの烟のパツと揚がるの（その烟の後からは、何時も、砲彈が直ぐ續いて飛んで來て、地面か、人か、馬か、砲を擊つのであつたが）など——斯ういふ物が、皆一纏めになつて、ツウシンの爲めには、一つの奇異な世界を組み立て、その世界の裡で、彼はそこ暫時は、快樂を覺えて居た。敵の砲は、彼の氣では、砲では無くつて、見え無い烟草を飲む者が時々烟を吹かす烟管であつたのだ。

『再吹かし出しやアがる』と、ツウシンは、烟の雲が麓へと捲いて行き、塊になつて、風で左方へ吹き寄せられたのを見て、自分に向かつて呟やいた。

『さア、貴樣の彈だ——投げ返へすぞ』

『何ですか、隊長』と、傍に立つて居て、ツウシンが何か呟やくのを聞いた砲兵が尋ねた。

『何でも無い、破裂彈……』と彼は答へた。

『さア、彼奴へ、マツヴィエーヴナ』と、彼は獨語を云つた。マツヴィエーヴナ——マシユウの娘——といふのは、最端に立つて居た舊式の型の大きい砲に、彼が、氣紛れに付けた名であつた。

佛蘭西兵は、砲の周圍に集まる蟻のやうに見えた。

二番砲の第一砲手の、奇麗な酒好きの兵卒は、ツウシンの夢の世界では『伯父さん』——ディヤディヤ——といはれて居た、彼は、他の者の方より、その男の方を、一番度々顧みて、その有らゆる身振りを喜んで見た。麓での銃の——次第に止んだり、又急に激しくなつて來る——音は、ツウシンには、何か動物の呼吸の高ま

りのやうに思はれた。彼はさういふ音の滿干を凝乎と聞き澄した。

『あゝ、彼奴は又今一息吐いてやがる』と、彼は自分自身に向いて云つた。

彼は、自分を、兩手で佛蘭西兵に砲彈をドン〳〵投げ付けて居る非常な身長の巨人のやうに想像したのであつた。

『さア、マツヴィエーヴナ、母親さん、俺等の爲めに働いて呉れ』と、彼は云つて、砲を離れやうとして居た、途端に、聞き慣れ無い聲が、頭の上で呼んだ、——

『大尉ツウシン。大尉』

ツウシンは愕然として振り向いた。それは、グルンテで屋臺店から彼を追ひ出した同じ參謀であつた。彼は息だわしい聲でツウシンに叫んで居た。

『おい、君は正氣かい？。二度退却の命令が來とるぢや無いか、而るに、君は……』

『や、何だつて奴等は俺にばかり突つ掛かるんだらう？』……と、ツウシンは、思ひ惑つて、上官をオヅオヅと見た。

『私は……何……』と、彼は、帽の廂へ二本指を着けて、云ひ始めた。『私……』

が、參謀は、云はうと思つたことを悉皆云ひ切ら無かつた。彼の傍を飛んだ砲彈が、彼を馬の上に平伏さした。彼は言語を止めた、が、やがて、何か今少し云はうとした途端に、今一つの砲彈が彼の言語を止めた。彼は、馬の頭を引廻らして、駈け去つた。

『退却だ。衆皆退却するんだ』と、彼は遠方から叫んだ。

兵卒は哄と笑つた。一分經つた位で、副官が同なじ使命を帶びて來た。

これは、公爵アンドレエーであつた。ツウシンの砲の据ゑてある場所へ達して、彼が見た最初の物は、馬具を着けた馬の側で斷いて居た脚の折れた馬具を解かれた馬であつた。血がその脚から全然泉のやうに流れ出て居た。砲車の上には、五六人の死骸が横はつて居た。一發、續いて又一發と、砲彈が、彼が乘り進んだ時に、頭の上を飛んだ、そして、彼は、痙攣的な戰慄が脊骨を走り下るのを感じた。が、怖れて居るなと思ふと直ぐもうそれだけで氣が立つて來た。『怖れて堪まるものか』と、彼は思つた、で、砲の間で、悠然と馬から下りた。彼は使命を傳へた、が、砲の所を去ら無かつた。彼は、止まつて、人々が砲をその座から離し、それを持ち去るのを手傳はうと決心した。死骸を踏み越し、佛蘭西軍からの怖ろしい砲火の下で、彼は、ツウシンに手傳つて砲を運び去る準備を爲た。

『今の先來た將校は來るや否や逃げちまつた』と、一人の砲兵が、公爵アンドレエーに云つた。『貴官とは全然違つてた』

公爵アンドレエーはツウシンと口をきか無かつた。兩方とも、相互に見さへも爲無いやうに思はれた位、忙しかつた。四門のうちで、無傷の二門を砲車に載せて、（破壞された一つの砲と榴砲彈は棄てゝ置いたのだ）、麓へと動いて居た時に、公爵アンドレエーはツウシンの傍へ行つた。

『おい、君、では又』と、公爵アンドレエーは、ツウシンに手を指し出して、云つた。

『左樣なら、君』と、ツウシンは云つて、『懷しい人、左樣なら、君』と、彼は、何故とも知らず不意に出て來た涙を眼に湛へて、云つた。

《二十一》

風は無くなつた、戰場の上へ低くおつ被さつて居た黑い暴風雲は、地平線で、烟硝から出た烟の雲と溶け合つて一緒に爲つた。闇が來た、そして、火事の火光が一か所でます〳〵瞭乎と見えだした。砲聲は緩んだ、が、後衛と、右翼で、銃聲が、だん〳〵近く、だん〳〵烈しく聞えて來た。

砲を輓いたツウシンが、始終負傷者をよけたり、それに追ひ付いたりしながら、戰線を離れて、谷へと下つて行くと、其所で、司令部の連中と行き遭つた、その裡には、參謀も、二度ツウシンの砲兵陣地へと差遣されながら、一度も其所へ達し無かつたジエルコフも居た。彼等は、爭つて、ツウシンに、何うしろとか、何處へ行けとか、いろ〳〵な命令を與へ、ツウシンの行動にさま〳〵に難癖を付けて、批評した。

ツウシンは、何の命令も出さ無かつた、そして、一言云ふ度毎に、何故とも云へ無かつたが、泣き出しさうな氣が爲るので、物を云ふことを恐れて、默まつて、砲兵の馬に乘つて後から隨いて行つた。負傷者は捨てゝ置けといふ命令が出て居たけれども、彼等の多くは、身體を引摺つて隊の後を追つて、砲の上へ乘せて呉れと賴むのであつた。陽氣な歩兵將校――戰の一寸と前にツウシンの假小舍から駈け出した男――は、胃を擊たれて、マツヴィエーヴナの車の上に臥かされて居た。丘の麓で、驃騎兵の顏の蒼い少尉が、片手を抑へながら、ツウシンの傍へ來て、乘せて呉れと賴んだ。

『大尉、何卒。腕を怪我したんですから』と、彼はオヅ〳〵云つた。『何卒。歩け無いんです。何卒』

少尉が乘せて呉れと賴んだのは、それが最初では無くつて、何處でも斷わられたのであることは明瞭であつた。彼はオド〳〵した哀れな聲で賴んだ。『乘せて呉れるやうに言ひ付けてください、何卒』

『乘せてやれ、乘せてやれ』と、ツウシンが云つた。『下へ外套を敷いてやれ、おい、伯父さん』。彼は、自分の氣に入りの砲兵の方に振り向いた。『だが、負傷した將校は何うした？』

『捨てました、死んだんです』と、誰かが答へた。

『手傳つて乘せてやれ。坐りなさい、君、坐りなさい。其處へ外套を敷けよ、アントオノフ』

少尉はロストオフであつた。彼は自分の片手を抑へて居た。顏は蒼く、下顎が熱病の時のやうに震へて居た。人々は、死んだ將校を移したばかりの後のマツヴィエーヴナの上へロストオフを乘せた。下へ敷て呉れた外套には血が着いて居た、ロストオフの乘馬下袴と腕はそれに塗れた。

『何うした、君は負傷かね』と、ツウシンは、ロストオフが坐つて居る砲へと近付いて、云つた。

『いえ、挫いたんです』

『何うして砲身に血が着いてるんだ？』と、ツウシンが尋いた。

『汚したなア、隊長、前の將校なんです』と、砲兵は、上衣の袖で血を拭き取りながら、砲の汚れて居るのを詫びるかのやうに、云つた。

艱然のことで、歩兵の手傳ひを得て、彼等は、砲を丘の上へ引摺りあげ、そして、グンテルスドルフの村へ達して止まつた。最早、眞暗になつて、十歩と離れては兵卒の制服を識別ることが能き無くなつた、そして、銃聲も鎭まり始めた。

全然唐突に、右の極く近くで、又銃聲と叫聲が聞えた。砲彈の火光が闇の裡で見えた。これは佛蘭西軍の最後の攻擊であつた。それは、村の家に埋伏して居た兵に依つて逆へ擊たれた。衆皆再、村から駈け出した、が、ツウシンの砲は動け無かつた、で、砲兵たちも、ツウシンも、それから、少尉も、各自の運命を覺悟して、顏を見合はせた。

兩方の銃聲は鎭まり始めた、そして、勢好く話し合つて居る兵卒が、横町から流れるやうにドン〳〵出

て來た。

『無事か、ペトロフ』と、一人が尋ねた。

『酷くやつ付けてくれたからな、若者たち。最早奴等は手は出さ無えぜ』と、今一人が云つて居た。

『何にも見え無えんだ。奴等ア味方をやりやア爲無かつたかなア。黑闇ぢやア何が見えるもんかな、朋輩。何か飲む物は無えかね』

佛蘭西軍は、それでいよ〳〵擊退されたのであつた。それで、再、眞暗闇のなかを、ツウシンの砲は、話の吃やきを續ける步兵に取り捲かれて、前へと動いた。

暗闇の裡を、彼等は、見え無い暗々たる河のやうに、囁語と談話の吃きと、蹄の音と、車輪の轟きとを以て、何時までも同じ方向へと流れた。

混亂した轟きの裡で、有らゆる音を壓して、夜の闇では何よりも明瞭に、負傷者の唸り聲と叫聲が高く聞えた。彼等の呻聲は、隊を圍んで居る暗闇全體に滿ちて居るやうに見えた。彼等の呻吟と暗闇が一つに溶け合ふやうに見えた。少し經つと、感動の戰慄が、動いて居る群集を貫いた。幕僚を伴れた誰かが、白馬で傍を乘つて、通り過ぎながら、何か云つた。

『何を云つたんだい』……『今われ〳〵は何處へ向いて行つてるんだい』……『止まるのかえ、』……『われわれに禮を云つたのか、何う』、斯ういふ熱心な問が八方で聞えた、そして、全體の集團が後へ押し戻した(先頭が止まつたやうであつた)、で、止まれといふ命令が出たといふ噂が、全隊に行き渡つた。衆皆、居合はせたその場所で、泥濘つた路の上で止まつた。

火が焚かれた、そして、話聲が一層高くなつた。大尉ツウシンは、砲兵に命令を出した後で、少尉の爲め

に野戰病院か醫者かを探がしに兵卒を幾人か出して遣つて、それから、兵卒が路端に焚いた火の傍に坐わつた。

ロストオフも、火の所へ身體を引摺つて行つた。身體ぢうが痛みからの熱と、寒さと、濕氣で慄へて居た。恐ろしく眠ぶかつた、けれども、腕がうづいて、何う身體を据ゑても、樂にならず無い苦しい痛みの爲めに、眠就かれ無かつた。彼は眼を瞑つた、が、直ぐ眼を開けて、眩ぶしく赤く見えた火と、それから、自分の傍に土耳古風に蹲まつて居るツウシンの屈んだ弱々しい姿を見詰めた。ツウシンの大きい、親切な、怜悧さうな眼が、同情と憐憫を以て、彼の上に見据ゑられて居た。彼は、ツウシンが、何うにかして彼を助けやうと一生懸命に志しながら、それが能き無いで居るのを見た。

四方八方で、行つたり、來たり、彼等の周圍に落着たりする步兵の足音や喋べり聲が聞えた。聲、足音、泥濘を踏む馬蹄、彼方此方ではぜる薪などの音が、悉皆一緒に溶け合つて、一つの大きく上がり下がりする音のどよみに爲つた。

最早、それは、前のやうな、暗闇を流れる見え無い河では無くして、波は靜まりながら、暴風雨の後で、まだ攪き亂されて居る暗慘とした海であつた。ロストオフは憮然と見詰めて、自分の前や、周圍に過ぎて行く事を聞き澄ました。

兵卒が一人火の所へ來て、蹲くまつて、火へ手を翳して、顏を背向けた。

『宜いんですか、貴官』と、ツウシンを、尋くやうに見て、云つた。『ねえ、私は隊を見失つたんです、貴官、此所は何處だか分から無いんです。實に恐ろしい』

その兵卒と一緒位に、顏を繃帶した步兵將校が火に近寄つた。彼は、輜重車を通す爲めにホンの少し砲を

側へ動かして呉れぬかとツウシンに賴んだ。その將校の後から、兵卒が二人火へ駈け寄つて來た。二人は烈しく罵り合ひ、打ち合ひ、相互に一つの長靴を引奪らうと骨折つて居た。

『何が恐いもんか。手前が拾つたてえのかい。へえ、感心なものだなア』と、一人が皺嗄れた聲で叫んだ。

それから、血に染まつた襤褸で頸を繃帶した瘠せた顏の蒼い兵卒が近づいた。絶望した聲で、水を呉れと砲兵に賴んだ。

『あゝ、犬のやうに死ぬのかなア』と、彼は云つた。

ツウシンは、水を遣るやうに部下に命じた。次に、機嫌の好い兵卒が駈けて來て、歩兵に眞赤な火種を少し呉れと賴んだ。

『歩兵に火種を少しください。止まつて結構だね、若者たち、火を貸してくだすつて有り難う、今利息をドンと付けて返します』と、云つて、明り渡る火明を、暗闇の彼方へと、持つて行つた。

その次に、四人の兵卒が、外套の裡へ何か重さうな物を入れて持ちながら、通つて行つた。そのうちに一人が躓いた。

『やい、惡魔どもめ、路上へ薪を擲り出しときやアがる』と、一人が口小語を云つた。

『死んぢやつた、持つてつたつて駄目だ』と、そのうちの又一人が云つた。

『來い、衆皆』

で、彼等はその重荷を持つて、暗闇の裡へ隱くれて了まつた。

『疼くかね、えゝ』と、ツウシンは囁語でロストオフに云つた。

『えゝ、疼きます』

『隊長、將官が御用です。此所の田舍家にお居でです』と、砲兵が、ツウシンの傍へ來て云つた。

『直ぐ行く、お前』

ツウシンは、起ちあがつて、外套の釦鈕を掛けて、身體を眞つ直に伸しながら、火から歩み去つた。

砲兵の焚火から遠く無い所に、特に準備された小舍の裡で、公爵バグラアチオンは食事に坐わつて、周圍に集まつた五六人の隊司令官たちと談話を爲て居た。

半分眠ぶつた眼の聯隊長も其所に居て、旨さうに豚の骨を嚙んで居た、それから、露西亞酒と食事で顏をカツと赤くした二十二年間無缺點に勤めた將官も、印になつて居る指輪を箝めた參謀も、誰彼無しにキヨトキヨトと見廻して居るジエルコフも、蒼い顏で、唇を緊然と結んで、眼をキラ〳〵光らせた公爵アンドレエーも居た。

部室の隅に、鹵獲した佛蘭西の軍旗が立つて居た、檢査官が無邪氣な顏容で、旗の地に觸つて見て、當惑したやうな風で頭を振つて居た、これは多分、旗を眞個に面白がつて見て居た爲めか、或は又、腹が空いて居るのに、自分の席は設けられて居無いのだから、他の人々の食事の光景を見るのが辛らかつた爲めかであつたらう。

次の小舍には龍騎兵の手で捕虜にした佛蘭西の聯隊長が居た。わが將校たちは、それを見に集まつて來て居た

公爵バグラアチオンは五六人の司令將校に禮を云ひ、そして、戰と損害の詳報を尋ねた。

ブラウナウで檢閲を受けた聯隊の長の將官は、戰鬪が始まるや否や、森から立ち戻つて、木を伐つて居た兵を呼び集め、それを後へ行かせて、二大隊で突貫を行つて、佛蘭西兵を擊退したのだと、公爵に報告した。

『私は、閣下、第一の大隊が混亂しますや否や、路に立つて、「彼等を遣り過して置いて、銃火を浴びせてやらう」と、斯う思ひましたぢや、そいで、その通り行りましたわい』

將官は、餘程前からさう行り度くつて堪まら無かつた、そして、それを行り得無かつたのが、殘念でなら無かつた、で、餘まりさう思つて居たものだから、今では、實際さういふことが有つたやうに思はれだしたのだ。實際又、さうであつたのでは無からうか。誰だつて、彼樣な混雜のなかでは、有つたことゝ、無かつたことを識別ることが能きるものか。

『で、序に申し上げるでありますが、閣下』と、將官は、ドロオホフがクツウゾフと對談を爲たことゝ、自分自身もその貶黜された將校と會つたことを憶ひ起して、言語を續け、『兵に貶されたドロオホフが、私の目前で、佛蘭西の將校を捕虜にしました上に、尙見事な働をしたのであります』

『私は其所で、閣下、バアヴログラアド驃騎兵の突貫を見ました』と、四邊をキヨトキヨト見ながら、ジエルコフが口を挾れた。自分では、その日、寸毫も驃騎兵を見無かつた、唯だ或る歩兵將校から物語を聞いたばかりであつた。『彼等は敵の方陣を二つまで破りました』

ジエルコフが物を云ひだすと、五六人の將校は、又何か冗談だらうと思つて、何時ものやうに微笑んだ。が、彼が、云つて居ることは、わが軍のその日の榮譽に歸することばかりであるのを認めたので、多くの連中は、ジエルコフの云つて居ることは、實際は、全然根も無い虛言だとは十分見拔いて居ながらも、皆生眞面目な顏容を爲た。公爵バグラアチオンは年取つた聯隊長に振り向いた。

『實に有り難う、諸君、何の兵も勇敢に働いて呉れた――歩兵も、騎兵も、それから、砲兵も。中央で砲二門捨てたのは何うしたのかね』と、誰かを探すやうに見廻はして、彼は尋ねた。(公爵バグラアチオンは、

左翼の砲のことを尋いたのでは無い、その砲は殘らず戰鬪の眞最初に捨てられたことを知つて居たのだ)『君を遣つたと思ふのだが』と、參謀に向いて云つた。

『一門は破壞されたのであります』と、參謀は答へて、『けれども、今一つの方は、說明能きません、私は始終居つて、指揮を爲たのです、で、私が去ら無いうちに……。尤も、甚い光景ではありましたが』と、穩かに云つた。

誰かゞ、大尉ツウシンはこの村で直ぐ傍に居るので、最早呼びに遣つてある、と云つた。

『うん、けれども、君も行つたなア』と、公爵バグラアチオンは、公爵アンドレエーに聲を掛けた。

『えゝ、左樣、われ〳〵殆ど一緒だつたですな』と、ボルコオンスキイに愛嬌深い笑顏を向けて、參謀は云つた。

『生憎貴下にはお目に掛れませんでしたねえ』と、公爵アンドレエーは、冷々と、素氣無く云つた。衆皆默まつて居た。

ツウシンは戶口に現はれて、將官たちの背後をオド〳〵廻はつて入つて來た。人の多勢塞まつた部室のなかを、將官たちの間を廻はつて通りながら、何時ものやうに上官の前ではアタフタして居て、ツウシンは旗竿が眼に入ら無かつたので、それに躓いた。五六人の將校は哄と笑つた。

『砲を捨てたのは何うしたのかね』と、バグラアチオンは澁い顏で尋ねた、これは、大尉に對してといふよりは、笑ひ聲を擧げた將校たち――なかにも、ジエルコフの笑聲が一番高かつた――に對して、嚴づかしい顏を爲たのであつた。怒つた顏の司令官の面前に立つて今始めてツウシンは、砲二門失ひながら、自分は生きて居る罪と恥辱との空恐ろしさを全然覺つた。

餘まりに昂奮して居たので、その刹那まではそれに想ひ到る遑が無かつたのだ。將校たちの笑聲が一層彼をドギマギさせた。彼は、下顎を震はせながら、バグラアチオンの前に立つたきりで、殆んど物が云へ無かつた、——

『分かりません……閣下……兵がありませんでした、閣下』

『君の陣地を掩護して居た大隊から兵を取れたぢやァ無いか』

大隊は一つも居無かつたことは、事實であつたに拘はらず、ツウシンはそれを云は無かつた。それを云つて、他の將校を掛り合ひにしては惡るいと思つたのだ、で、一言も云はずに、度を失なつた小學生が試驗官の顏を見るやうに、凝乎とバグラアチオンの顏を見て居た。

沈默は稍長かつた。公爵バグラアチオンは、嚴しくする積りは少しも無かつたのだが、何にもさし當り云ふことが思ひ付け無かつたらしかつた。他の連中は進んで執り成さうと爲無かつた。公爵アンドレエーは眉の下からツウシンを見て居て、指がイラ〳〵動いて居た。

『閣下』と、公爵アンドレエーは、素氣の無い聲で、沈默を破ぶつて、『大尉ツウシンの砲兵陣地へ行けといふご命令でございました。參つて見ますと、兵と馬の三分の二は死んで居りました、砲二門は破壞され、掩護の兵は何處にも居りませんでした』

公爵バグラアチオンもツウシンも、今は、感情を抑へ〳〵しながら物云つて居るボルコオンスキイを、二人とも同なじやうな態で凝乎と見て居た。

『それで、閣下が私の意見を述べることをお許しくださるならば、私は斯う認めます』と、彼は續けて、『この戰の成功は、何よりも先づ、彼の陣地と大尉ツウシン及びその部下とのお蔭なのです』と、公爵アンドレエーは云つて、直ぐ起ち上がつて、答を俟たずに、食卓から歩み離れた。

公爵バグラアチオンはツウシンを見た、そして、ボルコオンスキイの無遠慮な判斷を信じ無いとは云へ無いが、それかと云つて、全然それを信じることも能き無いらしい態で、頭を下げてツウシンに去つても宜いと云つた。公爵アンドレエーはツウシンの後に隨いて部室を出た。

『有り難う、君、お蔭で難關を切り拔けました』と、ツウシンが彼に云つた。

公爵アンドレエーはツウシンを見た、そして一言も云はずに歩み去つた。公爵アンドレエーは、厭な悲しい心持が爲た、總てのことが自分が待ち望んだものとは全然違つた、何とも云へ無い異樣なものであつた。

『此奴等は何だらう？。何故此奴等は此所に居るんだらう？。何う爲やうといふんだらう？』と、眼の前を始終チラ付いて居る影のやうな形を見ながら、ロストオフが思つた。腕の疼痛はます〳〵苦しく爲つた、眠くつて堪ら無かつた、眞赤な圈が眼の前で踊つた、そして、それ等の聲や、顏の印象と、孤獨の感とが疼痛の辛さと混り合つた。自分を上から重つて壓し潰ぶしたり、自分の血管を扭ぢ曲げたり、自分の挫いた腕や肩の肉を燒いたりするのは、皆さういふ——傷いたのもあり、さうで無いのもある——兵卒なのだ。

さういふ者から逃げて了まはうと思つて、彼は眼を瞑つた。

彼は、寸時トロ〳〵と爲た、が、その短い間に、數限りも無いさま〴〵な物を夢みた。彼は、母親とその白い手を見た、ソオニヤの瘠た肩、ナタアシヤの眼と笑、デニイソフの聲と頰鬚、テリヤアニン、それから、テリヤアニンとボグダアニイチに對する總ての事件を見た。その事件全體が、突つ慳貪な聲のその兵卒と甚くコンガラかつて了まつた、そして、その事件と、この兵卒が、何時も同なじ方向に、甚く痛く、甚く邪見に、彼の腕を引張り、壓し潰し、扭ぢりあげるのであつた。彼は其奴等から逃げやうと骨折つて居た、けれ

ども、其奴等は一秒の間も彼の肩を放さ無い。其奴等が引張りさへし無ければ、疼きも爲ず、何でも無いのだらう、が、其奴等から逃げやうは何うしても無かつた。

彼は、眼を開けた、そして、上を見あげた。暗闇の黑い覆衣が火の光明の上唯つた二三尺の所まで垂れ下がつて居た。光明の裡には落ちて來る雪の小さい片がチラ付いて居た。ツウシンは歸つて來無かつた、醫者も來無かつた。彼は獨であつた、唯一人兵卒が、今、裸で、瘠た黃色い身體を暖めながら、火の彼方側に坐わつて居た。

『誰も世話して呉れ無いなァ』と、ロストオフは思つた。『誰も助けて呉れ無い、誰も氣の毒と思つて呉れ無い。けども、俺でも一度は家に居たんだ、强く、幸福で、人に可愛がられて』

彼は溜息した、そして、溜息と共に、我知らず呻いた。

『痛むかね、えゝ』と、火の前で襯衣を振ひながら、兵卒が尋いた、そして、答を待たずに、『あゝ、今日は隨分澤山な奴等が殺られちやつたなァ——恐ろしい』と、皺嗄れた聲で云ひ添へた。

ロストオフは兵卒の言語を耳に入れ無かつた。火の上に渦卷いて居る雪片を見詰めた、そして、暖な燈火のカン〳〵した自分の家や、暖な毛皮の外套や、速い橇や、健勝な身體や、家族の愛と優しさなどのある露西亞の冬を思ひ遣つた。

『で、何だつて、俺は此樣な所へ來たんだらう?』と、彼は思ひ惑つた。

次の日は、佛蘭西軍は重ねて攻擊し無かつた、そして、バグラアチオン枝隊の殘存して居る分はクツウゾフの軍に合した。

第三章

（一）

公爵ヴァシイリは自分の計策を深く考へて見る性では無かつた。他人に害を及ぼしても自分自身の利益を計らうなどゝは尙更思は無かつた。彼は、世間で成功し、そして、自然とさう爲るやうな習慣を造らへて了つた世間漢に過ぎ無かつたのだ。自分の境遇とか、會つた人とかから起つて來るさま〴〵な計畫や、企圖が始中終胸の裡には出來あがつて居たのだが、そして、さういふことで自分の生活の全利害が出來上がつて居たのだけれども、決してさういふ企圖などを深く考へ測るのでは無かつた。さういふ計畫や、企圖は一つ二つでは無く、一漏に一打もあつて、そのうちには、今思ひ付けて居る最中のもあれば、その目的に達したのもあれば、水の泡に爲つたのもあつた。

彼は、例へば、『彼の男は今顯要な位地に居る、俺は、彼奴に取り入つて置いて、彼奴の手から行つて、何か旨い利益をせしめ無きやァならん』とか、『今ピエールは金持だ、俺は彼奴を旨く誘つて、娘と結婚させ、そして、俺の入用な四千留を借りて遣らう』などゝ、肚で云つたことは一度だつて無い。さうでは無く、顯要な位地の人が彼に會うと、その刹那に、彼の本能が、その人が自分の爲めになることを、彼に知らせる、それで、公爵ヴァシイリとその人と親しく交際ふやうに爲つて、最初の機會に、本能で、前からの企圖無しに、その人の機嫌を取つてます〳〵取り入り、そして、自分の爲て貰らひ度いことを先方へ賴むといふのであつた。

ピエールは莫斯科で待ち構へて居た、公爵ヴァシイリは、彼に、寢殿掛りの職――その時分では、格式上參事院議員と同なじに見られて居た位地――を得て遣つた、そして、その若者に是非彼得堡へ來て、自分の家に逗留しろと勸めた。

別に企圖でといふのでは無かつたらしかつたが、尙且それでも、それが宜いことだといふ逡巡無い確信で以つて、公爵ヴァシイリは、ピエールと自分の娘との結婚を物に爲るのに全力を盡くした。

若し、公爵ヴァシイリが、前以て自分の計策をチヤンと考へ定めて居たのであつたら、自分より身分が高い人にも低い人にも、誰に對してもさうまで率直に擧作ひ、さうまで無雜作に心安く交際ふことは能き無かつたらう。彼自身より顯貴なとか、金持だとかいふ人々が何といふこと無しに、彼の方へ引付けられずには居られ無かつた、そして、彼は、さういふ人々に賴み込まねばならぬとか、賴み込めるとかいふ適切の瞬間を寸分遁さずキチンと捉まへ得る珍らしい本能を持つて居たのだ。

孤獨な無頓着な生活の後で、思ひも掛けず金持になり、伯爵ベズウホフに爲つたピエールは、寢床に居る時の外は何うしても自分自身の身體であり得無い位、人に取り卷かれ、且つ用が多かつた。彼は、書類に署名したり、何ういふ譯だとは明瞭は解からずに役所へ出頭したり、重用人に何か尋ねたり、莫斯科近傍の領地を見に行つたり、前には彼の存在に心付かうと爲る氣も無かつた癖に、今になつては、彼が逢つてやら無ければ怒つて恨むといふ風になつた大勢の人々に逢つたりしなければなら無かつた。

總てさういふ人々、事業家、親類、知人などが悉皆同なじやうに、若い相續者に對しては親しみを持ち、好意を表して居た。彼等は、悉皆ピエールの上品な性質を一も二も無く確信して居るらしかつた。彼は、始終、『貴下のやうな珍らしい親切なご性質で』とか、『貴下の優れた好いお心から見まして』とか、『貴下は

御自身が潔いお心です、伯爵……』とか、『若し彼の人が貴下のやうに物が善く解るのだつたら』とか、まづさういふやうな文句を聞き通しであつた、それだものだから、彼は、終局には、彼自身珍づらしい善い人間であり、珍らしい恰悧な男であるのだと、眞個に信じるやうに爲りだした、これは、心の底では、何時も自分は實際極く人の好い、極く恰悧な人間だといふやうな氣が爲て居たので、尙一層左樣爲つたのだ。

前には彼に對して意地惡るくして、敵意を持つて居た人々さへ、今は、優しく、愛情を寄せるやうに爲つた。

これまでは意地の惡るかつた、胴の長い、髮を人形のやうに膏で堅めた、一番年長の公爵孃が、葬式の後で、ピエールの部室へ行つた。

伏目になり、始終眞赤になつて、自分とピエールとの間に誤解が生じて居たのを甚く殘念に思ふことを云ひ、それから、自分の上に今度のやうな打擊が落ちた上は、自分には非常に懷かしく、且つ、これまでさまざまの犧牲を供したこの家に、今二三週間置て貰らふことの許可を請ふ外、何うして吳れと云へる權利は無いと思ふのだと云つた。で、堪らへ兼ねて、さう云ひながら泣いた。

塑像のやうな公爵孃が左樣なに變はつたのを見て如何にも氣の毒になつて、ピエールはその手を摯つて、何故と問はれては云ひやうが無かつたけれども、詫言を云つた。その日から、公爵孃はピエールの爲めに繃の襟卷を編み始めた。そして、彼に對しては、昔とは全然違つた擧作に爲つた。

『僕の爲めにこれを行つて吳れ給へ、君、彼の娘は、右に左、故人のことで、隨分苦勞を爲たもんだからね』と、公爵ヴァシイリは公爵孃の利益の爲めに或る書類に署名して吳れるやうに、ピエールに賴んだ。公爵ヴァシイリは、この三萬留の卽時拂の手形が、象欽の書類挾一件に對する公爵ヴァシイリの關係を喋べる

氣にならせまいとする口留料としては、公爵孃に投げ與へて惜しく無い金高だと思つたのだ。

ピエールは手形に署名した、そして、その時から、公爵孃は尙一層愛嬌深く爲つた。若い方の妹たちも又優しく爲つた、取り分け、これまで往々笑顔でピエールをドギマギさせ、又自分自身もピエールを見るとアタフタした、黑子のある可愛い、一番末の娘が殊に左樣であつた。

ピエールには、誰もが彼を好くのは、如何にも當然のことに思はれた、若し誰もが彼を好か無かつたら、彼には、非常に不自然に思はれたらう、で、彼は、彼の周圍の人々の誠實を信じ無い譯には行か無かつたのだ。その上に、人々が誠實であるか不誠實であるかを疑ふ遑が無かつた。少時でも間暇な時を持た無かつた、そして、何時も穩かな心持の好い醉つたやうな風に感じた。自分は何か大切な公の職務の中心でゞもあるやうに感じ、絕えず人々が何物かを彼から期待して居るのを感じた、若し自分がそれかこれかを爲無かつたら、自分は多くの人々の感情を傷け、當て違を爲せるであらうが、若しそれもこれも、爲て了まへば、それで萬事旨く行つて、期待された通りのことを爲つた譯に爲り、その上、尙その幸な結果が未來に高く聳えて居ることに爲るのだと感じた。

さういふ始の時分、公爵ヴァシィリは、誰よりも好く、ピエールの家事を指圖した、又ピエール自身をも指圖した。伯爵ベズウホフが死ぬると、彼はピエールを自分の手から逃さ無かつた。公爵ヴァシィリは、用が背負ひ切れ無い程あつて、疲れ切つて、ツク〳〵厭になつて居るのだが、要するに、自分の信友の子息で、斯樣な非常な大財產の相續者である斯の賴りの無い若者を最後の場合に捨てゝ、根强い惡計を爲る惡黨どもの喰ひ物になるその運命のまゝに委ねて了まふことは、同情深い心から、何うしても能き無いで居る人の態であつた。

伯爵ベズウホフの死んだ後、莫斯科に逗留して居た五六日の間、彼は自分の所へピエールを招き、或は、自分の方からもピエールの所へ行き、そして、ピエールの爲べきことを、何時も『ねえ、私は用で身動きも能き無い程だが、それでも、全くの慈善心から君のことを斯うして心配して遣るぢやァ無いかね、その上、私が君に云ふことの外には、實際好い策の無いことは、君にも善く解かつて居るだらう』と、云つて居るやうに見える、疲れた、確信のある調子で指圖するのであつた。

『さて、君、いよ〳〵明日發つことに爲やう』と、彼は、或る日、眼を瞑り、自分の肱を指でポン〳〵と叩きながら、そして、そのことは二人の間に最早ズッと前から極まつて居て、それより外には一つも解決の爲やうが無かつたかのやうに云つた。

『明日われ〳〵は發つ、私は君を私の馬車に載せてあげる。私は大に嬉しいね。此所ではわれ〳〵の大切な用は悉皆片付いたのだ。それで、私は、ズッと前に歸へる筈であつた。さァ、私は尙書から此を受け取つた。兼ねて、君の爲めに請願して置いたのだが、君は、外交團へ入れて貰らへたのだ、寢殿掛りを命ぜられたのだよ。さァ、これで、外交部の立身が君の前に開けたのだ』

さういふ言語を云つた倦怠と確信の調子には、少からず動かされたに拘はらず、自分の將來の進退に就ては隨分長いこと考へて居たピエールは、異存を云はうと爲た。が、公爵ヴァシィリは、彼の言語の流を遮ぎることは到底能き無いことを示すやうな長く引張つた濁聲で、その異存のなかへ割り込んだ、さういふのが、說得の最後の方法が入用になつた時に彼が訴へる手段であつたのだ。

『けれども、君、私は私自身の爲めにこれを爲たのだ、私の良心の爲めなのだ、で、私に禮を云ふには決して及ばん。愛せられ過ぎると云つて不平をいふものは、誰も無い、その上、君は自由だ、明日にも辭する

ことが能きるのだ。まア、彼得堡へ行つて行つて見た上に爲給へ。それに、最早右に左、斯ういふ恐ろしい憶ひ出から離れにやアならん時が來て居るのだからね』。公爵ヴァシイリは溜息した。『では、それで全然極まつたといふものだ、ねえ、君。で、私の侍僕を君の馬車に乘らして呉れ給へ。や、左樣だ、既でのこと、忘れる所だつた』と、公爵ヴァシイリは云ひ添へた。『ねえ、君、父親さんと少許した勘定があつたぢやア無いか、私は、リヤザンの領地から幾干か貰らふ譯に爲つて居つたのだが、それは貰らつて置きませう、君は彼樣なものはいらんだらうね。勘定は何れ後のことさ』

公爵ヴァシイリの所謂る『リヤザンの領地からの幾干か』といふのは、農夫が勤務の代りに拂ふ五六千留のことであつた、そして、この額を彼は取つて置くのであつた。

彼得堡でも、ピエールは矢張り莫斯科でのやうに、同なじ愛情と親切の雰圍氣に圍まれた。彼は、公爵ヴァシイリが彼の爲めに得て呉れた位地、寧ろ役名(彼は何にも爲無かつたのだ)を辭しは爲無かつた、そして、知人たちも多く、それに、招待や、交際の務が、無暗に多かつたので、ピエールは、途方に暮れた感や、忙しさや、何時も來たりつゝあつて、決して捕捉されぬ或る將來の善い事の絶間の無い期待などを、莫斯科でよりは一層多く覺えた。

獨身者の知人の往時の夥伴のうちで、彼得堡に居るものは多く無かつた。近衛は戰場の任務に就て居たし、ドロオホフは卒伍に貶され、アナトオルは軍隊に入つて、何處か地方に居たし公爵アンドレエーは外國に居た、で、ピエールは前に好であつた風に夜を暮らす機會も無ければ、自分より少し年長で、自分が尊敬して居た朋友と、心を開いて打ち解けて談話を爲ることも能き無かつた。彼の時は、宴會とか、舞踏會とか、さも無ければ、公爵ヴァシイリの家で、公爵の妻の肥つた夫人や、娘の美人エレンの相手になることなどばか

りで、費されたのであつた。

外の誰ものやうに、アンナ・パアヴロヴナ・シェーレルは、ピエールに對する交際社會の態度に起つた變化を自分も又彼に對して見せた。

前の時分には、ピエールは、アンナ・パアヴロヴナの前では何時も、自分の云ふことが場外れで、氣が利かず、そして丁度のことが云へ無いのを感じた、肚で拵へて居るうちには氣が利いて居るやうに思はれた自分の文句が、口へ出すが最期、何だか半間なものになるのに反して、イポリイトの極く下ら無い言辭は、氣が利いて、面白く聞えるのを感じたのだ。ところが、今は、自分の云ふことは何樣なことでも必然『面白』かつた。アンナ・パアヴロヴナが左樣云は無いにしても、ピエールは、先方では左樣云ひ度いには云ひ度いのだが、ピエールに仰山らしく思はれてはならぬと差し控へて居るのだと見たのであつた。

千八百〇五年の冬の初に、アンナ・パアヴロヴナのお極まりの桃色紙の招待狀の一つを受けたのだが、その裡に斯ういふ文句があつた、『誰方も幾くら見ても見飽か無いと云つておいでの美くしいエレンに宅でお逢へになりますよ』

その一行を見ると、ピエールは初めて、自分とエレンの間に、他の人々の目に立つやうな何等かの連緣が出來あがりつゝあるのを感じた、そして、さう氣が付くと同時に、自分には果すことの能き無い義務を負はせられたかのやうに、ギョッとしたが、それでも、一方では、面白可笑しい想像のやうに思つて嬉しかつた。

アンナ・パアヴロヴナの夜會は最初のと同なじであつた、唯だ客の爲めに拵へて置た珍奇な面白い物は、今度はモントマアルでは無くつて、皇帝アレクサンドルがボッツダムに滯留して居た時の話だの、二人の高

貴な朋友が、人類の敵に對して大道を擁護する爲めに、永久不壞の同盟を誓つたことなどの最近の物語を持つて居る、伯林からホンの此頃着いたばかりの或る外交官であつた。

ピエールは、沈んだ態容のアンナ・パアヴロヴナに迎へられた、これは、ピエールが此頃父の伯爵ベズウホフを失したのを弔ふ意味であつたに違ひ無いのだ（誰も彼も、ピエールに向かつて、ピエールお前は今父親の死を甚く悲んで居るに違ひ無いのだと、始終ピエールに承知させて居る義務が自分等にはあるのだと感じた、その癖當人のピエールはその父親をロクに知つて居無かつた）。パアヴロヴナの悲さうな態容は、何時も綾に畏こき皇后マリイヤ・フェオドロオヴナ陛下の話になるが最期何時でも見せるのと全く同なじものであつた。ピエールはそれを嬉しく思つた。

アンナ・パアヴロヴナは、何時もの熟練で、客室での幾つもの集團の配置を整へた。一番大きい集團、その中に公爵ヴァシイリと幾人かの將官の居る連中が、外交官の傍に居る利益を得た。今一つの集團は茶飲卓子の周圍に集まつた。ピエールは第一の集團に入り度かつた、が、戰場での將官のイラ〳〵した昂奮、即ち、實行する間の無い、新しい非常な名案が續々として胸に浮んで來る心狀であつたアンナ・パアヴロヴナは、ピエールを見ると、上衣の袖へ指を付けて引き留めた。

『お待ちなさい、今夜は貴下の爲めにと考へて置いた寸法があるんですよ』

エレンを顧みて、微笑んだ。

『親愛なエレン、貴女をホントに好いてる家の伯母さんに何うぞ慈善を爲てあげてくださいよ。行つて、十分でも宜いから相手を爲て遣つてくださいな。貴女が餘まり退屈し無い爲には、われ〳〵の親愛なこの伯爵が必然一緒に行つてくださいますからね』

美人は伯母さんの方へと行つた、が、アンナ・パアヴロヴナは、ピエールに對して未だ何か最後の必要な處分を爲て置く筈の人のやうな態で、尙且ピエールを放さ無かつた。

『眞個に美くしいね、何うです』と、彼方へ泳ぎ去つて行く如何にも立派な品格の美人を指して、ピエールに云つた。『彼の態容振の見事さといふのはありませんね。彼れっ位の若い娘で居て、彼の取り爲し、彼の際の無い身の擧作なんですからねえ。心ばへから來るんですねえ。彼女を自分の物にする男は眞個に幸福ですわ。何んな交際下手な男だつて、彼女のご良人になれば交際場裡で素晴しい位地が占められますわ。確に左樣なんですよ。如何？。私は貴方のご意見が聞き度かつたばかしなんですよ』

ピエールは、全く本氣で、エレンの際の無い見事な身の擧作に就てのアンナ・パアヴロヴナの問に肯定的な返答を與へたのだ。彼がエレンのことを思つたとすれば、その思つたのは、エレンの美くしさか、で無くば、交際場裡でのその落ち着いた品格の高い沈默の非凡な能力か、に就てゞあつたのだ。

伯母さんは、自分の何時も居る隅で二人の若い人々を迎へた〳〵が、エレンを甚く好いて居るのを隱して、自分がアンナ・パアヴロヴナを恐れて居る心持の方を見せやうと骨折つて居たやうに見えた、二人を何うすれば宜いのか尋ねるとでも云ひさうに姪の方を一寸〳〵見た。アンナ・パアヴロヴナは今一度ピエールの袖へ指を着けて、云つた——

『此れからは、私の家で退屈する人があるなんて云ひつこ無しですよ』、そして、エレンを一寸と見た。

エレンは微笑んだ、その態容は、自分を見て嬉しがら無い人があらうとは、何うしても思ひ掛の無いことだと、云つて居さうであつた。伯母は咳嗽を爲、啖を飲み込み、そして佛蘭西語で、エレンに逢ふのを甚く

嬉しく思ふことを云つた、それから、ピエールに向いても同なじ笑顔で同なじ挨拶を爲た。度々途斷れる長長しい談話の最中に、エレンはピエールに振り返つて、誰に向いても見せる晴やかな美くしい笑顔を見せた。ピエールは、それに氣が付きさへ爲無い位、この笑顔には最早慣れつこになり、何とも思はは無くなつて居た。伯母は、その時ピエールの父親、伯爵ベズウホフの持つて居た喫烟草函の蒐集の話を爲て居た、そして、自分の喫烟草函を二人に見せた。公爵嬢エレンはその函の蓋に描いてあつた伯母の良人の肖像を見て吳れと云つた。

『多分ヴィンスの作でせう』と、名高い小肖像畫家の名を擧げて、ピエールは、云つた。彼は、大きい集團での物語を始終聞き澄まして居ながら、喫烟草函を手に取らうと、卓子越しに身體を曲げた。彼はその方へと動かうと起ちあがつた、が、伯母は、エレンの背部越しに函をピエールに渡した。エレンは、前へ屈んで、躱けた、そして、笑顔で見返つた、エレンは、何時もの晩のやうに、前も後も頸の所を極く低く裁つた當時の流行の型の衣服を着て居た。ピエールには何時も大理石のやうに見えたエレンの上半身が、彼の近視い眼の前に、その頸と肩の生きた美くしさを悉皆識別ることが能きる位接近して居り、それに接吻しやうと思へば、唯だ一寸と顔を下げさへすれば宜かつた位、自分の唇に近かつた。彼は、女の身體の溫味、香氣を感じ、女が動く度毎に、コオセットの軋む音を聞いた。彼は、長上衣と一緒になつて一つの體を成して居るエレンの大理石のやうな美くしさを見たのでは無かつた、衣服で蓋はれて居るばかりの女の身體の有らゆる快味を見、且つそれを感じた。で、一度これを見てからは、われ〳〵が說明された幻象に二度と立戻ることの能き無いと全く同なじに、彼はさうより外のものとしては、それを見ることが能き無かつた。

『では、貴下は、今まで、私が奇麗なことに一度も氣が付か無かつたの？』と、エレンは云つて居るやうに見えた。『私が女なのに氣が付か無かつたの？。えゝ、私は、誰のものにもなる——貴下のものにだつてなる——女なのよ』と、エレンの眼が云つた。で、その刹那にピエールはエレンが自分の妻になることが能きるのみで無く、尙又喜んでさう爲ることを感じ、また、何うしてもさう爲ら無ければならぬことなのだと感じた。

彼は、その刹那、エレンと列んで結婚の冠の下に立てゞも居たかのやうに、確にそれを知つた。何ういふ風にして、さういふ事に爲るだらうか？、そして、何時？。

彼は、それが宜いことだか何うだかさへ確には知ら無かつた（而も、何うかいふ理由で、宜い事ではあるまいといふ感を持つて居た）、が、それでも、宜い事だらうと思つた。

ピエールは眼を下げたが、又擧げて、今一度、彼が前に毎日その女を見たやうに、自分からはズッと離れた遠方の美人としてエレンを見やうと試みた。が、彼にはそれは能き無かつた。彼がさう能き無かつたのは、曠原の高い草の莖を霧の裡で見て、木だと思つて居た人が、草の莖だと氣が付いてからは、最早それを木と見ることの能き無いのと丁度同なじことなのだ。エレンは彼に恐ろしく近かつた。最早エレンは彼に對して勢力を及ぼした。で、彼とその女との間には、彼自身の意志を除いては、何等の障壁も無かつた。

『結構です、この小さい隅に暫時貴方がたを置いてきますよ。何うです、居心が宜ささうね』と、アンナ・パアヴロヴナの聲が云つた。

で、ピエールは、顏を眞赤に爲て、何か惡るいことを爲たのではあるまいかと忙わてゝ考へるやうにと骨折つた。誰も彼も、彼と同なじやうに、彼の肚の裡を過ぎつゝあつたことを善く知つて居るかのやうに思はれた。

少時經つてから、彼が大きい方の集團へ行くと、アンナ・パアヴロヴナが彼に云つた――

『彼得堡のお宅をご修繕中だといふぢやァありませんか』。(これは事實であつた、建築家がそれが必要だと彼に云つた、で、ピエールは、何の目的でといふでも無しに彼得堡の自分の大きい家を裝飾し直して居た)。『それは結構ですわ、ですが、公爵ヴァシイリの家を出てお了ひなすつては不可ませんよ。公爵のやうな善いお朋友を持つてお居でのは、眞個にお幸福なんですよ』と、公爵ヴァシイリに笑み掛けて、云つた。

『それは私には解つてることがあるんです。何うですね。それに貴下は未だ極くお若くつてお居でゞすわ。相談相手が無ければ不可ませんよ。私が老女の特權を振り舞したつて怒つちやァ不可ませんよ』。アンナ・パアヴロヴナは、總ての女が、自分の年齢のことを云つた後では、何か返答を待設けて止まるやうに、止まつた。『結婚なされば、それは別ですけどもね』。で、二人を一眼で一緒にするやうに見廻はした。ピエールはエレンを見無かつた、エレンもピエールを見無かつた。が、その女は尙且彼に恐ろしく近かつた。

彼は何か口の裡で云つて、顏を赤めた。

ピエールは家へ歸つてから、隨分長いこと就眠かれ無かつた、彼は自分の上に起りつゝあつたことを、いろ〳〵に考へ續けた。

何が起りつゝあつたのか?。

何にも無い。

唯だ彼は一つの事實を會得した、卽ち、彼が先方の小兒の時分から知つて居た女、その女に就いては、それが美人だと人から云はれると、別に何の考も無く、『あゝ、善い縹緻だよ』と云つたその女が、自分の物になるかも知れぬといふ事實を會得したのであつた。

『けれども彼の女は痴愚だ、俺は口づから、彼の女は痴愚だと云ひ〳〵したんだ』と、彼は思つた。『彼の女の爲めに俺の心の裡で起される感に何だか汚ない所がある。何だか正當で無い所がある。彼の女の兄のアナトオルが彼の女を戀し、彼の女も兄を戀し、世間にその噂が立つたんで、それで、アナトオルが遠方へ遣られたといふ話なんだ。彼の女の兄がイポリイトだ……父親が公爵ヴァシイリなんだ……何うも不可んな』と、彼は考へ込んだ、そして、さう思ひ廻らしたその瞬時に(その思案はドン終末まで押して行か無かつた)、自分が何時の間にか微笑んで居るのに氣が付いた、と共に、思案の他の連續が最初のものを横ぎつて表面へ出て來たことに氣が付き、それから、自分はその女のヤクザなことを考へ込んで居る傍から、何ういふ風にしてその女が自分の妻になるのだとか、何ういふ風でその女が自分を愛するとか、何ういふ風でその女が全然これ迄とは違つたものになるだらうとか、何ういふ風で自分が聞いたその女に關する總のことが悉皆虛傳だといふことになるだらうとか、いふやうなことを自分が夢みて居るのを自ら覺つた。彼は再、その女を公爵ヴァシイリの娘としては見ず、唯だ鼠色の長上衣ばかりで蓋はれて居るその女の身體全體を見たのであつた。

『けれども、いや、何故その考想が前に一度も起ら無かつたのかな?』。で、彼は更に、そんな事はあるべき筈で無く、自分の見る所では、この結婚には何だか汚ない、不自然な、不面目な所があるのだと、自分に向つて云ひ聞した、彼は、エレンのこれ迄の言語や、顏容、それから二人が一緒に居るのを見た時の人々の言語や、顏容を考へ出して見た。彼は、アンナ・パアヴロヴナが彼の家の話をした時の言語や、顏容を憶ひ起した、彼は、公爵ヴァシイリや其他の人々からさういふやうなことをいろ〳〵に仄めかされたことを憶ひ起した、で、彼は、明白に惡くつて、爲べきもので無いことを、何うにかして爲せられることになるかも知

れぬといふ恐怖の爲めに壓潰された。が、彼が自分に向かつて左樣云ひ表はして居るその直ぐ傍から、彼の心の他の隅ではエレンの姿がその有らゆる女らしい美くしさで表面へ浮び出るのであつた。

（二）

千八百〇五年の十一月に、公爵ヴァシイリは、視察の爲めに、四つの地方を旅し無ければならぬ無かつた。彼は、打捨り放しの狀態に爲つて居た自分の領地へ序に行つて見ることが能きるやうにと、さういふ任命を得るやうに爲たのであつた。彼は、途すがらアナトオルを、その聯隊の居る所で、捉まへ、そして、公爵ニコラアイ・アンドレエーヴィイチ・ボルコオン・スキイの所を、その金持の老人の娘に自分の子息を結婚させる見込で、尋ねることに爲て居た。

が、旅へ出て、さういふ新事件に手を出す前に、公爵ヴァシイリは、近頃は實際家で、即ち逗留中の公爵ヴァシイリの所で、終日暮らし、エレンの前では、戀を爲る若い男に能きる限りの痴愚らしさと、ソハ〳〵した樣子と、間抜さでありながら、未だ何の申し込みも爲無いピエールの方の片を付けやうと思つた。

『これは至極結構だ、が、何とかカタを付け無きやァ不可』と、公爵ヴァシイリは、ピエールが自分にさんざん恩になりながら（だが、可愛さうな奴だ）、この事件では自分に對して少し面白く無い行爲を爲ると認めて、或る朝、悲しさうな嘆息を爲て、自分自身に向かつて云つた、『若年……移り氣……うん、まァそれも爲方が無い』と、公爵ヴァシイリは自分の心の善いことの感を樂みながら、思つた、『が、何とかカタを付けなきやァ不可。明後日はエレンの命名日だ、客を呼ばう、それで、若し、奴が自分の爲べきことをやり得無かつたら、その時は、旨く行くやうにするなァ此方の仕事だ。左樣だ、俺の仕事だ。俺はあの女の父親なんだ』

アンナ・パアヴロヴナの夜會の後の眠られ無い、心の動搖した夜に、ピエールが、エレンとの結婚は自分の爲めには禍であると極めて、彼はその女を避けて、その家を去らうと決心をしてから六週間後になつても、ピエールはさういふ決心を爲た癖に、尙且公爵ヴァシイリの家を去ら無かつた、そして、日毎にだんだん多く人々の心では自分がエレンと一緒に思はれて行くこと、自分がその女に對する往時の見方に立戻ることの能き無いこと、自分が最早その女から自分を捥ぎ離して了まへ無く爲つて居ること、自分が自分の生活をその女のそれへ一緒にして了まふやうに爲るだらうといふこと、を感じて、慄然と爲た。尤も、唯だそれだけであつたら、ピエールは自分自身を抑へ付け得たかも知れ無かつたのだが、殆ど一日も公爵ヴァシイリの家で（客を招くことはこれ迄極く稀であつたが）客を招かぬことは無かつた、で、ピエールは、衆皆に不滿足な思ひを爲せず、誰にも當ての外づれた心持を爲せまいとすれば、その席へ出て行くより外に爲方が無かつた。

出勝ちな公爵ヴァシイリが偶に家に居るときには、彼はピエールに行逢へばその手を摯つて、無造作に自分の綺麗に剃つた皺だらけの頰をさし付けて接吻させ、そして『また明日お目にかゝらう』とか、『食事に加はつてください、で無くば、以來絶交ですぞ』とか、『君の爲めに、今日は家に居ます』とか、いふやうな言語を掛けるのであつた。

が、公爵ヴァシイリは、ピエールの爲めに（だと云つて）家に居た時も、ピエールには決して二語とは口をきか無かつたけれども、ピエールは公爵を失望させ得られさうに感じ無かつた。毎日彼は獨同なことを幾度も繰り返して云つた。『俺は何うしても彼の女を理解し、彼女が何樣な女なのか見窮めて了まは無きやァ不可。俺の前の考想が間違つて居たのか、それとも、今が間違つて居るのか知ら？。いや、彼の女は痴愚ち

やア無い、彼女は好い娘だ』、ピエールは斯う幾度も一人で云つた。『彼の女は決して間違を爲たことは無い、間の拔けたことを云つたことは無い、彼の女は餘まり口をきか無い、けれども、云ふことは何時でも率直で明瞭だ。だから、痴愚なんぢやア無い、彼の女はこれ迄一度も懶ぢた樣子であつたことは無い、又今も懶ぢては居無い。して見れば、彼の女は腹の惡りい女では無い』

ピエールが、エレンの居る前で、思案を爲、考へて居ることをその儘口へ出して獨語のやうに云ふことが度々あつた、そして、さういふ度毎に、エレンは、自分はその事柄に何の興味も持つて居無いことを示めすやうな簡單な然し適切な言語か、或は、自分の方が優つて居ることをピエールに何よりも瞭然に證明する默まつた笑顏と一瞥かで、答へるのであつた。何な思案も、その微笑に比べては、下ら無いものだと認めた所は、エレンの方が道理であつたのだ。

エレンは、此頃では、何時も嬉しさうな打解けた笑顏をピエールに向けた——その微笑は、彼ばかりに關係したもので、何時もその女の顏を飾つた交際場裡での微笑よりは覔然意味の多い何物かに滿ちて居た。ピエールは、誰もが、今は唯だ、自分が一語云ひ、或る線を越えるのを待つて居るばかりであるのを知つた、そして、自分は晩かれ早かれその線を越えるだらうと知つた。が、謂ひ知らね恐怖が、この恐ろしい一歩を運ぶといふことを唯だ思つたばかりでも、襲つて來るのであつた。彼が、慄然とする奈落の方にだん〳〵と引寄せられるのを感じたその六週間の經つうちに、何千度も、ピエールは自分に向つて云つた、『けれども、一體これは何う爲たことなんだ？。俺は斷然たる處置を執ら無きやア不可。俺には決斷が無いのかなア？』

彼は、決斷を爲やうと骨折つた、が、彼は、兼々自分が持つて居ると思ひ、又實際持つても居た意志の力を、この場合は持つて居無いことを感じて、慄然と爲た。

ピエールは、自分自身で全く純潔だと感じる時ばかり强いといふ種類に屬する人間であつた。で、アンナ・パアヴロヴナの家で喫烟草函を受取らうと身體を屈めながら感じた情慾の感覺に打勝れた日から以來は、何時も、その衝動の罪深いものであることを知らず〳〵の間に感じて居て、それが爲めに、意志が痲痺させられて了まつたのだ。

エレンの命名日には、公爵ヴァシイリは、夫人の所謂る自分たちの人々だけの、卽ち、朋友や親類だけの、小さい晩餐會を催した。さういふ朋友や親類は悉皆その日はその若い婦人の生涯の大切な日に爲るのだらうと感じさせられた。客は晩餐に坐つた。昔は美人であつた重々しい態容の肥つた女の公爵夫人クラアギンが、兩脇へ上客——年取つた將官とその夫人、それから、アンナ・パアヴロヴナ・シェーレルを——控へて、女主人の席に就て居た。卓子の底の方に、今少し若い、今少しエラく無い客が坐り、そして、其所に又家族の連中として、ピエールとエレンが列んで坐つて居た。

公爵ヴァシイリは晩餐に加はら無かつた。彼は、非常な好い機嫌で、順々に客の傍へ坐りながら、卓子の周圍を彼方此方と歩き廻つた。ピエールとエレンを除けた誰もに、二つ三つの無造作な心持の好い言語を掛けた、二人の居るのには殆ど氣が付か無いやうに見えた位であつた。

公爵ヴァシイリは會集全體を陽氣づかせた。

蠟燭がクワツ〳〵と燃えた、卓子の上には銀だの上硝子が燦然し、婦人たちの飾だの、肩章の銀や金が輝いた。家僕どもは赤い上衣で、卓子の周圍を內外へ縫つて歩いた。食刀、酒盃、皿のカチヤ〳〵いふ音が爲、卓子中方々で別々に話す熱心な話聲が聞えた。一方の端では、年取つた侍從が年取つた男爵夫人に向つて、その夫人に對する自分の熱心な戀愛の誓言して、ハア〳〵笑はして居るのが聞えた。今一つの端では、

マリイヤ・ヴィクトロオヴナといふ女の失策の物語が出て居た。中央では、公爵ヴァシイリが、一座の注意を自分自身の上に集中させた。唇の上に微笑を一寸〳〵漂はせて、前の水曜日の樞密院會議で、彼得堡の新軍政總督のセルゲエー・クズミイチ・ヴィヤズミイティノフが、皇帝アレクサンドル・パアヴロヴィイチからの勅諭――當時世間で噂の高かつた――を受けて、それを讀んだ物語を婦人たちに爲て居た。

皇帝は、軍中からセルゲエー・クズミイチに勅書を寄せて、八方から自分は、人民の忠心の表證を受け、殊に彼得堡からの上表が取り分け滿足であつて、自分はさういふ人民の頭に立つことの面目を誇りとし、さういふ忠心に負か無いやうに爲る積りだと云つたのであつた。その勅諭は、『セルゲエー・クズミイチよ。八方から報告が予に達するが』云々といふ言詞で始まつて居た。

『では、クズミイチは、「セルゲエー・クズミイチ」といふ所より先きへは決して行か無かつたんですね？』と、一人の婦人が尋いた。

『えゝ、えゝ、一綴も先きへは』と、公爵ヴァシイリは笑ひながら答へた。『「セルゲエー・クズミイチ……八方から」。「八方から……セルゲエー・クズミイチ……」。哀れなヴィヤズミイティノフはそれから先へ少しも進むことが能き無かつた。五六度その勅諭を讀み始めたですが、「セルゲエー」と讀むや否や、鼻を啜り込んで……「クズ……ミ……イチ」――涙……それから、「八方から」は、啜泣のなかに消えて了まつて、それで、その先は寸毫も讀め無かつたんです。で、又手巾が出、それから、又「セルゲエー・クズミイチ八方から」、で、涙でした……だから、われ〳〵は他の人にそれを讀むやうに賴みました』

『「クズミイチ……八方」……で、涙……』と、誰かが繰り返しながら、笑つた。

『意地の悪りいことを云ふもんぢやァありませんよ』と、その者に向けて指を振りながら、卓子の彼方側

から、アンナ・パアヴロヴナが云つた。『彼の人、われ〳〵の好いヴィヤズミイティノフは、眞個に立派な善い人なんですわ』

誰も彼も心持好く笑つた。卓子の上の方上客の席の方では、誰も、いろ〳〵な陽氣な傾向の影響の下に在つて、好い機嫌のやうに見えた。唯だピエールとエレンは、卓子の殆ど末の端に列んで默然で坐つて居た。雙方の顏に、セルゲエー・クズミイチとは全く關係の無い抑へては居るが然し晴やかな微笑――各自の感情を恥ぢての微笑――が出て居た。

他の人々は何れ程陽氣に笑ひ、話し、冗談を云つて居ても、ライン酒や、スチウや、氷を幾くら旨さうに片付けて居ても、幾くら、衆皆が若い二人の方を見無いやうに氣を付けて、二人のことは一向無頓着に、眼中に置かぬやうに見えて居ても、それでも、尙且、二人の方へ時々竊然と向けられる斜視で見ると、セルゲエー・クズミイチの物語も、哄笑も、料理も悉皆表面のテレ隱しであつて、一座全體の注意が悉くその二人――ピエールとエレン――の上に眞個に集中して居たことが、何と無く覺り得られた。公爵ヴァシイリはセルゲエー・クズミイチが鼻を啜る態容を眞似した、そして、娘の方を一寸とさへ見無いやうに爲て居るうちも、又笑つて居るその刹那にも、彼の顏容は、『うん、うん、萬事旨く行つてるな、今日はいよ〳〵全然極まるわい』と、云つて居るやうに見えた。

アンナ・パアヴロヴナは、『われ〳〵の善いヴィヤズミイティノフ』を笑つた公爵に向けて指を振つたのだが、その刹那に、ピエールの方へ一瞥を飛ばしたその女の眼のうちで、公爵ヴァシイリは、未來の婿と自分の娘との幸福に對する祝賀を讀んだ。

年取つた公爵夫人クラアギンは、悲しさうな溜息で隣席の婦人に酒を羞めながら娘の方を腹立たしさうに

見て、その溜息の裡で、斯う云つて居るやうに見えた――

『最早、貴女、お互に甘い酒でも飲んで居るより外面白いことは何にも無くなりました、若い者たちが、彼樣なに無遠慮にこれ見よがしに嬉しさうに擧作ふ時代が來たんですから』

『何だつて、俺は此樣な下らん事をさも面白さうに、話して居るんだらう』と、外交官は思ひ、二人の戀人の嬉しさうな顏を横眼で見て、『あれこそ幸福なんだ』

その一座を結び合す共通の紐になつて居た小さな下ら無いことや因襲的な興味の最中へ、二人の美くしい健康な若い者が相互に引き付けられ合ふ率直な感が飛び込んだ。で、この人間的な感が有らゆる物を壓倒し、一座の因襲通りのお饒舌を根こそげ征服して了まつた。冗談も可笑しく無くなり、世間話も面白く無くなり、陽氣は何う見ても無理に引立てられて居るのであつた。客ばかりで無く、卓子に侍して居る從僕どもさへ、同なじことを感じて、晴々した顏をして居る可愛らしいエレンと、ピエールの廣い、赤い、嬉しさうな、不安らしい顏ばかり見て、自分たちの勤務を忘れて居るやうに見えた。蠟燭の光さへその二つの嬉しさうな顏の面へ集中して居るやうに見えた。

ピエールは、自分が總てさういふ物の中心なのだと感じ、そして、さういふ位地が嬉しくもあると同時に當惑でもあつた。彼は、何か心を打込んだ仕事に全然氣を取られた人のやうであつた。物が碌に見えず、聞えず、何も彼も寸毫も解から無かつた。唯だ時々、現實に對する斷片的の考想や印象が、唐突に心の裡へ閃めき出た。

『では、最早これでいよ〳〵なのかなア』と、ピエールは思つた。『で、何ういふ風で全然了まつたのか知ら?。斯樣なに速くなのか。俺には、この事は、彼の女の爲めとか、俺自身の爲めとかばかりでは無く、誰

もの爲めに、何うでも斯うでも出來て了まは無ければなら無いものな事が今解つた。奴等は悉皆これを飽くまで待ち設けて居る。衆皆それが左樣爲ることゝ何處までも確信して居て、俺には最早奴等を失望させる餘地は無い位なんだ。が、何ういふ風でこの事が出來ちまつたのだらうな?。それは、俺には分らん、けれども、何うしても左樣爲るだらう、左樣爲るだらうよ』と、ピエールは、自分の眼にピッタリ附着て居る位近くにあるキラ〳〵する肩をジロ〳〵見ながら、考へ込んだ。

と、突然に、彼は何だか解からぬ愧恥を感じた。自分が、一座の注意の唯だ一つの目的であることや、他人の眼からは幸福な人間であることや、醜い顏で、ヘレンを領したバリスのやうな者であるのなどを、如何にも氣が利か無く感じたのだ。

『だが、必定、何時も斯樣なのに違ひ無い、左樣で無きやアならんのだ』と、彼は自ら慰めた。『でも、俺は斯う爲らせる爲めに何か爲たのだらうか?。斯樣なことには何時から爲り始めたのだらう?。俺は、公爵ヴァシイリに伴れられて莫斯科から此所へ來た、その時は何でも無かつたんだ。それから後、この家に逗留すべきで無かつたといふ理由が何か有つたらうか?。で、俺は、この女と骨牌を弄つた、そして、この女の手提袋を取り上げた、それから、一緒に氷滑りに出掛けた。何時これが始まつたらう? 何時斯樣なことがそも〳〵起つて來たらう?』

で、彼は今、その女の傍に、その許婚者として坐わり、その女の接近、呼吸、擧作、美くしさを、聞き、見、感じて居るのだ。と、突然、非常に美くしいのは、その女では無くして、自分自身であり、それで、衆皆が左樣なに見て居るのは自分であるので、自分は、衆皆の感服が嬉しくつて身體を背り反らせ、頭を高く擧げて、自分の幸福を喜こんで居るやうな氣が爲て來た。唐然に、再度目に自分に向いて掛けられた聲、聞

き慣れた聲を聞いた。

が、ピエールは、何を云はれたのか寸毫も解から無かつた位考へ込んで居た。

『ボルコオンスキイの消息は何時聞いたのが一番近いのか、貴下に尋て居るのですよ』と、公爵ヴァシイリはそれを三度目で繰り返した。『甚く憮然してるぢや無いか、君』

公爵ヴァシイリは微笑んだ、そして、ピエールは、衆皆、衆皆殘らずの人が、自分とエレンに向いて微笑んで居るのを見た。

『えゝ、それが何うなんだ、衆皆善く知つてる癖に』と、ピエールは、自分に向つて云つて居た。『それが何うなんだ？　それは眞實なんだ』、で、彼は、自分に向つて、優しい小兒らしい微笑を爲た、と、エレンも微笑んだ。

『何時手紙が來たね？。オルムッからかね？』と、何か論じて居た問題の爲めにそれを知り度かつた公爵ヴァシイリが繰り返へした。

『他人は何うして左樣な下ら無いことが云へたり考へられたりするのかなァ』と、ピエールは思つた。

『左樣です、オルムッから』と、彼は、溜息して答へた。

ピエールは、衆皆の後に隨いて、自分の相手の婦人を晩餐から客室へ伴れて行つた。客は暇乞を爲始めた、そして、幾人かは、エレンに別れの挨拶を爲ずに行つて了まつた。又幾人かは、大切な位地からエレンを離れさせまいと思つて、一寸とその傍へ行つたばかりで、エレンが送くつて出やうと爲るのを斷わつて、急いで出て行つて了まつた。外交官は、銷沈た態で默まり込んで、客室を出た。彼は、ピエールの幸福に比べては、自分の外交上の閲歷が全然空の空であることを現然と感じたのだ。年取つた將官は、自分の妻が脚

は何ういふ案配だと尋た時に、妻に向かつて腹立たしく唸つた。『老臺奴』と、彼は思つた。『エレエーナ・ヴァシイリエヴナを見ろ、彼女は五十歳に爲らうが尙且美くしいぞ』

『最早、お祝ひ申して宜ございますね』と、アンナ・パアヴロヴナは、公爵夫人クラアギンに熱心に接吻しながら、その夫人に囁いた。『私頭痛が爲無いのでしたら、今少居るんですけども』

公爵夫人は何とも返答し無かつた、夫人は娘の幸福を羨む念に惱まされて居た。

客が暇乞を爲て居る間、ピエールは、小さい客室で、エレンと二人つ限り對座で、坐わつたまゝにして置かれた。この六週間以來、前には幾度も、エレンと對座で置かれたことがあつたけれども、彼は、エレンに戀愛を語ら無かつた。今、彼は、それが避け難いことを感じた、が、その最後の一歩を運ぶ決心を爲ることが能き無かつた。甚く恥かしく感じた、今エレンの傍に居ながら、誰か他の人の代りを勤めて居るやうな氣が爲た。『この幸福はお前のものでは無いぞ』と、何とも知れぬ心の裡の聲が云つた。『この幸福は、お前が心の裡に持つて居るやうなものを、その心の裡に持つて居無い人々のものなんだ』

が、彼は、何かしら云は無ければなら無い、で、物を云ひ始めた。彼は、エレンにその晩は面白かつたか何うか尋いた。何時ものやうな率直な返答で、エレンは、その命名日は、これまでのうちでの一番面白かつたのゝ一つだと答へた。

極く近い親類二三人は未だ後に殘つて居た。さういふ連中は大きい客室に坐つて居た。公爵ヴァシイリはダラけた歩調でピエールの方へと歩いて來た。ピエールは起つて、最早晩いからと注意した。公爵ヴァシイリは、ピエールの云つたことは、人が自分の耳を信ずることが能き無い位途方も無いことであつたとでも云ひさうに、荒々しい不思議さうな顏容をピエールに向けた。が、酷しい表情は直ぐ通り過ぎた、そして、公

爵ヴァシイリは、ピエールの手を摯り、席へ推し坐らせて、懐かしさうに微笑んだ。

『これ、エレン』と、彼は、直ぐに、何時もの優しさの無造作な調子で娘に聲を掛けた、さういふ調子は小兒を幼時から可愛がつた親たちには自然に出て來るものなのだが、公爵ヴァシイリの場合は、他の親たちを眞似してさう能きるやうになつたのみであつた。で、彼は、再ピエールに振り向いた、『セルゲエー・クズミイチ、八方から』と、直衣の一番上部の釦を外しながら繰り返した。

ピエールは微笑んだ、が、彼の微笑は、公爵ヴァシイリがその刹那に興味を持つて居たのは、セルゲエー・クズミイチの物語では無いのをピエールが理解したことを我知らず見せた、そして、公爵ヴァシイリは、ピエールがさう氣が付いたことを知つた。公爵ヴァシイリは唐突に何か口の裡で云つた、そして、行つて了まつた。ピエールには公爵ヴァシイリが確にアタフタして居るやうに見えた。この年配な世慣れた人のアタフタして居る樣子が、ピエールは氣の毒に爲つた、彼はエレンを見返つた——と、エレンも、彼の氣の故かも知れぬが、アタフタして居た、そして、そのジロリと見た眼は、『もし、それは貴下自身の咎よ』と、云つて居るやうに見えた。

『俺は境界線を何うしても越え無きやァならん、が、俺には駄目だ、俺には駄目だ』と、ピエールは思つた、で、再他の事柄、セルゲエー・クズミイチのことなどを話し始めて、自分は悉皆は聞損なつたが、その物語の要點は何ういふのかと尋いた。エレンは、笑顔で、自分もそれを知ら無いのだと答へた。

公爵ヴァシイリが客室へ行つた時には、公爵夫人が、年取つた婦人と、聲を潜めて、ピエールのことを話して居た。

『それはもう、眞個に立派な緣には相違無いんです、けども、幸福かといふことになりますとねえ、貴

女……』

『緣組は天で極まるものなんですよ』と、年取つた婦人が答へた。

公爵ヴァシイリは一番遠方の隅へ歩いて行つて、婦人たちの物語を聞か無かつたかのやうに、長椅子に坐つた。彼は眼を瞑つてウトウトして居るやうに見えた。頭は垂り始めた、と、彼は自分を振るひ起した。

『アリイヌ』と、彼は妻に云つて、『行つて、樣子を見て來て吳れ』

公爵夫人は戸口へと歩み寄つた、意味に充ちて居る、無頓着を裝つた顏容でその傍を通りながら、小さい客室を一寸と覗いた。ピエールとエレンは坐つて、前のやうに話して居た。

『矢張り、前の儘』と、夫人は、夫に答へて、云つた。公爵ヴァシイリは顏を顰めて、一方へ口を歪めたが、頰部が、さういふ場合のこの人の特徵の不愉快さうな粗暴な表情でピクピクした。彼は自分自身を振るひ起し、起ちあがり、頭を振り反らし、そして、斷乎とした歩調で、婦人たちの所を通り越して、小さい客室へと向かつて行つた。彼は、ピエールの所へ、速歩に、嬉しさうに歩いて行つた。公爵の顏の嚴肅さの非常なものであつたのは、ピエールがそれを見て、何事かとドッキリして起ちあがつた位であつた。

『全く神のお蔭だ』と、彼は云つた。『家妻から悉皆聞きました』。彼は、一方の手でピエールを抱き、今一つの方で娘を抱へた。『君に。エレン。私は實に、實に嬉しい』。彼の聲は震へた。『私は君のお親父を愛した……で、此女は君に善い妻になるだらう……神の祝福の君たちの上にあらんことを……』、で、娘を抱き、それから、再ピエールを抱き、年取つた唇でピエールに接吻した。涙が眞個に頰部に濕つて居た。『アリイヌ、此所へおいで』と、彼は呼んだ。

公爵夫人は入つて行つて、又泣いた。年取つた婦人も又眼へ手巾を當てた。二人はピエールに接吻した、

そして、ピエールは幾度も可愛らしいエレンの手に接吻した。少時經つと、二人は再對座にして置かれた。

『總べてこれは斯樣あるべきことで、何うしても他に爲りやうは無いんだ』と、ピエールは思つて、『だから、それが善いことか、左樣で無いか、尋ねるのは愚なことなんだ。斯う極まつて居たんだから善い事なんだ、これで、最早前にあつた苦しい中ぶらりんの狀態は全く無くなつて了まつたんだ』

ピエールは默まつて自分の許嫁者の手を摯つて、その綺麗な胸の高まつたり、低くなつたりするのを見詰めた。

『エレン』と、彼は聲高く云つた。で、止まつた。『斯ういふ場合には特別な何かを云ふものなんだが』と、ピエールは思つた、が、斯ういふ場合に云ふのが何ういふことなのか、キッチリとは憶ひ起せ無かつた。彼はエレンの顏をジロリと覗いた。エレンは、彼に近々と前に身體を曲げた。その顏はポーッと赤く爲つて居た。

『さア、それをお除りなさい……それを……』と、エレンはピエールの眼鏡を指した。

ピエールは眼鏡を脫つた、と、彼の眼の裡には、眼鏡を脫ると、人々の眼が持つやうなヘンな眼付の外に、不安の不審の樣子が有つた。彼は、エレンの手の上へ顏を曲げて、それに接吻しやうと思つたらしい。が、自分の頭を殆ど暴つぽく動かして、エレンはピエールの唇を捉らへ、自分のへそれを推し付けた。ピエールは、女の顏の急に變つた、不愉快に上氣した表情に驚かされた。

『最早、全く遲い、最早何うしても駄目だ、それに俺はこの女を愛して居る』と、ピエールは思つた。

『私はお前を愛して居る』と、彼は、さういふ場合に云ふべき言語を憶ひ起して、云つた。が、その言語の響の勢ひの無さと云つたら、彼は、自分でも恥入つた位であつた。

六週間經つて、彼は結婚した、そして、世間で云ふ、綺麗な妻と、何千萬の金錢との幸福な持主に爲つた、彼は、ベズウホフ家代々の、新たに裝飾した彼得堡の邸宅を住居に爲た。

（三）

千八百〇五年の十二月に、公爵ニコラアイ・アンドレエーチ・ボルコオンスキイは、公爵ヴァシイリから、子息を伴れて、尋ねる積りだといふ前振れの手紙を受けた。

『私は今視察に巡回中です、百露里は、甚深の尊敬を表する恩人の貴下をお尋ねする私には、唯だ一歩の寄り途に過ぎません』と、公爵ヴァシイリは書いた。『伴アナトオルは、軍隊に加はる途中私と同行して居ります、父親たる私の先例に從ひ、貴下に向かつて彼がかねゞ抱いて居る甚深の崇敬の念を彼の口づから貴下に對して表白することをお許し下さらば本懷の至でございます』

『あゝ、マリイを世間へ伴れて出る必要は寸毫も無かりさうですね、望み人が彼方からヅン〳〵推し掛けて來るんだから』と、小さい公爵夫人は、それを聞くと、フィと何の氣無しに云つた。公爵ニコラアイ・アンドレエーチは顏を顰めた、そして、何にも云は無かつた。

手紙が來てから二週間目に、公爵ヴァシイリの從僕等が、或る夕方、主人に前立つて着し、そして、その翌日、公爵ヴァシイリ自身が子息を伴れてやつて來た。

老ボルコオンスキイは、これ迄何時も、公爵ヴァシイリの性格を蔑視で居た、そして、その念が、公爵ヴァシイリが、ボオルとアレクサンドルの新治世の下に、高位と榮達とに進んで以來、尙一層強く爲つたのであつた。所で、手紙と、小さい公爵夫人の口振とで、訪問の目的が解つたので、公爵ヴァシイリに對する老公

爵從來の不快の念は、その胸の裡で、敵意と侮蔑との感に移つて了まつた。公爵ヴァシイリのことを云ふ時は、何時でも、腹立しさうに鼻息を荒くした。公爵ヴァシイリの着くことに爲つて居た日は、老公爵は取り分け、不快さうで、機嫌が惡かつた。さう機嫌の惡かつたのは、公爵ヴァシイリが來る爲めであつたのか、それとも、もと〳〵機嫌が惡かつたが爲めに、公爵ヴァシイリの來るのが殊に不快であつたのか、何方だか、誰にも分から無い。が、兎に角機嫌が惡かつた、で、朝早くティフォンは、建築師が報告を爲に公爵の所へ行かうと爲るのを止めた。

『彼の足音をお聞きなさい』と、ティフォンは、公爵の足音に、建築師の注意を喚びながら云つた。『ベッタリ踵を着けて歩いて居なさるんだ……斯樣な時は、何時もの……』

が、九時になると、老公爵は、黑貂の襟の着いた短い天鵞絨の毛皮裏の外套を着、黑貂の帽子を冠つて、何時ものやうに、散歩に出て行つた。前の晩雪が降つた。公爵ニコラアイ・アンドレエーチが歩いて行く溫室への路は掃除されて居た、掃いた雪の上に掃目が殘つて居、鍬が、兩側で路を區劃つて居る雪のパサ〳〵した堤に刺つたまゝで、置いてあつた。公爵は溫室、召使等の住居、外屋などを、顏を顰め、默まつて歩き越した。

『雪橇が來られるかな？』と、彼は、彼と同なじな顏容と擧作で、家へ彼を送り込んで居た、謹んだ態樣の用人に尋いた。

『雪は深うございます、閣下。本路も掃くやうに申し付けましてございます』

公爵は首肯いた、そして、昇降段へと近付いて居た。『神樣、有り難うございます』と、用人は思つた、『暴風雨は通り過ぎたぞ』

『雪橇を着けますのは骨でございませう、閣下』と、用人は云ひ添へた。『承まはりますれば、閣下、大臣の御訪問がございますさうで』

公爵は用人に振り向いて、睨むやうな眼容で見詰めた。

『えゝ？。大臣？。何んな大臣だ？。誰がお前に命令したのだ？』と、公爵は、鋭い、意地惡るい聲で、云ひ始めた。『私の娘、公爵孃の爲めには、お前は路を掃除は爲んで置いて、大臣の爲めには掃除するのか。私には、大臣も何も無いぞ』

『閣下、私が推量いたしましたには……』

『なに、貴樣が推量した』と、公爵は、だん〳〵急き込み、だん〳〵斷片的な言語になつて叫んだ。『貴樣が推量した……山賊奴等。惡黨ども。……推量するたア何んなことだか忘れんやうに敎へて遣るぞ』、で、杖を擧げて、アルバティーチに向けて振り廻した、で、用人が我知らず逡巡つて、打擊を遁れ無かつたら、杖は用人に當つたらう。『貴樣が推量した……惡黨奴……』と、彼は尙且急き込んで叫んだ。が、アルバティーチが、打擊を躱けた自分の無禮に驚いて、公爵の傍へグッと進み寄つて、禿頭を恭くしく公爵の前に垂げたけれども、或は全く彼が左樣した爲めかも知れぬが、公爵は、最早杖を擧げ無かつた、そして、『惡黨奴等……路を元の通り埋めろ……』と、尙且叫びながら、居室へと駈け込んで行つた。

公爵孃マリイヤとマドモアゼル・ブウリアンヌは、老公爵が機嫌を損じて居ると善く承知して、晝食に老公爵の出て來るのを立つて待つて居た。マドモアゼル・ブウリアンヌの嬉しさうな顏容は『私は左樣なことは寸毫も知らず無い、私は平常と全く同なじよ』と、云つて居るやうであつたが、公爵孃マリイヤの方はと云ふと、伏眼になつて、蒼い顏で、甚く恐がつて、立つて居た。公爵孃マリイヤに取つて一層辛らかつたのは、自分